

ハイデガー「事実と思想」の真実と虚構  
——ハイデガーの「弁明」再論——

奥 谷 浩 一

要 旨

マルティン・ハイデガーは、第二次世界大戦後になって、彼自身がフライブルク大学学長でありナチ党員でもあった時代を回顧する「1933/34年の学長職。事実と思想」と題する小論を書き、これを遺稿管理人の手に委ねた。彼の死後の1983年になって初めて公刊されたこの小論は、実質的にハイデガーの「弁明」ともいうべき内容をもつものであり、ハイデガー自身による時代の証言としてハイデガー・ナチズムにかんする公式的な見解の絶えざる典拠としての役割を果たしてきた。彼はこの小論のなかで、真実を隠蔽したり、あるいは真実を部分的に語りながらもこれにいくつもの虚偽を絡み合わせて、自らのナチへの深い関与を事実とは逆に描き、あたかも彼がナチに対する批判者であるかのように装ったり、あるいは自らのナチ関与を認めざるをえない場合でも、これが最小限度のものであったかのように自己演出している。本論文では、我が国ではこれまであまり研究されてこなかったこの小論を主な分析の対象として、ここ十数年の間に急速に進展してきたハイデガー・ナチズム研究の成果を踏まえながら、ハイデガーの作為と虚構とを暴くとともに、ハイデガー・ナチズムの歴史的な真実を明らかにし、そこに秘められたハイデガーの人物像と哲学思想の問題点を抉剔することにしたい。

[キーワード：ハイデガー哲学、ナチズム、力への意志、闘争、はるかなる任務]

目 次

- 第一章 問題の所在と本稿の課題
- 第二章 ハイデガーが学長を引き受けた動機と学長選挙の経緯
  - (一) フライブルク大学学長選挙の経緯と背景
  - (二) 学長職を引き受けた動機について
  - (三) ナチ入党の経緯をめぐって
- 第三章 学長時代のハイデガーの思想と行動
  - (一) 学長演説にかんする「弁明」
  - (二) 党員学長としてのハイデガーの活動
  - (三) ハイデガーの大学外での野心
  - (四) いくつかの密告事件への関与
  - (五) トートナウベルク合宿事件
- 第四章 学長職辞任の真相をめぐって
  - (一) 学長職辞任にいたる経過
  - (二) 二人の学部長に対する罷免要求をめぐって

- (三) 文部大臣とハイデガーの会見
  - (四) リプアリア解散命令とその撤回事件
- 第五章 学長職辞任後のハイデガー
- (一) 学長職辞任後にハイデガーの「転機」はあったのか
  - (二) ナチ内部の思想闘争とハイデガーに対する「監視」をめぐる
  - (三) ハイデガーとイエズス会および「白ばら」事件とのかかわり
  - (四) ハイデガーに対する「出版弾圧」は事実か
  - (五) 国際会議等への参加「妨害」はあったのか
- 第六章 「事実と思想」の思想
- (一) ナチ革命と「勃興」への確信
  - (二) 責任の転嫁と居直りの姿勢
  - (三) 「力への意志」の支配と独善的な歴史観
- 第七章 結論と今後の展望

## 第一章 問題の所在と本稿の課題

マルティン・ハイデガーは、第二次世界大戦におけるナチス・ドイツの敗北後、フランス占領軍によって行われたフライブルク市における非ナチ化または政治的浄化政策の遂行過程のなかで、典型的なナチと見なされていた人々と同様に、彼が同市に建てた住居の明け渡しと蔵書の差し押さえにかんする指令を受けただけでなく、フライブルク大学学長時代以来ナチス黨員として活動したことの責任を問われて、軍事政府のもとに作られた政治的浄化委員会から被疑者として査問を受けることになった。1945年7月から開始されたこのいわゆる「ハイデガー裁判」は、ハイデガーに対する評価をめぐる政治的浄化委員会内部で委員の意見が対立したり、ハイデガー哲学の影響がフランスにも広がり始めたことにたいする憂慮もあって当初の寛大な所見と処置がいつそう厳しく先鋭なものへと変更されたり、これに対してハイデガー自身もかつての友人ヤスパースにも所見を求めて彼からの援助をあてにするなど、フライブルク大学評議会および哲学部をも巻き込み、複雑な紆余曲折の過程を織り込んで展開された。この「ハイデガー裁判」は、年金付きの名誉教授として退職することを条件に妥協しようとしたハイデガーの思惑を完全に裏切って、結局は1946年12月にバーデン州文部大臣によるハイデガーの講義活動の無期限停止、大学における彼の職務の停止、翌年末をもつての給与打ち切りというきわめて厳しい通達によって決着がつけられたのであった。この事件の経緯は、とりわけフーゴ・オット原資料にもとづいた詳細な研究によって明らかにされている<sup>(1)</sup>。

ハイデガーは自らのこうした危機的状況に迫られて、フライブルク市長、フライブルク大学学長、政治的浄化委員会などにたいして一連の書簡を提出することで自己弁明を行うことを余儀なくされた。ハイデガー自身によるこうした書簡による自己弁明のうち、主なものには、(1)ハイデガーが第二次大戦におけるナチス・ドイツの敗北後、フライブルクに建てた住居の明け渡しと蔵書の接収をフランス占領軍当局と市長から求められて、これに抗議して1945年7月16日に市長宛に書いた手紙、(2)占領軍の意向のもとにバーデン州につくられた政治的浄化委員会

が同年7月23日にハイデガーを被疑者として査問して「ハイデガー裁判」が開始されたあと、フライブルク大学評議会および哲学部でもハイデガーの処遇が議論されるなかで、同大学学長がハイデガーに対して彼とナチ党とのかかわりにかんする問いかけを行い、これにたいしてハイデガーが11月4日付けで返答した手紙、(3)こうした事態の進行のなかでおのれの政治的立場を悪化させたハイデガーが12月15日付けで政治的浄化委員会議長コンスタンティン・フォン・ディーツェ宛に提出した手紙、などがある。何度かにわたって繰り返されたハイデガーのこうした自己弁明の基本路線は、当初は彼に対して同情的だと見られた浄化委員会の見解が次第に厳しいものへと急変していく過程のなかで、次第に強固なものとなっていくと考えられる。

これらの書簡のほかに、ハイデガーが自らと権力を掌握したヒトラーおよびナチズムの運動との関わりについて直接にまとまったかたちで言及している文書としては、(4)1950年4月になってバイエルン芸術アカデミーから講演を依頼されたハイデガーに対してバイエルン州議会とミュンヘン市参事会から激しい抗議と非難があり、これを受けて同年6月6日の講演終了後の同月24日に『南ドイツ新聞』に投稿しようとして書かれたが公表されなかった草稿、(5)1966年9月23日に行われたがハイデガーの遺志によって彼の死後の1976年5月になって初めて雑誌『シュピーゲル』誌上で公表されたインタビュー（以下、『シュピーゲル』対談と称する）、そして(6)1983年になってマルティン・ハイデガーの息子のヘルマンが、1933年5月27日に行われた父のフライブルク大学学長就任演説の復刻とともに、自らの序文を付して公刊した「1933/34年の学長職。事実と思想」（以下、「事実と思想」と略記する）などがある。

ハイデガーによるこれらの一連の自己弁明のうち、書簡によるものはオット、ヴィクトル・ファリアス、ベルント・マルティンらの研究と調査によってその全部または一部が引用されて知られているが、一般の人々にはいまだにただちに接近しえないものである。これに対して、本稿が主として論究の対象とする最後の(6)の「事実と思想」は、(5)の『シュピーゲル対談』と並んで、公刊・公表されたものであるために一般の読者が手に入れて読むことができるという点で測り知れない影響力をもつものであるだけでなく、原文にしてわずか23頁の小論であるにもかかわらず、最も論点が整理されてハイデガーのすべての自己弁護の基本路線を凝縮して総括している点で、きわめて重要な文書である。そしてそれは、ハイデガーとナチズムとの関係にかんしてハイデガー自身の口から語られた最も信頼すべき文書としてオーソライズされ、この問題にかんするハイデガー派の公式見解を提示するものとして、その後のハイデガーにかんする伝記的研究のたえざる源泉としての役割を果たしてきたのである<sup>(2)</sup>。

この小論「事実と思想」が書かれた時期と経緯について、詳細は不明である。ヘルマン・ハイデガーはこれを刊行したさいに、その序文のなかで、父マルティンは「1945年の挫折の直後に」この回顧録を書き、「彼は後に手書きの原稿を、しかるべき時期にこれを公表するようにと指示して、これを署名者に委ねた」とだけ述べている<sup>(3)</sup>が、詳細は伝えられていない。オットー・ペッゲラーは、ハイデガーが先に述べた政治的浄化委員会から査問を受けたさいに「非

ナチ化の過程のなかでこれを提出した<sup>(4)</sup>と述べているが、そのはっきりとした証拠は存在しない。この政治的浄化委員会には、ハイデガーの学長時代の同僚で彼の厳しい敵対者であり、当時の事情を詳しく知る経済学者アドルフ・ランベが委員として加わっていたから、ハイデガーがこの委員会に自らの弁明書を提出した可能性は低いと思われる。ハイデガーのこの弁明書には、当時の記録文書を少々調査したり証言を多少とも集めたりしさえすれば簡単に反証をあげることのできる虚偽が数多く散りばめられているからである。いずれにしても、「事実と思想」の手書きの原稿を直接に閲覧しえないわれわれにとってはっきりしているのは、ハイデガーが自らとナチとの関係にかんする「事実」を、口頭によってではなく文書というかたちで記録に残し、そしてこれを自らの死後にのみ公表しようとして、そのほかの諸著作・講演・書簡・原稿などとともに遺稿管理者の手に委ねたということである。したがってこの小論は、その経緯と意図からいっても、とりわけハイデガー・ナチ問題にかんして口頭で語られたあの『シュピーゲル対談』<sup>(5)</sup>と対をなし、これとたがいに相補いあうという関係にあり、内容からしてもこれときわめて強いつながりをもつ文書である。

ハイデガーの「弁明」にほかならないこの「事実と思想」の叙述を貫く基本的な姿勢は、自らのナチ党とナチズムへの関与が偶然的・一時的なものであり、最小限のものであったとする態度である。やや具体的にいえば、ハイデガーはフライブルク学長時代とその後の時期の自画像をこう描いている。自分は確かに、1933年に権力を掌握したヒトラーとナチズムの運動のうちにドイツ民族の結集と再生にいたる可能性を見ており、これに一時的に期待してもいた、しかし、フライブルク大学学長を引き受けたのは、むしろナチの覇権から大学と学問の本質を擁護するためであったし、ナチに入党したのも形のうえだけのことであり、しかもそれが大学にもたらす利益を考慮してのことであった、学長としては決して党活動を行うことも党指導部に助言や協力をすることもなかつただけでなく、大学を専門学校化およびナチ化するという二重の危険から大学を擁護するために制度的な改革を行った、学長となったのち焚書をやめさせたり、ユダヤ人教授の追放に反対したりなど、一定の抗議行動を行ってナチ当局からは警戒の目で見られるようになった、文部省から二人の学部長の罷免を要求されたが、これに抗議して学長を辞任した、とりわけレーム肅清事件以後はナチと対決する言動を行ったために、エルンスト・クリークやローゼンベルク局から監視と口汚い攻撃さえも受けるようになった、と。

だが、こうしたハイデガーの「弁明」は、その論点の多くが事実と相違しているばかりか、事実を隠蔽したり、いくつかの事実をあげながらこれに意図的に作出された虚偽を絡み合わせて事実をあべこべに描いたりなど、強い作為が働いている。そこには、ハイデガーの人物と思想の根本的な問題点が特徴的な仕方で映し出されていると言わなければならないであろう。やはりハイデガーは、事情を詳しくは知らない、知ることができない、または知ろうとはしない人々を対象に、歪曲され美化された自分の虚像を後世に自ら伝えようとして、この弁明を書いたのである。その意味においてこの弁明書は、世界的と評価される哲学者が自ら作り上げた典

型的な作為的な行為として、哲学と制作心理学の歴史のなかに永久に残ることであろう。

本稿においては、ハイデガー・ナチズムにかんする歴史的な先行研究を踏まえながら、ハイデガーの弁明書にほかならない「事実と思想」を中心に、そこに展開されている主要な諸論点に即して、そこにいかなる真実と虚偽が含まれているのかを詳細に検証し、あわせてハイデガー自身の実像と虚像とを明らかにしたい。私は先に、詳細な訳者注を付したこの「1933/34年の学長職。事実と思想」の翻訳を『札幌学院大学人文学会紀要』第70号に掲載した（2001年12月刊行）。また本論文は、私が先に執筆した、本論文のダイジェスト版ともいえるべき「ハイデガーの弁明—『1933/34年の学長職。事実と思想』の真実」に全面的に加筆し、紙数の制約のために叙述できなかつたところを新たに展開したものであり、原稿量もおよそ3倍を超えている<sup>(6)</sup>。これらを本論文と併せてお読みいただければ、まことに幸いである。

## 第二章 ハイデガーが学長を引き受けた動機と学長選挙の経緯

### (一) フライブルク大学学長選挙の経緯と背景

「事実と思想」におけるハイデガーの弁明は、1933年前後のドイツという歴史的・社会的背景にはまったく触れずに、いきなり唐突に「1933年4月に、私は大学の総会で満場一致で学長に選出された」<sup>(7)</sup>と述べて、彼がフライブルク大学学長に選出された経緯と学長職を引き受けた動機にかんする叙述から開始されている。しかし、この冒頭の一節からして事実と一致しないし、事実を正確に述べてもいない。これには若干の注釈が必要である。

周知のように、1932年7月31日、ドイツ帝国議会選挙で「国民社会主義ドイツ労働者党」、すなわちナチ党が230議席を獲得して第一党に躍進し、1933年1月にはシュライヒャー内閣が総辞職してヒトラーが首相に指名されて組閣を行い、ナチが権力を掌握するという緊迫した政治情勢に迫られて、ドイツとドイツの大学は全国的なナチ化へと向けて動き出しつつあった。フライブルク大学総会は、こうしたナチ革命という政治的状况を受けて、しかも同年4月7日に公布されたばかりの、ユダヤ人追放を意図する「公務員制度再建法」という新しい法的規制のもとで、つまり前代未聞の異常事態のなかで行われたのである。新しい学長と評議員を再選出することを目的として4月21日に招集されたこの大学総会に出席したのは、93名の選挙権者のうち56名にすぎず、欠席した37名のうち投票権をもちながら人種を理由として排除されたメンバーが13名もいた。そして正確に言えば、出席した56名のうちハイデガーに投票したのは52名であって、支持票以外が4票あった。したがって、ナチ革命とそのための大学の「統制」化という強い圧力のもとでさえも、もともとの選挙権者の数からすれば、ハイデガー学長を支持した者は過半数を少々上回る程度でしかなかったのである<sup>(8)</sup>。

ハイデガーは、自分が学長に選出されたいきさつにかんして、自分の前任者であるヴィルヘルム・フォン・メレンドルフと彼のこれまた前任学長であったヨーゼフ・C・ザウアーの二人

を中心として、ハイデガーに次期学長を引き受けてほしいとの強い意向が学内にあり、とりわけ後者が自分を強く説得しようと試みた結果、しかし自分自身は選挙当日の午前中になってもまだ学長候補から身を引こうとしたほど「躊躇した末に」、とうとうやむなく学長職を引き受ける決心をしたとして、こう述べている。「大学にたいして本質的な根拠付けを行うという私の企ては二重に脅かされていたが、それにもかかわらず、大学の多くの同僚たち、とりわけ解任された学長フォン・メレンドルフと以前の学長であり当時の学長代理ザウアーの強い要請で、私はとうとう学長職を引き受ける決心をした。それは、何よりも K. ザウアーが主張したことだが、私が拒絶した場合には、大学の外部から誰かが学長として任命される可能性があるのを考慮してのことであった。」<sup>(9)</sup> 『シュピーゲル』対談のなかでも、ハイデガーはほぼ同様のことをやや立ち入って繰り返している。この最初の引用からして、ハイデガーの弁明には少数の事実と多数の虚偽とがないまぜにされていることがただちに了解される。ここで事実として確認されるのは、ハイデガーが「大学にたいして」ある種の「私の企て」をいっていたという形式的な事柄だけであって、後にわかるように、ハイデガーのこの企ての内容が大学にたいして「本質的な根拠付けを行う」ことであったということまでが事実だとは確認されえない。そしてこの形式的な事柄以外のすべては、事実と反するか、あるいは意図的に作り出された虚偽であるかのいずれかである。

まず第一に、解剖学の教授で医学部長のフォン・メレンドルフは確かにハイデガーの前任者であり、1932年12月にフライブルク大学学長内定者となり、翌年4月15日に学長に就任して数日間その職にあったが、自らの意志によりその職を辞したのであって、決してナチ当局またはバーデン州文部大臣の指示によって「解任された」のではない<sup>(10)</sup>。このことは、シュネーベルガーが収集した次のような当時の記録文書によって確認することができる。「大学事務局より次のような発表あり。国民的高揚の文化政策的発展の中でドイツの諸大学に課せられた大きな使命を体し、フライブルク学長フォン・メレンドルフ教授は自らの意志で4月21日の全教官集会に重要な役職の交替を提案した。」<sup>(11)</sup> 「退任する前学長は、指導的な立場のより緊密な協力を可能にするために、辞任を申し出たのであった。この犠牲的行為とその必然性を我々は評価したいと思う。」<sup>(12)</sup> フォン・メレンドルフが「解任された」とするハイデガーの叙述は、決して彼自身のたんなる記憶違いまたは事実誤認として片付けられてはならないであろう。そこには見過ごしてはならないある重大な内実が含まれていると推測されるからである。

第二に、フォン・メレンドルフはハイデガーが次期学長を引き受けるようにと望んでいたとか、ザウアーはハイデガーを説得しようと試みたというの、虚偽にほかならない。ザウアーはハイデガーをではなく、フォン・メレンドルフを学長として最適任であると考えていたが、先の引用に見られるように、当時の社会的状況がこれを許さなかったのである。このこともまた文書によって確認される。歴史学者オットは、フライブルク在住という地の利を生かして、実際の記録と文書にもとづくきわめて貴重な歴史的考証を行っているが、ザウアーの甥にあつた

り司教座教会参事会会員を務めている人物の許可を得て、当時のザウアーの日記を調査している。その日記によれば、フォン・メレンドルフが学長に就任する前日の1933年4月14日という特別な日に、古典文献学者のヴォルフガング・シャーデヴァルトが彼のところにやって来て、ハイデガーを学長にするように強く勧奨したという。「それからシャーデヴァルトがやってきて一時半までいた。彼は本学における『統制』 Gleichschaltung を問題にし、ハイデガーを学長にすべきではないかと言った。わたしはそれに対して、ハイデガーは本来の管理的な事柄や運営上の事柄については、特にいまは以前より厳しい状態であるために、ほとんど問題になりえないと反対した。…いずれにせよまだメレンドルフがいるし、彼が一番適任であると強く言いました。」<sup>(13)</sup>。

フォン・メレンドルフとザウアーがハイデガーを学長に推挙する必然性が存在しないことは、ハイデガーがここで黙して語ることがなかったこの二人の人物の思想的・政治的信条を見れば、ただちに了解される。フォン・メレンドルフは、解剖学者および医学部長として学内で人望の厚い人物であった。彼は政治信条のうえでは社会民主主義者・共和主義者でもあり、実際に社会民主党に所属していた。さらに彼は、カトリック中央党にぞくしており後にナチによって攻撃されて罷免されるフライブルク市長ハンス・ベンダーと親しい友人関係にあり、このこととの関連でも政治的に危険な立場にあった<sup>(14)</sup>。このふたつの政治的理由で彼は、ナチの半公式的な新聞『アレマン人』から、例えば「かかる姿勢の人物が学長執務を執り行うなどというのは、本党の見解では、国家革命と和合しうることではない。さらには、フォン・メレンドルフ教授とナチズムの姿勢が圧倒的な学生連盟とのあいだに信頼の領域が成立しうるとも考えにくい」などとして、きわめて執拗な攻撃を受けていた<sup>(15)</sup>。先に述べたような当時の政治情勢にあっては、かかる人物がフライブルク大学学長を継続することはきわめて困難な状況だったのであり、こうした理由から、彼はナチスに屈服するよりも学長を自ら辞任する道を選んだのであろう。他方では、彼に厚い信頼を寄せていたザウアーは、ローマ教皇庁司教で、カトリック神学者であり、フライブルク大学のキリスト教考古学、美術史、教父神学の教授でもあった<sup>(16)</sup>。

ところで、ナチスの政治的スローガンの代表的なひとつは、「ナチ党綱領25カ条」にはっきりと掲げられているように、議会と民主主義に対する反対であったし、民族と人種とを至上の価値とするナチスは、さらに宗教とのかかわりでは、建前のうえでは「国内におけるすべての宗教的信仰の自由」を保障しながら、実際の行動のうえではとりわけ大きな政治勢力であったカトリック中央党を排除しようとし、したがってカトリックにたいしても敵対的であった。それゆえに、フォン・メレンドルフとザウアーの二人の思想的・政治的立場は、カトリックを出自とし、カトリックの後押しによってカトリック神学の道を歩みながら、結婚によってこれと離反し、生涯にわたってこのことを心中の刺のひとつとしたハイデガーとは、そしてナチ信奉者として反民主主義・反共主義・反カトリックの政治的立場をナチと共有していたハイデガーとは根本的に相容れなかったのである。

このザウアーの日記は、ハイデガー学長誕生のいきさつと社会的背景をはっきりと語っている。シャーデヴァルトは当時すでにナチズムへと献身していた活動家であって、特に文中にある「統制」または「画一化」と訳される Gleichschaltung という言葉は、この時代にあっては紛れもないナチズム特有の用語であって、ナチおよびナチズムに反対する勢力や非アリア系のメンバーを強制的に排除して、「指導者原理」に象徴されるナチズムの政治原則のもとに全国民を結集させるというスローガンを意味していた。権力の掌握とともにこの年の初めから嵐のように進行していたナチ革命はフライブルク大学にも襲いかかっていたのであり、シャーデヴァルトのようなナチ信奉者またはナチ黨員たちが「統制」という旗印のもとに、全国的なナチの運動に呼応しながら、フライブルク大学のナチ化を目標にすでに運動を展開していたのであって、その一環として、学長予定者で社会民主黨員であったフォン・メレンドルフが学長に就任する以前から、ナチにきわめて信頼の厚いハイデガーを学長にかつぎだそうとして画策していたのである。

ところで、事情を最も詳しく知るはずのハイデガーがなぜ、たんなる事実誤認ではない、こうした虚偽を意図的に述べているのか。その理由として容易に推測されるのは、ナチから敵対的に扱われるほどの社会民主主義者であったフォン・メレンドルフと、前々学長であり、ハイデガーのもとでも副学長を務め、カトリックの大物でもあったザウアーの二人が自分を学長に強く推薦したように歴史的事実を書き換えるならば、反民主主義的であり反カトリック的であった、すなわちナチ的であったハイデガーの政治的立場がうまく中和されるとともに隠蔽もされ、そのことによって彼自身がナチに関与したことの罪もまた減殺されうることになるからである。もちろん、こうした歴史の書き換えは、ほとんど謀略的とも言うべきものである。

第三に、ハイデガーは選挙当日の午前中になってもまだ学長職を引き受けるのを躊躇していたと述べ、その躊躇の理由を「私は当該の政府機関または党機関とは何のつながりもなかった。私自身が黨員でなかったし、何らかのかたちで政治的に行動したこともなかった」<sup>(17)</sup> ために、当局が自分の言うことを聞いてくれるかどうか、確信をもてなかったとしているが、最後まで躊躇していたというのも、党機関と何のつながりもなかったというのも、虚偽である。最後まで躊躇していたというように自分を演出すれば、彼自らが学長選挙とナチズムに関与したことの積極性が減殺されることになるし、自らが確信犯であるという非難をかわすことができようが、事実はそうではなかった。確かにハイデガーは5月1日にナチに入党して大袈裟な式典を行っているから、学長選挙以前には黨員ではなかったことだけは事実であるが、しかし、この時点ですでにハイデガーは大学内部のナチ系教授やその信奉者たちに囲まれて学長候補の道を歩みつつあったばかりか、学長候補としてプロイセン文部省との交渉さえ終えており、彼がナチに入党するのはたんに時間の問題にすぎなかったのである。

オットによれば、これより先の4月上旬には、この「事実と思想」に何度も登場する、新しくカールスルーエの内務省ナチ大学担当官となったオイゲン・フェーアレがフライブルク大学



を視察し、ザウアーやフォン・メレンドルフとも会い、また多くのナチ系教授たちとも会合をもって、党活動の調整を行った。その後、4月9日付で、古典文献学者でフライブルク大学の最古参のナチ黨員ヴォルフガング・アラーがカールスルーエに戻ったフェーアレに状況を報告する手紙を書いており、この報告がすべてを物語っている。それによれば、「最近 [4月初旬] のわれわれの協議における最初の点の実行にあたっては、国民社会主義的な大学教官の連合にかんして、われわれはこう確認しました。ハイデガー教授はすでにプロイセン文部省との折衝に入っている、と。彼はわれわれの全幅の信頼を得ており、われわれはさしあたり彼をフライブルク大学におけるわれわれの代表者と見なすよう、お願いします。同僚ハイデガー氏は黨員ではありません。そして、同僚のなかに立場が不明確な者や敵対的な者がいる以上、フリーハンドの立場を守るために、現在のところでは黨員になることが特に有利であるとは考えていないようです。しかし、もしもそのほかの理由から目的にかなう場合には、入党を表明するにやぶさかではありません。」<sup>(18)</sup>そしてこの手紙の筆者アラーは、フェーアレがハイデガーと直接に接触することを要望している。

したがってわれわれは、ハイデガーの叙述とは反対に、事態の真相をこう描写することができる。ナチ革命の嵐が全国的に吹き荒れるなか、フライブルク大学においても大学の「統制」とナチ化を推進する強い勢力があつて、学長をめぐるナチ幹部と多数のナチ黨員教授・シンパによる舞台裏での談合と根回しが進行しており、こうした地ならしに支えられて、ナチ当局のお墨付きを得ながら、ハイデガーはいわばナチ革命によって掃き清められていた道をたどって、学長へと上りつめていったのである。ハイデガーは周囲のナチ黨員およびその信奉者からは全幅の信頼をもって見られ、フェーアレのようなナチ幹部からも評価を受け、シャーデヴァルトのようなナチ献身者の熱心な工作によって、フライブルク大学における「統制」の実現という実践的課題を担いつつ、ナチ幹部およびナチ信奉者の期待を一身に集めながら、ハイデガー学長が誕生したのであつた。この途上においてハイデガーはおのれの強い意志にもとづいて確信をもって行動した形跡はあつても、躊躇した形跡はまったく見られない。ハイデガー学長誕生をナチの側はどう評価していたのかにかんしても、シュネーベルガーの『ハイデガー拾遺』に収録された当時の記録文書によって明らかである。バンダーを放逐したあとフライブルク市長におさまったナチ親衛隊員フランツ・ケルバーは、先に引用したナチの半公式新聞『アレマン人』の編集長であつたが、この新聞はハイデガー学長誕生についてこう報道している。「フライブルク大学の教授会はフォン・メレンドルフ教授に替えて我々の大学の学長にハイデガー教授を選んだ。この選出は全般的な統制の旗印のもとに行われた。それはすべての指導的役職のできるかぎり信頼関係に立つ緊密な協力を保証するためである。教授会は、国民的、社会的革命に積極的に協力する意志を示したのである。[傍点筆者]」<sup>(19)</sup>引用文中に見られる「統制」という言葉が事柄の本質をきわめて雄弁に物語っている。ハイデガーは、バーデン州のナチによって計画され推進されたフライブルク大学の「統制」という行動方針のもとに、自らの意志

に従い、また確信をもって、自ら実行者としてその先頭に立ったのである。

ところで、ハイデガーはナチ関係者からなぜそのような全幅の信頼という評価を受けていたのか。その時点までにハイデガーがフライブルク大学の外部でも一定の行動をすでに行っていたからである。『シュピーゲル』対談のなかでも、ハイデガーは「私は学長就任以前には政治的には何もしてませんでした」<sup>(20)</sup>と述べているが、これも虚偽にはほかならない。例えば、ハイデガーが初めてナチ関係者と密接に連携している姿を公けの場に現したのは、1930年7月11～14日にカールスルーエで開催された「バーデン郷土の日」の企画のなかの、政治的な色彩の強い「学術、芸術、経済分野のバーデン賢人会議」においてである。この催しのなかでハイデガーは、後にナチの人種学・優生学を支えたオイゲン・フィッシャー<sup>(21)</sup>、まだ入党はしていなかったがまもなくナチの理論家として活躍するエルンスト・クリーク、右翼的な作家のレオポルト・ツィーグラールらと並んで、「真理の本質について」と題する講演を行った。また、ナチが権力を掌握した直後の1933年2月にハイデガーは、すでにナチの理論家となっていたクリークから手紙を受け取り、彼が設立を計画していた「ドイツ大学教師文化政治研究集団」の創設に加わるように要請された。ハイデガーは同月22日付けで返書を送り、この呼びかけに全面的に賛同したばかりか、アルフレート・ボイムラーとハンス・ハイゼの名前が賛同者のなかに見られないことを残念がっている<sup>(22)</sup>。ファリアスによれば、3月の会議では、ハイデガーはフライブルク大学の「代議員」としてこれに参加している<sup>(23)</sup>。ここで、ハイデガーはまだ入党はしていなかったが、公衆の前にナチの活動家としてその姿をはっきりと現していたのである。

ハイデガーが次第にナチズムへと接近していくプロセスの一部は、ヤスパース宛のいくつかの手紙からも明らかとなる。ハイデガーは1932年12月8日、ヤスパースに「哲学の来るべき数十年のために地盤と空間を作り出すのに成功するでしょうか。はるかなる任務を自ら担う人々が現れるでしょうか」<sup>(24)</sup>と書き送っている。当時のヤスパースには「はるかなる任務」という言葉の意味は不明であったに違いないが、この言葉は後のハイデガーの学長就任演説で数回用いられることになる。さらに1933年4月3日のヤスパース宛書簡のなかでも、ハイデガーは「大学の変革計画にかんする何らかの明確な情報を入手したい」と述べ、しきりにボイムラーとクリークの動向と彼らからの連絡を気にし、同月6日にはシャーデヴァルトを代表派遣者とする「いろいろな文学部の共同研究会の集会」が開催される予定であることを知らせている。上記のことを考慮すれば、この集会がナチ系の人々によって開催されたものであり、ここでも次期学長問題が根回しされていたことは想像するに難くない。さらにハイデガーはこう書いている。「多くの事柄がきわめて曖昧で不確かですが、それだけに私は、私たちが新しい現実のなかへと入り込んでいるということ、したがってある時代が古くなってきたことを、いよいよ強く感じています。一切は私たちが哲学に正しい出撃地点を用意するかどうか、そして哲学が発言権を得るように努力するかどうかにかかっています。」<sup>(25)</sup>そして、明くる4日と6日にもハイデガーは先の研究集団の構想にかんする手紙をクリークに送っている。つまり、この時点

です。ハイデガーはボイムラーやクリークなどのナチの代表的な思想家たちと共同闘争を組んでいたのであって、彼らはそれぞれナチ的な観点による大学の変革という目標に向かって進み出していた。「出撃地点」という軍隊的・突撃隊的用語が、ハイデガーがこうした共同歩調のもとでフライブルク大学の改革＝ナチ化のために尽力しようとする不退転の決意をはっきりと表している。

第四に、ハイデガーは、彼がとうとう学長を引き受ける決心をしたさいに何よりも考慮したこととして、ザウアーがハイデガーを説得しようとして「私が拒絶したならば、大学の外部から誰かが学長として任命される可能性がある」と主張したことをあげている<sup>(26)</sup>が、これもまた当時の事情を知らない者を暗黙のうちに誘導しようとする脅迫的な言辞と言わなければならないであろう。後に見るように、学長となったハイデガーが任命した多くのナチ党員評議員・学部長の顔触れを見れば分かるように、学内に人材は多数存在したばかりか、ドイツの大学の自治的伝統からしても大学外部からナチの誰かが学長として任命されるという可能性はありえないことである。

したがって、ハイデガー学長の誕生は、決して偶然でも晴天の霹靂だったのでもなくて、また彼が書いているように、「躊躇の末に」行われたのでもなくて、こうした歴史的背景と社会的脈絡のなかで、彼自身の強い関心と関与に導かれて、そして何よりもナチ関係者による周到的な用意と準備工作によって、学長誕生の4月23日以前にはすでにいわば掃き清められていたのである。

## （二）学長職を引き受けた動機について

学長職を引き受けた動機と理由にかんするハイデガーの弁明には、矛盾撞着と見られかねない相反する要素が見られる。

彼は、学長職を引き受けた動機として、一方では「大学にたいして本質的な根拠付けを行うという私の企て」をあげて、ドイツの大学の変革にたいするおのれの関心が1929年の自分の教授就任演説である『形而上学とは何か』以来のものであり、しかも大学と学問の本質にもとづく純学問的なものであることを強調して、こう述べている。「ドイツの大学は、まさしく諸学の本質根拠である大学の本質根拠から、すなわち真理そのものの本質から更新されるべきであった。そして、技術的な組織・制度的な見せかけの統一に固執する代わりに、問う者たちと知る者たちとの根源的な生きた統一を回復すべきであった」<sup>(27)</sup>と述べている。しかし、他方ではハイデガーは以下の三点を主張しているが、それは大学と学問の本質根拠とはかなり異なったレベルのきわめて実践的な関心を表してもいる。それらはまず第一に、彼が、1933年に権力を掌握した国民社会主義、すなわちナチズムの運動のうちにドイツ「民族の内的な結集と再生にいたる可能性と民族の歴史的・西洋的な使命を見いだす道がある」と見ていた点であり、第二に、学長職のうちには「心構えと再生という生起を引き渡し、こうした力の影響を強めて

確実にする可能性とすべての資産とがある」と考えていた点であり、第三に、ハイデガーが学長職を引き受けることで、「不適当な人物の進出と党組織や党の教義の脅迫的な覇権に対処できる」<sup>(28)</sup>と考えていたという点である。

われわれは、これらの相反する要素のうち、ハイデガーが学長時代に行った、われわれに知られうるかぎりのすべての言動とフライブルク大学内部の「制度改革」との両面から見て、彼が後者の三点のうちで自分の本心を吐露しているにもかかわらず、「事実と思想」を執筆した時点で前者の純学問的な動機を強調して、自らの実践的関心を希薄にしようと努めたと考えざるをえない。こうした純学問的関心は、たとえ学長職を引き受ける動機のひとつとして存在したとしても、彼の本音である後者の実践的関心からすれば、明らかに副次的なものでしかなく、そして後に説明するように、彼が学長時代に行ったさまざまな学内処置と大学政策全体から見て、存在したという明確な証拠が確認できないものである。これに対して、後者、とりわけ第一と第二の点こそ、ハイデガーがクリークやボイムラーらとともに、それぞれの観点から大学のナチの変革をめざして、学長選挙に「出撃」した真の動機の所在を示している。すなわち、学長職を引き受けたハイデガーの真の動機とは、「大学こそが真の〔国民社会主義的〕革命の出発点」<sup>(29)</sup>であるべきであり、紛れもないハイデガー自身の言葉で言えば「これまでの学問をナチズムが問題とする方向およびナチズムの力から根本的に考え直すこと」<sup>(30)</sup>にほかならなかった。ハイデガーはまさしく、確信をもったナチズムの信奉者として、ドイツ民族の再生と自己実現の道をナチズムに託してただけでなく、大学においても学長としてその地位と権力をほかならぬこの実践的な目的のためにこそ発動しようと決意していたのである。

ハイデガーは『シュピーゲル』対談のなかでも、「かろうじてただひとつの可能性、すなわち、現にまだ生き続けている建設的な諸勢力とともに情勢の来るべき悪化をくいとめるという可能性が残っている」<sup>(31)</sup>という判断のもとに、大学をナチの手によってこれ以上悪化させないために学長職を引き受けたとして、後者の第三点を言い換えているが、これもまたハイデガーが学長として行った言動を見れば、虚偽としてしか形容のしようがないものである。なぜなら、後に見るように、ハイデガーは、レームによって指導されたナチ突撃隊の影響がきわめて強かったドイツ学生連盟などの学生諸団体と密接に連携しながら、労働奉仕や軍事教練を大学の必修科目に組み入れることを推進しようとしたばかりか、労働キャンプを企画して労働者の政治教育に学生の役割を組み入れることを推進したから、むしろ「情勢の来るべき悪化」を自ら率先して実践したのであって、決してその反対ではなかったのである。

### (三) ナチ入党の経緯をめぐって

ナチ党に入党した経緯と動機について、ハイデガー自身は「事実と思想」のなかでこう説明している。「私が職務を開始した最初の週に、文部大臣は学長が党に所属していることを重要視しているらしいことが分かった。ある日のこと、…ケルバー博士が私に入党を薦めにやって

来た。以前には決して政党には所属していなかった私は、ただ政治的な駆け引きには重きを置かない大学の利益だけを考へて、この招請を受け入れたが、しかし、これは次のようなはっきりと承認された条件をつけたうえでのことであった。それは、私個人としては、まして学長としては、決して党の仕事を引き受けたり、何らかの党活動を行ったりはしないという条件であった。私はこの条件を守ったが、そのことは困難ではなかった」と。そして、ハイデガーは自らのナチ入党を「党への加入は、党指導部が大学問題・文化問題・教育問題にかんする助言忠告を私にさせようと考えないかぎり、たんに形式の問題であった」<sup>(32)</sup>と自己評価したうえで、「私が学長職にあった全期間にわたって、私は何らかの助言をしたり、党指導部やさまざまな党機関と会話したり、まして議決決定することにかかわったことは、決してなかった」<sup>(33)</sup>と明言している。これらの弁明のうちにも多くの虚偽が含まれていると言わざるをえない。

第一に、ハイデガーが学長に就任した後にナチ入党の勧めがあったというのは、見え透いた虚偽である。すでに引用したアリーの報告書にあるとおり、ハイデガーが学長に選挙される以前のさまざまな下工作と根回しのなかで、ナチ当局とナチ関係者のあいだでハイデガーの入党が検討課題のひとつとなっており、ハイデガー自身も目的にかなうなら入党するにやぶさかではないという意志をすでに表明していたからである。したがって、ハイデガーのナチ入党への道もまた、学長選挙以前にすでに掃き清められていたのであって、入党の時期と入党をどう演出するかのだけが問題であったにすぎない。ハイデガーのこの時期までの政治的確信からして、彼がナチに入党することにはいかなる障害も存在しなかったが、彼がただちにそうしなかったのは、学長候補がフリーハンドでなくナチ党员であったとすれば、フライブルク大学内部の微妙な政治情勢からしてこれに強い反対の動きが生ずる可能性があったからであり、これを計算し警戒してハイデガーは学長に選出された後にゆっくりとナチへと入党するというしたたかぶりを示している。

第二に、「大学の利益だけを考へて、この招請を受け入れた」というのも虚偽である。すでに指摘したように、ハイデガーは学長の地位と権力を、フライブルク大学の「統制」とナチ化という実践的・政治的目的のために発動しようとしていたのであって、彼自身がきわめてアクティヴなナチの立場に立っていたからである。

第三に、ハイデガーの入党がたんなる形式の問題であったというのも、学長としての彼の言動を見るかぎり虚偽であり、ハイデガーが決して党の仕事を引き受けたり党活動を行ったりしないという条件をつけたうえで入党したということも、記録文書によっては確認されえないばかりか、後でやや詳細に展開するように、ハイデガーがこうした条件を守ったということも、虚偽である。ハイデガーが学長として行った仕事として特筆すべきもののひとつは、例えば彼がラディカル・ナチとしてバーデン州文部省と協力して「大学基本法」の改正を行ったことであり、その内容は、ナチの「指導者原理」を大学内にも貫徹し、例えば学部長の任命権をも学部自治から剥奪して学長の権限に集中させるというものであったし、実際にハイデガーが自ら

強力に参与したこの法律改正に従って、学長に就任した年の10月1日に、改めてフライブルク大学の「指導者=学長」に収まったからである<sup>(34)</sup>。

ここで若干の注釈を付け加えよう。ハイデガーがその名をあげているフランツ・ケルバー博士(1901~1945)は、ファリアスとベルント・マルティンによれば、1930年以来ナチ党にぞくして地区指導者となったばかりか、親衛隊員でもあり、親衛隊大隊長をも務めて、ヒムラーから「髑髏リング」を授けられてもいる。さらに彼の作ったナチ組織からは半公式ナチ新聞『アレマン人』を発行しており、その編集長を務めていた。彼は、上述のように、帝国地方長官ロバート・ヴァーグナーによってベンダーが罷免された後の1933年4月10日にフライブルク市長に任命され、さまざまな式典や集会などにハイデガーと同席し、学長時代も学長辞任後もハイデガーときわめて親しい関係が続けていたが、ドイツ敗戦後に変死を遂げたと言われる<sup>(35)</sup>。

すでに述べたように、ハイデガーとナチ党との関係はもちろん1933年になって始まったことではない。ハイデガー家では、ユンカー出身の陸軍将校を父にもつエルフリーデ夫人が早くからヒトラー崇拜者であったと伝えられている。ハイデガーの著作・論文のほかに、ドイツ各地に残されている彼のさまざまな記録・手紙・証言などを総合すると、ハイデガーは1927年の『存在と時間』刊行後、とりわけ1929年以降、ニーチェ研究を深化するにつれて次第にキリスト教の考え方を退けて背後におしやるようになり、アカデミックな哲学や大学制度にも距離を置いた見方をするようになり、ナチズムまたはこれに近い立場から時代の診断と歴史的状況の認識を行うようになっていった。オットー・ペグラーも「ニーチェからヒトラーへ通じる道があったのではないか」<sup>(36)</sup>と述べて、ハイデガーにとって1929年がひとつの転機をなしたのではないかと推測している。とりわけ、1929/30年冬学期の講義『形而上学の根本概念』のなかに、この転機を彷彿とさせる叙述が見られる<sup>(37)</sup>。そして、ハイデガー自身が「事実と思想」のなかで述べているように、1930年頃から、初期ナチズムの興隆に大きな影響を及ぼしたといわれ、ハイデガーとは晩年に至るまで進行を結んだ作家エルンスト・ユンガーらの影響がこれに加わり、ハイデガーの政治的立場は保守革命の同調者たちと共通のものになっていったと推測される。

エルンスト・カッシーラーの夫人トーニの報告によれば、1929年の段階で「ハイデガーの反ユダヤ主義的傾向も私たちの間ではよく知られていた」<sup>(38)</sup>とされているし、ペグラーによれば、1931年の大みそかにトートナウベルクにあるハイデガーのヒュッテを訪問したヘルマン・メルヒェンの証言では、ハイデガー家の全員が国民社会主義に改宗しているのを知ってびっくりしたという<sup>(39)</sup>。また、エリク・ヴェーユも、ハイデガーが遅くとも1932年には有名なナチとしてフライブルク大学関係者の噂にのぼるようになっていたと報告している<sup>(40)</sup>。作家ルネ・シッケレは同年8月に、「フライブルク大学関係者のあいだでは、『ハイデガーはもはやナチたちとだけしかつきあっていない』という噂がある」<sup>(41)</sup>と自らの日記に書き留めていたほどである。

したがって、学長就任のはるか以前に、ハイデガーがナチ党へ入党する道もまたすでに地ならしされていたのであり、ハイデガーが弁明するように、学長に就任してから「ある日突然に」ということでは決してなかったのである。ハイデガーはほかならぬ労働祭典の日である5月1日を期してナチに入党して大袈裟な式典を行ったのだが、この入党がナチの計画的で周到な準備による示威と演出の一環として行われ、ドイツ各地におけるナチの全国的な動きに呼応していたということは、この同じ日に、ハイデガーのほかにハンス・ハイゼ、アルノルト・ゲーレン、エーリヒ・ロートハッカー、アルフレート・ポイムラー、ハインツ・ハイムゼートなどの著名な哲学者を含めて、全国で23名もの大学教授がいっせいにナチに入党したという事実を見ても明らかである<sup>(42)</sup>。

### 第三章 学長時代のハイデガーの思想と行動

#### (一) 学長演説にかんする「弁明」

ハイデガーは、上記のような経緯をへて、1933年4月23日にフライブルク大学学長に就任し、労働祭典の日である5月1日を期して国民社会主義ドイツ労働者党（通称ナチ）に入党した後、5月27日に学長就任式典を挙行し、そのなかで「ドイツ的大学の自己主張」と題する学長就任演説を行った。そして、同日これに引き続いて、学長就任祝賀会がホテル「コップフ」において開催された。

ハイデガーは、「事実と思想」の第2節を学長演説の弁明にあてて、まずこう述べている。学長演説の核心部分は「大学が基礎づけられていなければならない、知と学の本質の解明」であって、そこではドイツ的大学におけるドイツ学生の決意性にもとづいた義務として三つの奉仕があげられており、その順序は「労働奉仕」、「防衛奉仕」となって、最後に「知の奉仕」が来ているが、「知の奉仕」を最後に位置付けたのは、これが三つの義務のうちで最も重要でないものだからではなくて、大学の本質と心構えが集中している至高のものだからである、と。そして彼は、ここで言われている防衛奉仕とは軍隊的な意味でも、攻撃的な意味でもなくて、緊急防衛という意味で語られており、この演説の核心部分は知・学・職業の本質を解明していて、①諸学の基礎づけ、②存在者の存在「放下」としての真理の本質、③ギリシャ精神における西洋的知の端緒の伝承、④西洋の責任、という四つの主要な要素にかかわっている、と述べている。そしてさらに、この演説のなかで自分はナチが標榜していた「政治科学」、すなわち「学問の政治化」に反対していたのであり、また演説のなかにしばしば登場する「闘争」という概念は戦争を意味するような好戦的概念ではなくて、古代ギリシャの哲学者ヘラクレイトスがその断片53で述べているような「ポレモス」としての意味をもつのだ、とも主張している。

すでに多くの論者が指摘しているように、学長演説にかんするハイデガーの弁明もまた事実と反するきわめて奇怪なものである。学長演説を少しでも検討すればただちに知られるように、

この演説の根幹部分は、ハイデガーが主張するような知と真理の本質とそのための大学の変革というようなものではなくて、ドイツ民族の自己実現とそのための防衛奉仕・労働奉仕にじかに役立つような大学の変革を主張するという内容のものであった。例えば、ハイデガーは演説のなかで「ドイツ的大学の自己主張とは、おのれの本質をめざす根源的で共同の意志である。われわれにとっては、ドイツ的大学は学にもとづき学をつうじてドイツ民族の運命の指導者たちと庇護者たちとを教育し訓育する高等教育機関である。ドイツ的大学の本質をめざす意志とは、おのれの国家において自己自身を知る民族であるドイツ民族の歴史的な精神的付託をめざす意志としての学への意志である」<sup>(43)</sup>と述べている。つまり、ドイツの大学をドイツ民族の指導者・庇護者の養成機関と位置づけたうえで、そこで追求されるべき学問は、アカデミーの自由の否定的側面を克服した学問、つまり、ドイツ民族に歴史的に課せられた「精神的付託」を受け入れ、これを実現するところの学でなければならない、と言うのである。

ここで言われているドイツ民族の「精神的付託」とは、他の箇所ではハイデガー自身が言い換えているところによれば、「自らの歴史を、人間の現存在の世界建設するあらゆる諸力の優位の開示性へと投げ込み、おのれの精神世界をたえず新たに戦い取ることによって、おのれの運命に働きかける」<sup>(44)</sup>ことである。ここに明確に見えているのは、ドイツの大学と学問とをドイツ民族主義と国家主義の基盤の上に立たせて再生をはかろうとする姿勢であって、これが「西洋の中心である我がドイツ民族の歴史的使命」<sup>(45)</sup>と結合されている。この「精神的付託」や「歴史的使命」という言葉の含意はやがて、いっそう具体的に言えば、アメリカの産業資本主義・技術主義とロシアの共産主義の双方から脅かされている危険への対抗<sup>(46)</sup>、また屈辱的なヴェルサイユ講和条約の即時破棄、持たざる民族であるドイツ人の東方への領土拡大とそこからのユダヤ人の移動などといったナチ的な政治スローガンと通底していくことになる。したがって、ハイデガーはここでも、学長としてのおのれの言動の政治的意味を純学問的な事柄へとすり替えて、自己の責任を隠蔽し、おのれの免罪を図ろうと意図しているのである。

ところで、ドイツ的学生の三つの義務のうち、意味からすれば、最後にあげられている知の奉仕が最も重要なものとして位置づけられているのだというハイデガーの言い訳は『シュピーゲル』対談のなかでも繰り返されているが、この学長演説のなかの彼自身の言葉と直接に矛盾する。それというのも、彼は「これら三つの義務—民族による、精神的付託を受けた国家の歴史への義務—は、ドイツ人の本質にとっては等根源的である。そこから発する三つの奉仕—労働奉仕、防衛奉仕、知の奉仕—は、同様に不可欠であり、そして同格のものである」<sup>(47)</sup>と述べているからである。しかし、ハイデガーが「事実と思想」と『シュピーゲル』対談のなかで述べていることは、これらの三つが同格ではないという点にかんしてだけは正しいかも知れない。というのは、学長演説のなかで第一番目に強調されている「労働奉仕」と第二番目の「防衛奉仕」とは、1933年当時の社会的・歴史的な文脈からすれば、きわめてナチ的なスローガンであり、なかんずく疑似社会主義的であると同時に民衆主義的でもあり、街頭での闘争行動を重



視したあの突撃隊の精神を体現するスローガンでもあって、その意味では第三番目の「知の奉仕」は、政治的に見ても論理的に見ても、それに先立つふたつの奉仕にたえず従属せざるをえないという論理的必然性をもつからである。

ハイデガーが「労働奉仕」という言葉の社会的背景とその意味とを自ら語った演説が知られている。1933年11月27日の『フライブルク新聞』は、その前々日に行われたフライブルク大学冬学期の入学式で学長ハイデガーが「労働者としてのドイツの学生」というタイトルでスピーチを行い、こう述べたと報道している。「新しいドイツの現実のなかで学生とは何かという問いが、ランゲマルクをシンボルとした新しい犠牲的行為にドイツの学生を赴かせる。新しいドイツの学生は今、労働奉仕に赴き、突撃隊で活動する。勉学は今から知的奉仕という名になる。」  
 「労働の本質は今や根底から人間の現存在を規定する。民族の現存在の、労働のなかで労働として形成される組織、これが国家なのである。ナチ国家は労働国家なのである。そして新しい学生は、民族の知の要求を貫徹するために動員されていることを知っているがゆえに、まさにそのゆえに、彼は労働者なのである。」<sup>(48)</sup>だが、ハイデガーは学生相手の講演でだけおのれの思想を開陳したわけではない。彼は、こうした労働と労働奉仕にかんする思想の持ち主にふさわしく、同年9月上旬に開催されたバーデン州家具職人親方同盟の第22回大会にまで出席して演説したことが当時の新聞報道によってこう伝えられている。「ハイデガー教授は、アドルフ・ヒトラーが民族を真の共同体に目覚めさせ、そのうえに新しい国家を打ち立てようとしていることに鑑み、大学が手工業とどういう関係をもつかとの問いについて詳述した。そこではあらゆる身分、職業、組合に義務と責任が委ねられ、青少年同盟、労働キャンプ、手工業が教育の力として学校と並び立つ」<sup>(49)</sup>、と。

ナチ国家におけるこうした労働および労働者の位置付けとこれに対応する「労働奉仕」とは、まさしくレームによって指導されていた突撃隊を中心とするナチ党左派グループの合言葉だったのであり、ハイデガーはこのレーム的・民衆主義的路線にきわめて忠実に行動していたのである。もちろん、こうした路線は、ハイデガーが「事実と思想」のなかで述べているように、彼自身が1930年と1939/40年の2度にわたって同僚たちとの間で研究会を開いて研究したというエルンスト・ユンガーの「右翼ナチ革命」の思想、すなわち、第一次世界大戦によって成し遂げられた近代的な戦争としての「総力戦」、具体的に言えば、軍事的指揮と政治的・経済的指揮との完全な一体性のもとに、労働、食糧生産、通信、交易など、国民生活のあらゆる場面での軍事的・組織的管理を貫徹させた総力戦に対応し、そしてその主体または担い手としての「労働者—兵士」の思想に対応するものでもあった<sup>(50)</sup>。さらにオットによれば、「防衛奉仕」または国防奉仕という言葉もまた、当時の社会的文脈のなかで言えば、ドイツの大学では決して珍しい言葉ではなく、ドイツ民族にとって屈辱的なベルサイユ条約という状況のもとで、ドイツ民族の国防強化は「鉄兜団」を初めとする軍事教練連盟や武装学生の合言葉となっており、とりわけ1933年にはまぎれもないナチスのスローガンであって、強い軍隊的・攻撃的意味を

もっていた<sup>(51)</sup>。

ハイデガーは、学長演説のなかで学問と知について確かに語ってはいるが、それは彼独自の秘教的・神秘的な歴史理論または歴史哲学にしたがった語り方においてであり、これに通じていない者には容易に接近しうるものではないであろう。要するに、ハイデガーはドイツ的大学は、学にたいする意志とドイツ民族の精神的付託への意志とを結合することによって形成されるとし、真の学または学の本質は、学が歴史的必然の定めまたは運命の強大さの前では無力であることを自覚し、「われわれが自らを再度、われわれの精神的・歴史的現存在の始元の力のもとにおく」<sup>(52)</sup>ときに、学問と哲学の歴史の開闢の時に立ち返って、この始元の偉大さを回復するときに、必然的なものとなる、と述べている。彼自身の言葉でいえば、「われわれが始元のはるかなる任務 die ferne Verfügung des Anfangs を自らの定めとなすとき、学はわれわれの精神的・民族的現存在の根底における出来事となるにちがいない。」<sup>(53)</sup>「始元のはるかなる任務」が何を意味するかは必ずしも明らかではないが、いずれにしても、ハイデガーの言う「精神的・民族的現存在の根底における出来事」は、直接無媒介に成就されるのではなくて、学が「始元のはるかなる任務」を自らの定めとして決意することによって成就されるのだから、学を媒介としている。ドイツ民族を自己実現すること、言い換えれば、ドイツ民族に歴史的に与えられた使命を実現することを主張する単純な民族ナショナリストとハイデガーとは、その結論においてはまったく共通であって、その相違は、ハイデガーの独自の哲学的枠組み、すなわち学の古代ギリシャ的始元に立ち返って西欧的思索を総括するという視点をもつかどうかであるにすぎない。つまり、ハイデガーにとっては、学または学の本質それ自体が自己目的なのではなくて、「民族についての知、献身を用意すべき国家の定めについての知」とドイツ民族の歴史のかつ「精神的な付託の知」とが一体になることが学の根源的で十全な本質を創造する条件だと見なされているから、学も学の本質も大学の本質も民族的課題とその歴史的認識に従属するとされている点では、変わりがないのである。

さてハイデガーは、先にあげた、自らの学長演説の核心部分だと自称する四つの要素を列挙したあと、「これらすべてに含まれているのは、国民社会主義が真理と知識の本質にかんするニーチェの理解の粗野な改作として示した『政治科学』の理念を断じて認めないということである」<sup>(54)</sup>と述べて、自分の学長演説が「政治科学」の理念を拒否していると主張し、これを『シュピーゲル』対談においても「『大学の自己主張』、それは当時すでに党のなかで、国民社会主義的学生団によって要求されていたいわゆる『政治科学』に対抗しているのです」<sup>(55)</sup>というかたちで繰り返している。しかし、われわれの知る限り、ハイデガーが学長演説のなかで直接にこの「政治科学」を引き合いに出して批判した箇所は存在しない。「政治科学」 die politische Wissenschaft とは、ハイデガーによれば、学そのもの、学の意味、学の価値を「民族のための効用」によって評価するものと規定されているが、具体的な実例としては、カーステン・ハリーズのように、例えばノーベル賞を受賞した二人の物理学者、フィリップ・レーナルトとヨハン

ネス・シュタルクが「ドイツ的数学」「ドイツ的物理学」などと唱えて、量子力学を非ドイツ的として攻撃して排除しようとした試みをあげることができよう<sup>(56)</sup>。しかし、シュタルクの著『国民社会主義と学問』は1934年、レーナルトの著『ドイツ的物理学』全4巻は1936～37年に出版されているから、ハイデガーの学長演説の時期とは重なり合うことがない。さらに、ハイデガー自身が学長時代に学生組合の集会でこう語ってはいなかったであろうか。「すべての学問は政治的である。知があらゆる問い、あらゆる答えにおいて民族のなかに基礎を置いているという意味で政治的なのである。…『民族のための指導、指導のための民族』という総統の言葉で言われている意味はこれなのである。」<sup>(57)</sup> 私には、このハイデガーの演説の趣旨とナチの「政治科学」とは、根本においてそれほど異なっているとは思えないのである。したがって、ハイデガーが学長演説で「政治科学」に反対したというのも、彼の「弁明」が必要になった後の時代にアド・ホックに、つまり「事後的に」持ち出された方便である可能性が高いと言わなければならない。

ハイデガーの学長演説のなかで用いられているさまざまな用語とその意味・使用頻度の分析によっても、この演説が強くナチズム的、とりわけ突撃隊的な枠組みのなかを動いていることは疑う余地がない。「闘争」Kampfが、例えば「すべての意志的および思考的な能力、すべての心の諸力、身体すべての才能は、闘争をつうじて展開され、闘争のなかで高揚させられ、闘争として保持されなければならない」<sup>(58)</sup>というように、幾度となく強調されているが、こうした「闘争」概念の多用は、学長演説に限らず、学長時代のハイデガーの語法の特徴をなしており、無論のこと、明確にヒトラーの『我が闘争』との関連をもっている。この一節の後に、『戦争論』の著者クラウゼヴィッツのからの引用がきわめて唐突に、しかもわざとらしく行われているが、ファリアスによれば、ハイデガーが引用したクラウゼヴィッツの『三つの告白』はとりわけナチから称賛を受けており、彼は彼のアーリア純血主義と相俟って「隠れたるドイツの予言者」とまで崇拝されていたという<sup>(59)</sup>。ヒトラーの『我が闘争』も何度かこのクラウゼヴィッツを引用して彼に敬意を表している<sup>(60)</sup>から、ハイデガーはヒトラーとクラウゼヴィッツの両方に媚を売っているかのようである。事情を知るヒトラー崇拝者またはナチ信奉者はハイデガーのこうした引用を耳にして内心喝采を叫んだことであろう。また、「進軍についての歩行法則」、「進軍」、「統率と服従」、「出征する」などの用語もすべて軍隊的な用語であって、先にあげたハイデガーのヤスパース宛書簡のなかの「出撃地点」という言葉とも関連して、当時のハイデガーの語法がやはり突撃隊の語法の枠組みのなかにあることは否定することができないのである。もちろん、先に述べたように、これらはエルンスト・ユンガーの言う「総力戦」「総動員」「労働者の武装」などといったナチ的スローガンとのかかわりを濃厚に秘めている。

そして、演説のいたるところに強調されているのは、ドイツ「民族共同体への献身」、「国家の名誉」、「民族の偉大さ」、「ドイツ人の運命」、「民族国家への至高の奉仕」などというきわめて国家主義的・民族ナショナリスティックな諸概念である。ハイデガーも「精神」に言及しな

いわけではないが、それも西欧の思想的伝統とのかかわりにおいてではなくて、次のような文脈においてである。「精神とは、存在の本質に向けて根源的に調律された、知る決意性である。そして民族の精神世界とは…民族の血と大地に根差した諸力を最も深く保持する力、すなわち、民族の現存在を最も内奥かつ広範に刺激し揺り動かす力である。」<sup>(61)</sup>見られるように、この引用文中には順序こそ違え、「血と大地」という紛れもないナチのスローガンがこだましている。

息子のヘルマンが言うように、学長演説には確かに「ヒトラー」も名指しされておらず、単数形の「総統（指導者）」*der Führer* も用いられてはいない。しかし、このような一面的な言い方は、ドイツ語を知らない人々、学長演説を読んだことのない人々を惑わせるものであって、こうした形式的事実もハイデガーの学長演説と国民社会主義との強い内的紐帯を決して覆い隠すことはできない。演説のなかでは、単数形こそ用いられていないが、複数形の「総統（指導者）たち」は *die Führer, jene Führer, in seinen Führern* などのかたちで頻出するし、「指導者性」*Führerschaft* という語もまた用いられている。なぜハイデガーが「総統」を単数形で用いずに複数形で用いたうえに、ドイツ的大学の「この本質が…明晰さと地位と力を得るのは、何よりも、そしていつも、指導者たち自身が指導される者であるときである [傍点筆者]」<sup>(62)</sup>と述べたのかにかんしては、オットー・ペッケラーの論文「指導者たちを指導する？」が主張するように、政治上の指導者であるヒトラーを始めとするナチ指導者たちを学問上の指導者であるハイデガー自身が指導しようという意図すらあった可能性も否定することはできない<sup>(63)</sup>。

ハイデガーはさらに、大学の自治が「否定的自由」から生じた恣意・放縦であるとして、その放逐を叫んでこう述べている。「しばしば持ち出される『アカデミーの自由』はドイツの大学からは追放される」<sup>(64)</sup>、と。また、ドイツの国際連盟脱退に心からの賛意を表して、「始元の偉大さがまだ存立していないとしても、学の本質は、あらゆる成果と『国際的諸機関』とは異なって、今日あるように、決して空疎になったり、使い果たされたりしえないものであろう」<sup>(65)</sup>と述べて、国際機関にたいする誹謗さえもが主張されている。したがって、自分は「戦争好きを哲学的に正当化したりしてはいない」というハイデガーの自己弁護とはまったく反対に、やはりハイデガー自身はきわめてナチス的・突撃隊的・好戦的な諸概念と言辞で自らの学長演説を飾り立てていたのである。

そのきわめつけは、ハイデガーが演説の末尾に引用しているプラトンの『国家』497d9にある語句“τὰ…μεγάλα πάντα ἐπισφαλῆ”をドイツ語で“Alle Große steht im Sturm”（「偉大なるものはすべて嵐 Sturm のなかに立つ」）<sup>(66)</sup>と訳していることである。この文中の“ἐπισφαλῆ”はもともと不確かである、容易ではない、危険に満ちているなどを意味する言葉であって、わざわざ「嵐のなかに立つ」と訳するほどのおおげさな意味はない。藤沢令夫氏の日本語訳でも「すべて大きな企ては危険に満ちていて…」<sup>(67)</sup>とされているとおりである。古代ギリシャ語をよく知るはずのハイデガーがなぜわざわざこのような訳文をあてて、意図的な誤訳であるかに見えるようなことを行っているのかとさえいえば、われわれはリチャード・ウォーリンとともに、

「突撃隊」のドイツ語である Sturmabteilung のなかの Sturm との強い対応関係を想起せざるをえないのであって、ここでもハイデガーが突撃隊に媚を売っていると考えざるをえないのである<sup>(68)</sup>。

ところでハイデガーは、学長演説のなかでは「闘争」の概念を、このようなナチ的意味を強く付与された語法の枠組みのなかで語っているにもかかわらず、「事実と思想」のなかでは、この「闘争」概念がヘラクレイトス的な自然哲学で言われるようなポレモス、すなわち対立的諸要因の抗争、争い、対決に帰着すると強弁し、さらにヘラクレイトスの「この言葉 [ポレモス] は『闘争』 Kampf を意味するのではない」とし、まして戦争 Krieg と考えてはならないとして、「πόλεμος [ポレモス=戦い] の本質は、δεικνύναι [デイクニュナイ=示すこと] と ποιεῖν [ポイエイン=製作すること] とにある。すなわち、ギリシャ語では、開かれたまなざしのうちへとつくりもたらすことにある。これが哲学的に考えられた『闘争』の本質であって、学長演説のなかで語られたことは、哲学的にのみ考えられていたのである<sup>(69)</sup>と述べているが、これもまたまったくのこじつけにほかならない。ヒッポリユトスによって伝えられているヘラクレイトスのこの断片は、「戦い [πόλεμος] は万物の王であり、万物の父である。それはある者を神とし、ある者を人間とした。またある者を奴隷とし、ある者を自由人とした<sup>(70)</sup>というものである。素直に解釈すれば、戦争によって獲得した捕虜を奴隷として売買することが普通の習慣であった古代奴隷制経済社会の当時にあっては、ヘラクレイトスの言う「戦い」ポレモスとはやはり、一般的な意味で言われる戦争でもあり、闘争でもあって、ハイデガーの言うようにたんなる「争い」エリスまたは「対決」などというかたちで中性化して理解されはしないし、ましてさらに一般的な意味での「示すこと」でも「制作すること」でもありえない。ギリシャ語の語源とその言語学的な分析を無視したこのような解釈が方法論的に許されるとすれば、ハイデガーのギリシャ語解釈がしばしばそうであるように、あらゆることが無制限、恣意的、かつ無責任に主張されることになる。

アメリカ合衆国のヘラクレイトス研究者チャールズ・カーンは、ディールス／クランツが番号を付したヘラクレイトスの断片53に注釈を付して、この断片が劇的な要素をもつと同時に人を困惑させる形式をもつこと、この断片とホメロスがゼウスについて述べた「人間たちと神々の父」という表現とが類似していること、そしてポレモスが普通の意味での戦いと対立の普遍的な原理を表すヘラクレイトス的な用語法とのあいだに曖昧さを残していることを指摘しながら、こう述べている。「戦い war が普通の意味で理解される限り、それがどうして可死性と神聖性、奴隷状態と自由に責任があるのかを理解するうえで何ら問題はない。というのは、戦いは（定義によれば）生成するすべてのものの決定計画または因果的要因だからである。残るのは、ポレモスをまったく文字どおりに、普通の戦闘として受け取ることによって、もうひとつの固有の解釈が示されないかどうかである。」だから問題は、「われわれが、神々をも人間をも『示している』または『指示している』戦いからいかなる意味を取り出すことができるか」で

ある。そして、ギゴンを参照しながら、「彼はこう教えている。このことは戦いにおける死に関係づけられなければならない、と。つまり、生き残るものは人間たちとして残り、倒れる者は神性の状態へと高められる。この問いは、死後の人間の運命に関係している…」<sup>(71)</sup>と解釈している。いずれにしても、この断片の解釈上で問題となるのは、「戦い」がなぜ「ある者を神とし、ある者を人間とした」のかということであり、ヘラクレイトスが言うポレモスとは、戦いまたは戦いによる死と不可分に関係しているのであって、カーンのこうした解釈によっても、ハイデガーのように、「戦い」を「争い」と関連づけるならまだしも、「示すこと」、「制作すること」などと関連づけて理解されてはいないのである。

ところで、ハイデガー自身がヘラクレイトスのポレモスを実際に「闘争」と解釈している箇所が知られている。それはハイデガーが学長辞任後の1934年8月28日に、教授資格試験合格者のうち政治教育に合格した者だけを正教授にするための画一的な教育実践機関であるドイツ帝国大学教官アカデミーの設立を準備していた文部次官ヴィルヘルム・シュトゥッカート宛に書いた返書のなかにあり、ファリアスが全文を引用している。それによれば、「それ[学問の再生]は、個別的なもろもろの学派と方向の一面的な支配を意味するのではなくて、まさしく『万物の父』である、精神的なものの中にある『闘争』こそが要求するものである。」<sup>(72)</sup>したがって、学長演説の「闘争」はやはり戦いという意味でのヘラクレイトスのポレモスに関連づけられているのであって、ここでも言い逃れをしようとするハイデガーの「弁明」の戦略は破綻せざるをえない。そして、自分は「戦争好きを哲学的に正当化したりしてはいない」というハイデガーの自己弁護とは裏腹に、「戦争好きを哲学的に正当化し」ていたのは、やはりむしろハイデガー自身にほかならなかったことが理解される。

ハイデガーは「事実と思想」のなかで、学長就任祝賀会の後、バーデン州文部大臣ヴァッカーが学長演説を聞いた感想を彼に述べたとし、彼の演説が①一種の「私的な社会主義」を説いて党綱領を回避した、②人種思想に基づいていない、③「政治科学」の理念を退けている、との三点にわたる見解を表明したと言うが、このことは記録文書によって証明されるか、または第三者によって証言されないかぎり、証拠としての価値をもちえない。さらに、そのすぐ後に、ハイデガーが文部省に行ったとき、当局から①祝賀会にフライブルク大主教（コンラート・グレーバー）を参席させたことはのぞましくない、②そのときのテーブル・スピーチで、ハイデガーが前々学長のザウアーに敬意を表して、彼を目立たせたのは脱線であった、と指示されたと言うが、①はナチとカトリックとの関係から見てありうることであり、②はオットが閲覧したザウアーの日記によって事実であることが確認される<sup>(73)</sup>。この件にかんしてわれわれが記録文書によって確認しうる事実はただこれだけである。

ハイデガーは、学長演説が、ヴァッカーのように、ハイデガーに対するナチ党内の反対派が異質のものをかぎつけたかぎりでは理解されたといってよいが、それ以外には一般の人々によっては理解されず、また党と権威筋からもいっそう理解されず、「風にむかって語られた」<sup>(74)</sup>

と述べて、大袈裟に嘆いて見せているが、しかし、これもまた虚偽にほかならない。ハイデガーの学長演説は、多くの同僚とナチ管区指導部によってラジオ放送されるようにという働きかけがあったほど、ナチ関係者の期待を集めていた<sup>(75)</sup>ばかりか、たとえその哲学的含蓄が完全には理解されなかったにしても、実際には官公庁、ナチ政権信奉者、ナチ党機関紙、ナチ学生同盟の機関紙などによって、クリークやボイムラーなど、ほぼ同時期に行われたそのほかのどの学長の演説よりもはるかにチナス的・戦闘的なものであり、大学変革に対する最も重要な貢献であるとして評価されていたのである。ファリアスによれば、例えば、歴史学者でありナチ突撃隊員であったリヒャルト・ハルダーはこう述べたという。ハイデガーの学長演説は「闘争演説であって、固い決意をもって時代のなかに身を乗り出した者の哲学的呼びかけであり、大学を真剣に考え、学問に真っ向から対決したもの、真の簡潔さと固い意志と大胆な不敵さをもってなされた真に政治的な宣言である」<sup>(76)</sup>、と。

この学長演説が同年7月に最初に出版されたとき、大ドイツ・ナチ運動闘争紙『フェルキツシャー・ベオバハター（民族の観察者）』は、このことを紹介するとともに、「有名な哲学者マルティン・ハイデガーのフライブルク（ブライスガウ）大学の学長就任時に行った演説は広く注目されたものであった」<sup>(77)</sup>と評価したうえで、その一部を再録しているし、また『フライブルク新聞』は同年7月16日と1934年1月6日の二度にわたってハイデガーの学長演説を掲載したことが知られている。また皮肉なことに、後にハイデガーと敵対的な関係になるエルンスト・クリークが主宰する雑誌『生成する民族』には、1934年になってもなお、ハイデガーの学長演説を礼讃する論文が掲載されていたという。ハイデガーのこの演説は、一般の人々によって理解されなかったどころか、例えば彼を学長に推挙するのに功績のあったシャーデヴァルトらによって『フライブルク学生新聞』などで繰り返し解説され、ハイデガーと密接なつながりをもってナチ学生同盟・ドイツ学生団・突撃隊などの指導者をつうじて学生と市民たちのあいだに確実に浸透していき、とりわけ学生たちの運動の精神的な支柱となったことは、シュネーベルガーが収集した資料のなかに見られるとおりである。この点においても、ハイデガーはその政治責任を決して免れることができないであろう。

最後に、ハイデガー自身が『シュピーゲル』対談のなかで述べ、息子のヘルマンが「事実と思想」の序文で繰り返していることだが、この学長演説の第2版が刊行された直後にハイデガーが学長を辞任し、学長演説が「このあとすぐに国民社会主義ドイツ労働者党の指示により、書店から回収された」<sup>(78)</sup>ということについて、事実を検証して見よう。ファリアスの調査によれば、これもまたはっきりとした虚偽であることがわかる。彼によれば、ドイツ国内のすべての著作物が厳しい検閲を受け、また紙原料が欠乏していた1937年に、この学長演説の第3版にかんしてはまだ4千部から6千部という大量の部数が印刷されており、また何とハイデガー自身が同年4月27日にこの第3版をマリア・リーツマン夫人に署名入りで贈呈していることが分かっている<sup>(79)</sup>。このことは、ハイデガーが事実を知りながら、意図的に虚偽を述べているこ

との動かぬ証拠である。ついでに言えば、ファリアスが調査したメモによれば、第二次世界大戦末期の「1944年1月、用紙不足のせいで書籍の出版が極度に制約され、それどころか不能になったいた時期に、文部省は、ハイデガーの著作を印刷するために、出版社クロスターマン社に無条件で用紙を配給している」<sup>(80)</sup>という。このことは、とりわけ学長時代に生じたプロイセン文部大臣ルストのハイデガーに対する好意もあって、2度までも彼をベルリン大学に招聘する話があったことに象徴されるように、ハイデガーがナチ政府、とりわけプロイセンと良好な関係を保ち続けたこと、そして著作の出版にかんしては弾圧どころか、破格の優遇措置を受けていたことを示すものであり、こうした点でも彼の弁明は事実と正反対のことを述べていると言わざるをえないのである。

## (二) 党員学長としてのハイデガーの活動

先に述べたとおり、ハイデガーはナチに入党したさいに、個人および学長として決して党の仕事を引き受けたり、党活動をしないという条件を付け加えたうえで、形式的に入党したと述べ、また彼自身が党指導部と党機関に助言したり、会話に加わったり、決定原稿を書いたりしたことさえ決してなかったと述べている<sup>(81)</sup>。しかし、これまでの本論の叙述から容易に推測がつくように、このこともまた、ハイデガーの学長時代の数々の言動に照らせば、重大な虚偽であることがわかる。

ハイデガーが学長就任後にハイデルベルクやチュービンゲンなどの大学で行った数々の講演・演説、愛国者シュラーゲター追悼演説、ドイツ学生連盟などに寄稿したエッセイ、新聞などへの寄稿、ラジオ放送での説話、大学内部で学長として出した通達など、現在までに明らかにされている資料を見るかぎり、ハイデガーがほとんど熱狂的ともいえるほどにナチズムに心酔し、総統ヒトラーを崇拜していただけでなく、「労働奉仕」を初めとする突撃隊の基本精神をフライブルクにおいて実践しようとし、学生諸団体との強いつながりのもとに、大学を再編成して民族と国家にたいする新しい関係をつくりあげ、ナチの「指導者原理」をきわめて忠実・強引にフライブルク大学内外の教育制度改革のなかにもちこみ、学問の自由や学部自治を廃して、文部省から任命された「指導者＝学長」に学部長・評議員・事務長などをすべて任命するなどの権限を与えて、全体主義的国家のための指導と服従が貫徹するような大学制度をつくりあげようとしたということは、いかなるハイデガー主義者といえども、決して否定することはできない。学長演説後の代表的な一部だけを引用しよう。

ハイデガーのナチ総統ヒトラーに対する態度として、あまりにも有名な一節が伝えられている。「学説や理念が諸君の存在の規範であってはならない。総統自身が、総統のみが、今日のドイツ、そして未来のドイツの現実であり、その掟である。深く知ることを学べ。今からは、すべての事物が決断を要求し、すべての行為が責任を要求するからである。」(1933年11月3日の『フライブルク学生新聞』)<sup>(82)</sup>



新しい学生像とナチ革命の位置付けにかんしては、ハイデガーは1933年11月30日にチュービンゲンで行った講演「ナチ国家の大学」のなかで、明確にこう述べている。「新しい学生は、もはや大学に籍を置く市民ではなく、労働奉仕に携わり、ナチ突撃隊やナチ親衛隊に属し、野外演習を行う。勉強は今や知的奉仕である。」「しかし、ドイツの大学における革命は終わっていないばかりか、いまだ始まってさえいない。総統の言う意味で緩やかな進展がそこにあるのであれば、それはただ闘争をつうじてのみ、闘争のなかでのみなされうるものであろう。…ナチ革命は、人間の、学生の、次代の若い大学教師たちの完全な再教育であり、将来もそうであらう。」<sup>(83)</sup>1933年のナチによる権力掌握がナチ革命の完成ではなく、序曲にすぎないという位置付けは、ハイデガーが突撃隊と共有していた思想にほかならなかった。

ハイデガーがめざしていた教育制度改革の本質を示すものとして、「新しいナチ国家のなかでこれまで個々の国家が直接に消えて行けば行くほど、それだけより決然と、かつより根源的に、それぞれの管区の民族性が目覚め、保持されなければならない。…この使命を実現するために、学校制度全体の教育活動は方針を変えてナチズムの国家意志の軌道に乗ったのである」<sup>(84)</sup>という発言が知られているし、学長辞任後のことであるからわれわれはいっそう重大に受け止めなければならないのだが、先に述べたドイツ帝国大学教官アカデミーの設立にかんするハイデガーの具体的な提言のなかには、「これまでの学問を、ナチズムが問題とする方向およびナチズムの力から根本的に考え直すこと」、「責任者と教師は、その独自の使命をはたすためにも、何よりもまずナチ黨員でなければならない。…ナチ精神を体現した黨員として学問の革命を内部から準備することのできる人物でなければならない」<sup>(85)</sup>とある。これでもう十分であろう。

それではハイデガーは、学長として大学内部でどのように行動したのか。オットによれば、ハイデガーは、自らの学長就任祝賀会の時にナチによって崇拜されていた愛国者ホルスト・ヴェッセルの歌を歌わせ、さらにその第4番目に「ジーク・ハイル」（勝利万歳）の挙手と同じ右手の挙手をさせて、そのことで一定の物議をかもしただが、このことはハイデガーの後の学長としての活動を象徴することになった。オットとファリアスは、ハイデガーの学長時代の一連の措置のうち、ハイデガーが学長として悪名高いあの「公務員制度再建法」をとくに厳密に実施して、予定期限を待たずにユダヤ人の休職処分を行ったこと、大学の講義の初めと終わりに「ハイル・ヒトラー」のナチ式敬礼を義務づけたこと、軍事教練である国防スポーツ訓練を全学期カリキュラム化したこと、全学生に労働奉仕実習を含む「国防軍事科学」と「人種学」を必修科目としたこと、学生の人種局を設立したこと、突撃隊や親衛隊に所属する学生への学費の面での特別優遇措置を適用したことなどに特に注意を促している<sup>(86)</sup>。

ここでわれわれは、「事実と思想」に直接叙述されている事柄の検討に戻ることにしよう。ハイデガーは、「事実と思想」のなかで、自分が職務開始2日目にしてユダヤ人プラカードの掲示を禁止し、ナチにとって不都合な教授の解雇要求を退け、肅清行為に対しては不正と損害を防ぐなどの措置を行うなど、ナチに抵抗した実績としていくつかのことをあげている。息子

のヘルマンも、父マルティンが『シュピーゲル』対談で述べたことを「事実と思想」の序文のなかでそのまま繰り返しており、マルティン・ハイデガーが大学での焚書を禁止したこと、フォン・ヘヴェシーやタンハウザーなどのユダヤ人教授を大学に引き留めたことなどをあげている。しかし、われわれは、これまでやや詳細に検討してきたように、とりわけハイデガーの場合には彼自身の言葉をそのまま信用することができないことをすでに了解済みだから、実際の記録と文書、そして第三者の証言などの確実な証拠にもとづいてのみ、事実関係を突き止めなければならない。

ハイデガーが言うユダヤ人プラカード Judenplakaten とは、ドイツ学生連盟の指導のもとで1933年4月12日に配られたビラのことであろうと推測される。オットによれば、それは「非ドイツ精神に抗す」という表題をもち、12のテーゼが書かれた、47.5×70cmの縦サイズの白い紙であった。ハイデガーは就任2日にしてこのビラを禁止したというが、当然ながら、学長名によるこの命令文書が存在しないかぎり、これが事実だということは証明され得ない。たとえそれが事実であったにしても、その理由がその反ユダヤ的内容にあったとは考えにくいであろう。オットが言うように、それは美的な理由からであったかも知れないし、その必要がすでになくなったからであったかも知れない。『シュピーゲル』対談でハイデガーが言及している焚書の禁止にかんしては、オットの調査によれば、これも事実と相違する。実際に焚書事件に居合わせていた証言者によれば、1933年5月10日は雨模様であったが、この天候について実際にフライブルク大学図書館前広場で焚書が行われたという。ハイデガーはこの野蛮な行動を阻止せず、また阻止することもできなかったのである<sup>(87)</sup>。

ハイデガーは学長職を引き受けた理由のひとつに、「不適當な人物の進出」に対抗しうることとをあげ、実際にナチから要求された「肅清行為」に対抗して「不正と損害」を防ぐことができた、と述べている。『シュピーゲル』対談で、その実例としてあげられている事例を検討してみよう。ハイデガーが古典文献学のエドゥアルト・フレンケルとフォン・ヘヴェシーの二人のユダヤ系教授の講義資格剥奪に反対したということは、彼の1933年7月12日の文部省宛書簡で明らかであり、事実として確認される。ユダヤ系の物理化学教授ゲオルク・フォン・ヘヴェシーは、ハンガリーの政治エリート一族の出で、当時国際的に名高い化学者であり、いくつもの賞の受賞者である。彼は後にデンマークに移住して、1943年にノーベル賞を受けたほど、応用化学と化学者養成にかんしては抜きん出た人物であって、ロックフェラー財団から莫大な資金を得て、これをドイツに提供してもいた。したがって、ハイデガーでさえも、このユダヤ系人物を失うことはさまざまな意味で利害のうえで不利に働くと考えたというのが、その反対の真の理由であって、決してユダヤ人を擁護しようとして行動したわけではないであろう。もう一人のジークフリート・タンハウザーは、フライブルク大学付属病院長をも努めた医学部教授である。タンハウザーは1934年に強制退職させられ、アメリカに亡命した。1945年12月の政治的浄化委員会報告書によれば、ハイデガーが自らの反ユダヤ主義の嫌疑を打ち消そうとして自

分が学長時代に彼を含む二人のユダヤ人教授を任命したことを持ち出したが、これに対してはフライブルク学長と前学長から異議が唱えられている<sup>(88)</sup>。

ハイデガーは、彼が手厚く助けたユダヤ系の人物として、例えばヘレーネ・ヴァイスの名前をあげているが、そのほかにもユダヤ系のヴェルナー・ブロックの事例が知られている。彼はゲッティンゲン大学で「ニーチェの文化の理念」をテーマとして教授資格を取得したが、1931年にハイデガーによって注目され、彼の提案でフライブルクで教授資格を取得し直したのち、ハイデガーのもとで哲学の助手を務めていた。しかし、バーデンの帝国地方長官ロバート・ヴァーグナーの1933年10月の通達により、大学を追われることになり、イギリスのケンブリッジに亡命した。ハイデガーの弟子を自称するマックス・ミュラーの報告によれば、この時ハイデガーはイギリスに手紙を送り、彼の受け入れを助けたという<sup>(89)</sup>。これらのいくつかの事例については事実であろう。しかし、もちろんこうした行動がハイデガーのなしたすべてでは決してなかったのであって、同じくミュラーの証言によれば、ハイデガーが学長になって以来、彼のところで学位を取得したユダヤ人は一人もいなかったともいう。また、ハイデガーの反ユダヤ的言辞についても、例えば、後に本論文で取り上げるバウムガルテン事件に関連してハイデガーが上記の「ユダヤ人フレンケル」との付き合いを問題にしたことがあるほか、ハイデガーがヴィクトル・シュヴェーラー宛に書いた1929年10月20日の手紙<sup>(90)</sup>などが知られている。

ここで、大学改革への取り組みにかんするハイデガーの弁明を検討することにしよう。彼が学長としてどのような姿勢と観点から大学改革に取り組んだのかにかんして、「事実と思想」はこう述べている。「私は、ハイデルベルクと専門学校化の両方から脅かされている危険を、制度改革の提起によって対応しようと試みた。その改革は、諸学部の本質と大学の統一を救い出すことができるようにと学部長をはりつけることで、可能になるはずであった<sup>(91)</sup>、と。ここでいう「ハイデルベルク」とは、後に見るように、ヨハン・シュタイン博士によって指導されていたハイデルベルクのナチ・グループのことであり、そこからの「危険」とはナチ党内部の抗争にかかわっていることが了解されるが、しかし、「専門学校化の危険」とこれに対抗する「諸学部の本質と大学の統一を救い出す」ための「制度改革」にかんしては、もし当時の大学情勢を知らなければ、ハイデガーの言うことをそのまま認めてしまう危険性がある。ハイデガーがここで述べている「制度改革」とは、彼が「ある種の再生によって救い出そうと試みたこと」であって、「そのためにこそ私は唯一学長職を引き受けたのであった」というほど、重要なものであった。

ところで、このハイデガーの言葉の真意を知る手掛かりが、レーム肅清以前に権勢を振るっており、ハイデガーと親しく、さまざまな会合・集会でしばしば同席していた帝国学生指導者オスカー・シュテーベルが述べている言葉のなかに見られる。一例だけを引けば、それはこうである。「ドイツ学生団および専門学校学生団が帝国中央本部に統合していること」が「ドイツの教育制度の壮大な統一への第一歩になる」、そして「専門学校は、今日、さまざまな種類

があり、統一されていないが、それを学生団のように組織することができるなら、専門学校全体を体系的にドイツの教育制度の中に組み入れることも難しくはない。<sup>(92)</sup>つまり、ハイデガーが言う「専門学校化の危険」とは実際には、専門学校をナチ国家の教育制度とは無関係にそのままにしておくことを意味し、ハイデガーの「制度改革の提起」とは、専門学校を学生団のように組織してこれを「ナチズムの指導下」に置くことを意味していたのである。そしてまた、「諸学部の本質と大学の統一を救い出すことができるようにと学部長をはりつける」とは実際には、大学教官全員集会を解散し、学部および評議会の自治と議決権を剥奪して、文部・法務大臣から任命された「指導者＝学長」に集中させ、事務局長と学部長の任命権・解任権をも学長の権限とするという、徹底的に非民主主義的・独裁的な大学改悪にほかならなかった。

ハイデガーは、こうした考えにもとづいて、大学をもナチの指導者原理と統制・画一化のもとに置いて、従来の大学基本法を改悪することを基本的なねらいとする大学の「制度改革」を推進したのであり、そしてカールスルーエにあるバーデン州文部省は、ハイデガーの全面的な協力のもとに、同年秋に大学基本法の改正を行った<sup>(93)</sup>。そしてハイデガーは、彼自身が期待したように、10月1日付で文部大臣から正式に「指導者－学長」に任命され、この「指導者原理」と権限集中とにもとづいて学部長の任命そのほかの仕事を行ったのである。オットによれば、この法の前文は「ハイデガーの言葉で書かれたとってよい」<sup>(94)</sup>のであって、そのために彼は戦後の政治的浄化委員会でこの件を追及されることになった。

さらに、ハイデガーの学長時代の通達のなかからふたつの特徴的な事例を挙げておこう。彼は、後に述べるトートナウベルク合宿の時に「大学制度のナチズム的な変革の目標を鮮明に理解すること」(1933年9月22日)<sup>(95)</sup>と指示し、さらにこうしたラディカリズムのために大学内でほとんど支持を失いかけた時点でもなお「ナチズムの国家の諸力と要求にもとづいて学術的な教育を変革する」(同年12月20日)<sup>(96)</sup>ことを呼びかけていた。したがって、われわれは、ハイデガーが行った大学改革とは、全体として見れば、大学を新しい「指導者原理」に適合させて、大学を全体主義的な国家的統制のもとに置くということにほかならなかったのであり、彼が学長職を引き受けた本心はこうした方向に大学を導こうとすることにあっただと言わざるをえない。そして、ほかならぬこうしたラディカリズムのゆえに、ハイデガーは周囲から離反し、学長職を放棄して、挫折を体験しなければならなかったのである。

### (三) ハイデガーの大学外での野心

ところで、もちろんハイデガーの野心はたんに大学内にとどまっていたわけではない。彼は、すでに述べたように、ナチに入党する以前から、エルンスト・クリークが主宰する「ドイツ大学教師文化政治研究集団」結成の呼びかけに全面的に賛同して、すでに大学外のナチズムの運動に向かって「出撃」していたほか、フライブルクにおける「ナチ大学教師連盟」Nationalsozialistischer Lehrerbund (NSLB) 創設以来の構成員として活動し、学長を辞任した後もこの活動を継続し

ている。

ハイデガーは、学長に就任した翌日の4月24日に、ナチ突撃隊の前衛的な役割をはたしていた「ドイツ学生同盟」Die Deutsche Studetenschaftの学術局長プレットナーに手紙を送り、この同盟の指導者たちを集めた集会の開催を呼びかけた。学長就任の翌日に手紙を送付したということは、この呼びかけが学長就任以前にあらかじめ周到に準備されていたことを意味する。ハイデガーは、実際に6月10日と11日にベルリンで開催されたこの集会に出席し、ボイムラーとともに、「教育と研究」という演題で講演を行った。さらに彼は、多くの場合、ナチ学生の求めに応じて、ハイデルベルク大学、キール大学、チュービンゲン大学などの各地で講演を行い、アジテーターとして学生の活動を支援するとともに、それぞれの大学の「統制化」に影響力を行使している。ハイデガーの講演の内容にかんする報道や記録文書を見るかぎり、ドイツの大学をナチ革命へと駆り立て、ナチ国家態勢のなかへと組み込むことがその主張の基本的な趣旨であって、国民社会主義の運動と無関係に「大学」「学問」「真理」が語られてはいないのである。この点でも、学生団体と連帯して、学生団体に依拠し、学生と教官たちに働きかけて彼らをナチ革命へと結集させたばかりか、学生と教官とを同じ「闘争」の場に立たせることで学生諸団体の力を借りて大学の「統制」を推進しようとしたハイデガーの政治的・倫理的責任は、決して免れえないであろう。

またハイデガーは、「ドイツ大学連合」Der Verband der Deutschen Hochschulenと「学長会議」Die Rektorenkonferenzとのふたつの組織のなかでも、ドイツ学生同盟の影響力を背景に、ナチ革命に向けたラディカル化をはかろうとしていた。ファリアスによれば、ドイツ大学連合は自主的に「統制」を行ってヒトラーと討議の場をもとうとしたが、ドイツ学生同盟から横槍が入り、ドイツ大学連合が「統制」の上できわめて不十分であって学生同盟にも敵対しているという非難が浴びせられ、学生同盟は総統との会見を取り消すように求めていた。学長就任式を行う以前のハイデガーは、この件で5月20日にヒトラーにあてて次のような電報を打電している。「ベルリン帝国宰相官房内、帝国宰相閣下。ドイツ大学連合理事会との計画中の話し合いの会を、大学連合指導部においてとくに必要な統制が完了する時点まで延期されますよう要請致します。フライブルク大学学長ハイデガー [傍点筆者]。』<sup>(97)</sup> こうした言動を見ても、ハイデガーがここでも大学連合のなかでも「統制」の遂行のために働きかけていること、そして突撃隊の橋頭堡とも呼ばれた学生同盟の立場に従って行動していることが分かる。ハイデガーとヒトラーとの良好な関係を示すこの電文は、当然ながら、戦後の政治的浄化委員会の追及するところとなった。

ドイツ大学連合という組織は、ドイツ学長会議の諮問機関のようなもので、大学教員の社会保障・身分保障を大学単位で要求する組織であったという。ハイデガーはここでも、クリークらと共同して、「指導者原理」と「統制」を貫徹する立場から、こうした二重の構造と民主的運営を解消しようと画策し、学長会議をもこうした過激化のために利用しようとしていた。6

月8日にエルフルトで開催された学長会議では、この画策が失敗に終わり、ヒトラーとの話し合いとドイツ大学連合との連帯が確認されたのだが、ハイデガーは、フランクフルト大学学長エルンスト・クリーク、キール大学ロタール・ヴォルフ、ゲッティンゲン大学学長フリードリヒ・ノイマンとともに、席を蹴って退場したと伝えられる<sup>(98)</sup>。ハイデガーがヒトラーにあてた電文は、こうしたもろもろの出来事との関連で理解されるべきである。

ところが、ハイデガーは「事実と思想」のなかで、確かに「夏学期にエルフルトで開催された学長会議」に言及しているのだが、まったく驚いたことに、そこでは先に述べた「第二の危険」、すなわち「学部の教授活動全体を、医者、裁判官、教師の職能階級とそれらの主張および要求とで定め、そのようにして大学を最終的には職業専門学校へと分割しようと躍起になる」という危険があることが認識されたと述べ、さらに「ただたんに大学の内的統一だけでなく、アカデミーの教育の根本様式もまたそのことによって脅かされていた」と言うのである<sup>(99)</sup>。しかし、われわれは、大学の内的統一とアカデミーの教育の根本様式を脅かしていたものこそ、ハイデガーが実践しようとしていたナチ革命のラディカリズムであったことをすでに知っており、真実のみを追求すべき哲学者が事態をまったくあべこべに描いていることに驚かされるのである。

ついでに言えば、ハイデガーは、後になってもう一度ヒトラーに電報を打電しているが、それは同年11月9日のことである。それは、「総統に対する忠誠宣言」であって、ハイデガー、フライブルク市長ケルバー、そしてフライブルクのナチ学生同盟・ドイツ学生団指導者であり突撃隊長でもあったハインリヒ・フォン・ツア・ミューレンとの3人の連名による電文の内容はこうであった。「われわれの祖国を困窮と分裂と、そして統一と決断と名誉の喪失状態から救い出してくれた総統、自己責任を負った民族共同体の新しい精神の師であり闘士である総統に、南ドイツの辺境の地の大学町の市民と学生と教官一同は、無条件の従者として忠誠を誓うものです。」<sup>(100)</sup>ハイデガーとフォン・ツア・ミューレンとの親しい関係について、われわれはハイデガー学長辞任の問題にかかわって後でもう一度触れることになる。なお、ハイデガーは、この2日後の11月11日にも、ライプツィヒのアルバート・ホールで開催された「ドイツ学術界の大政治集会」にベルリン大学学長オイゲン・フィッシャーらとともに出席して、ヒトラーにたいして支持票を投ずるようにと演説をぶっている。

ところでハイデガーは、そのほかにもすでに言及したように、学長時代から1934年9月までベルリンのプロイセン文部省に協力して「ドイツ帝国・大学教官アカデミー」を創設するための大学政策プロジェクトにかかわって仕事をしており、プロイセン大学教官アカデミーの会長候補にまであげられていた。このことは、ハイデガーの学長時代から学長辞任後を通じてのことであるから、いっそう注目に値する。ファリアスによれば、プロイセン文部次官ヴィルヘルム・シュトゥッカーは、大学の教授資格認定権を学部から剥奪して文部省のもとに置き、ナチ的観点からする政治教育の課程を終了した者だけに教授資格を与えることを目的としてアカ

デミーの組織化を推進しており、この計画に協力を求めてナチとして知られている教授たちに構想提案を依頼した。ハイデガーは1934年8月28日付けでこれに返事を書き、先に引用したように、よく考えぬいた独自の提案を書き送った<sup>(101)</sup>。このなかの一節は先に引用したとおりである。

さらに、ハイデガーは「ドイツ法律アカデミー」の設立にもその委員として参加しており、少なくとも1936年までその法哲学委員会で活動していた。そして、これもまた、ファリアスの調査によれば、学長を辞任した後にハイデガーは、このアカデミーとの関連で、ローゼンベルク事務局の協力者とも連携して、高級幹部養成という課題をもった、きわめて政治的意味の強い「ドイツ政治大学」にも関係していた。つまり、ハイデガーはこの「ドイツ政治大学」の連続特別講義をも受け持ち、とりわけ1934/35年の冬学期にはルドルフ・ヘス、ゲッベルス、ヘルマン・ゲーリング、ローゼンベルク、シーラッハらのそうそうたるナチ幹部たちに交じって講師を務めていたのである<sup>(102)</sup>。ハイデガーは1933年9月にプロイセン文部大臣ベルンハルト・ルストによって、2度目のことだが、ベルリン大学に招聘されたり、これにやや遅れてバイエルン文部大臣ハンス・シエムからもミュンヘン大学へ招聘されたりしたが、こうした事実も、ハイデガーがこれらのいずれをも断ったにしても、ハイデガーのアクティヴなナチとしてのこれまでの全国を股にかけた活躍が高く評価されてのことである。

以上に展開したすべての理由から、われわれは、ナチ党機関から相談をもちかけられたことも、党幹部と政治的な関係をもち続けたことも、さらにまた学長として党活動を行ったりしたこともないという、ハイデガーの「事実と思想」のなかの弁明が、あらゆる観点から見て、事情に通じていない人々を惑わせる、まったくの虚偽であり、事実の捏造であると断定することができる。

#### （四）いくつかの密告事件への関与

ハイデガーは「事実と思想」のなかで、彼が学長時代にあたかもナチによる「粛清行為」を阻止しえたかのように記述しているが、しかし、われわれが文書によって確認できるのは、ハイデガー自身の言葉とは反対に、彼が「粛清行為」に関係したいくつかの事件の存在である。したがって、その限りでは、こうしたハイデガーの叙述もまた虚偽と言わざるをえない。これらはハイデガーの学長時代のきわめて陰湿で暗黒の側面にほかならないが、ここでは、例えばシュタウディングー事件とバウムガルテン事件だけをあげることにしよう。

ファリアスとオットによれば、ハイデガーは1933年9月29日、バーデン州高等教育審議官フェーアレに対し、後になってノーベル賞を受けた世界的に有名な化学者であり平和主義者でもあったヘルマン・シュタウディングーにかんして、たんなる噂をもとに政治的にかなり問題のある情報を提供し、これを受けてフェーアレはフライブルク警察に告訴した。この事件は、カールスルーエの秘密国家警察によって「シュテルンハイム作戦」と名付けられ、ただちに捜

査が開始された。シュタウディングーは、第一次世界大戦以前にチューリヒ工科大学教授の地位にあったが、当時平和主義・反軍事主義の立場に立っており、この時にも彼の過去の民族的信念と平和主義的姿勢、そして化学的知識の機密漏洩の嫌疑などが問題とされた。告訴の後、ハイデガーはシュタウディングーの免職処分を当局にたいして提起したが、文部大臣を經由して国務省に提起されることになったこの公職追放の提議は、何の落ち度もないシュタウディングーが当局から呼び出されて何度も尋問を受け、さらに6ヶ月のあいだ国務省による監視下に置かれたのちに、1934年10月になって証拠不十分で却下されることになった。学長ハイデガーは、自らが関与した告発事件にかんして、これに対応する事実関係をゲシュタポにたいして何ら立証することができなかつたにもかかわらず、一人の無実な人間をおよそ半年間にわたって責め苛んだのである。

オットは、ハイデガーが学長職を断念した前後の時期に数度にわたってシュタウディングーにかんして書いた否定的で暴露的な報告文書を調査したうえで、この事件の全貌を明らかにしているから、事実関係と当時のハイデガーのきわめて陰湿な態度とは疑うことができない。オットは、この陰湿な告発事件の原因が、哲学者ハイデガーの自然科学者シュタウディングーにたいする「嫉妬」という個人的な動機に由来すると見なしている<sup>(103)</sup>。そして、この個人的な動機が、ナチ機関紙『アレマン人』がハイデガーの講演にたいして悪意のある批評記事を掲載したそのすぐ下に、シュタウディングー教授による「4カ年計画と化学」にかんする講演の記事を載せて、両者を対照させつつ、シュタウディングーの肩をもったことに関連すると見なしている。

さて、バウムガルテン事件とは、マックス・ウェーバーの甥にあたるエドゥアルト・バウムガルテンがナチに入党しようとしたさいに、ハイデガーが1933年12月16日にゲッティンゲンのナチ大学教師連盟宛に彼にかんする所見を送り<sup>(104)</sup>、「バウムガルテンは、いずれにせよ当地ではナチではまったくなかった。彼は縁戚関係や精神的な姿勢からして、マックス・ウェーバーを中心とした自由主義的・民主主義的なハイデルベルク知識人サークルを出自としている」ばかりか、「ユダヤ人フレンケルと活発な連絡をとった」と述べて、彼にたいしてただちにナチ党への入党を許可する前に保護観察期間を設けるようにと進言した、という事件のことである。まさしくこのサークルにぞくしていたカール・ヤスパースは、翌年になってからこの所見の写しを読んで、ハイデガーの自由主義・民主主義とユダヤ人に対する敵対的な態度のために、そして長年の友人であった自分に対する裏切りのゆえに、ハイデガーに対する見方を決定的に変えることになった<sup>(105)</sup>。そして、ヤスパースは、先に述べた戦後の政治的浄化委員会宛のハイデガーにかんする所見のなかでこのバウムガルテン問題についても触れ、この問題がこの委員会においても追及の対象とされた。

ところでわれわれは、「肅清行為」に関連して「事実と思想」のなかに何げなく書かれているハイデガーの言葉を見落とすことはできない。そこにはこう書かれている。肅清を「ただ防



止するという仕事は、その遂行というかたちでは現れず、同僚団体がそれを何か体験するということは不必要でもあった。法律学、医学、自然科学の諸学部の著名な功績ある同僚たちは、彼らに課されていたことを聞けば、驚いたことであろう。<sup>(106)</sup>この言葉のなかには、学長ハイデガーがナチ党とのかかわりで、著名な同僚たちの身辺にかんして、何か秘密裡にさまざまな情報を握っていたと見られかねない陰險な側面が潜んでいて、慄然とした気持ちを押しさえることができない。シュタウディングガー事件とバウムガルテン事件とは、たまたま表面に浮かび出た、事実関係が今では突き止められている代表的な事件だったのであって、当時はそれ以外のさまざまな陰險な陰謀が渦巻いていた可能性がある。オットによれば、第一次世界大戦従軍中のハイデガーの仕事が郵便査察部の検閲であり、当時ハイデガーが同僚の書簡を読んで重要な情報を入手しているという噂が流れたというが、このこともハイデガー個人の秘められた暗部というべきものと関係する可能性がある<sup>(107)</sup>。

われわれが翻訳した『ハイデガー哲学とナチズム』（奥谷浩一・小野滋男・鈴木恒夫・横田栄一訳、北大図書刊行会、1999年、原題は“On Heidegger's Nazism and Philosophy”）の著者トム・ロックモアが私宛に送ってくれた私信では、ハイデガーは、ミュンヘン大学教授であり新カント派の哲学者でもあったリヒャルト・ヘーニヒスヴァルトが1933年9月1日に非アーリア系であることをもって退職させられた事件にも関与しているとのことである。この事件の詳細については別稿に譲ることにしたいが、例えばオットらの手によって詳しい調査が開始されたフライブルク大学学長室の記録文書などの公開がさらに進むならば、ハイデガーの学長時代に秘められたこうした歴史の暗部がさらに明るみに出てくる可能性があるだろう。

## （五） トートナウベルク合宿事件

トートナウベルク合宿事件とは、ハイデガーの「事実と思想」にのみ登場する事件であって、そのほかの弁明には述べられていないだけに、事実関係としては実証性に乏しい事件である。ハイデガーは「トートナウベルク合宿」事件が1933/34年の冬学期に生じたさまざまな不愉快な事件の前兆となり、自らの学長職辞任につながる動きの遠因となったと述べている。ハイデガーはこの合宿に参加する人々の選択が「国民社会主義という意味での党所属と実際活動という観点から行われたのではなかった」と説明しており、またこの合宿の目的が「この合宿は、講師と学生たちが本来の学期の仕事を準備し、学問と学問的労働の本質にかんする私の理解を明確にし、それと同時にこれを論究と討論に付するはずであった」<sup>(108)</sup>と述べている。そして、ハイデルベルク・グループが合宿をぶち壊すようにとの委託をナチ当局から受けて参加したために、最初は実り多かった対話が不愉快な出来事によって台なしにされ、これが自分とナチとの敵対関係のはじまりであったとしている。しかし、これらの言明のいずれも虚偽であることがただちに判明する。この事件をハイデガーとは違った角度から問題にして見よう。

先に述べたように、このトートナウベルク合宿というのは、ハイデガーがドイツ学生同盟の

指導者会議で提起した、模範的・学問的なキャンプのことであり、大学教官と学生と労働者との精神的信頼関係と政治的盟友関係の強化をねらいとした模範的・学問的なキャンプのことであった。オットによれば、それは、1933年10月4日から10日まで設営され、フライブルクからハイデガーの山荘のあるトートナウベルクまでのかなりの距離を、「突撃隊ないしは親衛隊の制服で、場合によっては腕章をつけた鉄兜団の制服で」、しかも往復の徒歩によって行進するという強行軍をともなっていた。若手講師と助手の責任者はハイデガーであり、この合宿には、ハイデガーの指導のもと、フライブルク大学からはルドルフ・シュターデルマン、ハイデルベルク大学からはヨハン・シュタイン、キール大学からはオット・リッセがそれぞれのグループを管轄する責任者として参加していた。この合宿にはカトリックの学生も参加していたが、上記の服装の指定に見られるように、基本的にはナチによって主導されたナチ強化のための企画にほかならなかった。

ハイデガーは、この合宿への参加を許された者に出した通達のなかで、この合宿またはキャンプの目的にかんして、「事実と思想」のなかでの弁明とはまったく反対に、こう述べている。「本来の合宿労働は、ドイツ精神からなる将来の高邁な大学を勝ち取るための方途と手段を考えるためのものである。それには、一、大学制度の目下のあり方を意識化すること、…二、大学制度のナチズム的な変革の目標を鮮明に理解すること…」<sup>(109)</sup>。したがって、ハイデガーは、あのきわめてナチ的・政治的色彩の濃厚な講演「新しい帝国の大学」をハイデルベルクで行ったにもかかわらず、「私はハイデルベルク大学で学の本質にかんする講演を行った」<sup>(110)</sup>と述べたように、ここでもこの合宿に学問的な粉飾と色彩を施して、おのれのナチ活動を隠蔽しようとしている。

手紙を中心とする記録文書から分かることは、ハイデガーがキリスト教を激しく攻撃する講演を行ったことであり、そしてこの合宿が始まってまもなく陣営は内部対立から敵味方に分かれて分裂したことである。そして、ハイデガーはこの分裂を收拾するために、指導者への「服従」を盾に取って自分の腹心の部下であるシュターデルマンを犠牲にし、彼を追い出すことによって勢力のバランスを保ち、何とか最終日まで持ちこたえたのであった。いずれにしても、われわれがここで確認しておくべきなのは、大管区学生指導者シェールとシュタインが合宿をぶち壊すために予告なしに車で突然現れたということも、ハイデルベルクが合宿をぶち壊すようにとの委託を受けていたということも、記録や文書などの証拠によって確認されるものではないし、「本当に問題だったのは、…諸学部が黨員によって導かれていないフライブルク大学だった」（後に述べるように、これは内容上事実と反する）ということも、そしてやがてこのことが「国民社会主義者のように見えていたものすべてに対して憤慨させられていた大学グループは、私 [ハイデガー] を職から追放するためには、本省とこれに影響力を及ぼしているグループとともに陰謀を企てることを避けようとはしなかった」<sup>(111)</sup>ということも、何ら事実として確認しうるものではないということである。確かなことは、この合宿が内部分裂と主導

権争いによってかなりの混乱に陥るといふ、当時のこの種の催しに付随しがちな出来事が生じたということだけであって、ハイデガーはこのことをネタにして、ナチ当局からの干渉と妨害、シェールやシュタインの自分に対する敵対的行為というように、話の筋を書き換えていると推測されるのである。

## 第四章 学長職辞任の真相をめぐって

### (一) 学長辞任にいたる経過

ハイデガーは1934年の4月に学長職を辞任した。彼はそのいきさつについてこう述べている。「私は1933/34年の冬学期に同僚たちを学部長に任命した。彼らは、私の個人的な判断からだけでなく、学界とその専門分野における普遍的な判断からしても、世間に知られており、それと同時に、それぞれが自分のやり方で自分の学部の仕事の中枢に学問の精神を持ち込むという保証を与えた。学部長は一人として党員ではなかった。党幹部の影響は遮断された。希望は学問的精神を学部で伝承し続け、これを生き生きとさせることにあった」<sup>(112)</sup>が、しかし、自分が任命した医学部長フォン・メレンドルフ、法学・国家学部長エーリク・ヴォルフにかんして、文部大臣からクレームがつき、大臣はナチ党員が一人も学部長職についていないこと、そしてとりわけ「半年前に学長の職務には耐えられないとして拒絶した当の人物」であるフォン・メレンドルフを医学部長に任命したことをいぶかしく思い、彼とヴォルフの二人の更迭を要求してきたが、自分はこれを断固として拒絶し、こうした要求に対する抗議の意味で学長を辞職したのだ<sup>(113)</sup>、と。

もちろん、ここで彼が述べていることもまた、いくつかの重大な虚偽を含んでいる。ここでもハイデガーは、自らの個人的な判断だけによって学部長を任命したのではなく、学界と専門分野において世間に知られているとともに学問的精神を学部を持ち込む保証を与えるような人物という判断基準で行ったように見せかけているが、すでに説明したように、ハイデガーは、彼自身がバーデン州文部省に協力して改正された「大学基本法」に則って、彼自身が1933年10月1日をもって文部大臣から任命された「指導者＝学長」として学部長・評議員・事務局長などを任命したのであって、彼自身が「指導者原理」に従い、学部自治をまったくの形骸と化したうえで行動していることを忘れてはならない。ハイデガーによる彼らの任命は、おそらく当時の大学内の諸事情のために万全とまではいかなかったであろうが、しかし、ハイデガーが強力で推進しつつあったフライブルク大学の「統制化」のひとつの実現形態にほかならなかったのである。

ハイデガーの文言のうち、重大な問題点は「学部長は一人として党員ではなかった」というくだりである。ところが、ファリアスの調査によれば、「指導者＝学長」ハイデガーが任命した人物のうち、ザウアー、医学部長フォン・メレンドルフ、自然科学部長ヴォルフガング・ゼ

ルゲルの3人を除いて、すべてナチ黨員かまたはその信奉者であった。すでに述べたように、学部長に任命されたシャーデヴァルトはハイデガー学長誕生に功績があった活動家であり、ニコラウス・ヒリングと法学部長のエーリク・ヴォルフもまた彼らの黨員番号が確認されている。評議員についても、ノーベル賞受賞者の生物学者シュペーマンを除いて、6人までが黨員であり、またここに名前をあげた黨員はすべて、ハイデガーと同じく、1945年の敗戦時まで黨員であり続けたことが知られている<sup>(114)</sup>。したがって、ハイデガーはここでも事実を隠蔽し、虚偽を描いている。

われわれがどうしても疑念を禁ずることができないのは、記録文書の調査や関係者からの聞き取りなどの簡単な事実確認を行うだけですぐに判明すると思われる事柄にかんして、ハイデガーがなぜこうしたかたちで虚偽を記述しえたのかということである。ハイデガーは事情を知らないか、知る手立てのない人々のみを対象として語りかけている。われわれは、ひとつの事実にいくつもの虚偽を混ぜ合わせて自らの虚像を構成していくハイデガーの手口の真意を現在もなお完全に理解したとは言いがたいが、しかし、ハイデガーが白黒をあべこべに描くこうしたやり方で自ら歴史を書き換えているからこそ、それだけにいっそうわれわれはこれに対して歴史の真実をはっきりと対置しなければならないであろう。

## (二) 二人の学部長に対する罷免要求をめぐって

さて、ハイデガーのところに、医学部の構成員からフォン・メレンドルフを更迭するよう勧奨が何度もあったということもまた、決して事実として確認されはしない。フォン・メレンドルフは、確かに社会民主黨員で「非一国民社会主義的な学部長」ではあったが、すでに述べたように、決して「半年前に学長の職務には耐えられないとして拒絶した当の人物」ではなかった。ハイデガーが彼をカトリックであったにもかかわらず学部長に任命したのは、彼が学長経験者であったことのほかに、彼の人望と自治管理能力の高さを無視しえなかったからであろう。オットによれば、原資料から見ると、文部省当局からは彼にたいする反対や罷免要求はまったく存在しなかった。

これに対して、ヴォルフには実際に学内から罷免要求があり、いくつかの経緯をたどって彼は実際に罷免された。31歳の刑法学者ヴォルフは、ハイデガーの熱烈な崇拜者・忠実な追随者であり、「ナチ国家における正当な法」「ナチ国家の法理想」というふたつの論文を書いてナチ革命に貢献しただけでなくて、ハイデガーとともに突撃隊奉仕・国防スポーツ合宿などの軍事教練科目を必修科目として法学部のカリキュラムのなかに強引に組み込もうとしたために、法学部内で激しい衝突を引き起こし、同僚たちから非難を受けて孤立状態にあったという。ナチ当局でさえこうした事態を放置することができなかったというのが、彼の罷免の真相であろう。ザウアーの日記からわかることは、法学部の教授で高位受勲者であるヴァルター・オイケンがザウアーを訪れ、同学部ではハイデガーに対しても、また彼が任命したヴォルフのカリキュラ

ム改革に対しても道徳的憤激が強まっていることであり、この摩擦のために12月7日ヴォルフは学長ハイデガーに辞任を申し出たのである<sup>(115)</sup>。しかし、指導者＝学長であるハイデガーはこれに対して「指導者原理」を楯にとって、いったんはこの辞表をヴォルフ本人に突き返したが、その後もヴォルフに対する苦情は後を断つことがなかった。

例えば、戦後の政治的浄化委員会のメンバーとしてすでに名前をあげたアドルフ・ランベは、当時法学部の員外教授であり、欠員となっていた正教授の代講を行っていたが、同時にナチズム反対者としても知られ、ナチ学生たちから執拗な攻撃を受けていた。ヴォルフは、こうした圧力に押されて、ランベの代講を打ち切りとしたが、ランベはこれに抗議して文部大臣ヴァッカーに苦情を申し立てている。そのような事件をあいだに挟んで、とうとうヴァッカーは翌年4月12日付けの通達によってヴォルフの更迭をハイデガーに勧告した。それによれば、「夏学期の初めに学部長職の交替が行われるのが望ましいかどうかについて審議を要請する」<sup>(116)</sup>ということであった。この勧告のなかには、ハイデガー学長辞任を示唆するものは何も含まれていない。

ハイデガーの学長辞任の真の理由はまだ完全に明らかにされているとは言いがたいが、しかし、大学内部の上述の一連の事態に関係しているであろう。したがって、ハイデガーが自らの学長職辞任の理由を、プロイセン文部大臣からフォン・メレンドルフとヴォルフの二人の学部長を更迭するようとの圧力がかけられ、これに対する抗議であったとしていることは、部分的に真実を含みながらも、全体としてはきわめて虚偽に満ちた自己演出であることが了解される。ハイデガーは確かに自らが指導者＝学長として任命したヴォルフの更迭要求には抗議したであろう。しかし、ハイデガーの腹心の部下であったヴォルフのナチ突撃隊的な強硬路線とラディカリズムとはハイデガーのそれでもあったのであり、ヴォルフが学部内で非難を浴び、孤立していたように、ハイデガーもまた、その路線のゆえに、大学内部で大きな摩擦を引き起こしていた。オットによれば、国民経済学の講座を担当していたリベラルなヴァルター・オイケンを別の人物にすげ替えることも、ハイデガーにはままならなくなっていた。1933年12月には「ナチズムの国家の諸力と要求とにもとづく」彼の大学教育改革は大学内部の摩擦を引き起こしてどうにもならない事態に立ち至っていたし、そしてハイデガーが期待をかけていた「ドイツ大学帝国連合」の指導者となるという野望もまた同年11月に完全に潰えたことが明らかとなった。これらに加えて、以下に述べるリプアリア解散命令とその撤回をめぐる事件に象徴されるような、ハイデガーと突撃隊および学生指導者たちとのあいだに生じた醜い争いもまた拍車をかけることになったのであり、ハイデガーはこうした一連の状況のなかで、自ら学長職を投げ出したのである。言い換えれば、ハイデガーは、ヴォルフ辞任という絶好の機会をとらえて、自らの学長職からの撤退の口実としたというのが事態の真相であろう<sup>(117)</sup>。

### (三) 文部大臣とハイデガーの会見

ハイデガーは、上記のように、学長職辞任の理由として二人の学部長の罷免要求に抗議したことをあげたうえで、国民社会主義に憤慨していた大学構成員は、自分を学長職から追放するために、文部省および党グループと一緒に、自分に対して陰謀を企てたとしており、これは「事実と思想」の初めの方で彼が「『新しいもの』と『古いもの』とが、わたしの努力を封じ込めて最終的には私を排除しようとして、とうとう手を組んだ」<sup>(118)</sup>と述べていることと符合する。しかし、ハイデガーのこうした叙述のうち、文部省がハイデガー学長の追放を意図していたというのは、虚偽である。それというのも、すでに述べたように、記録文書を見るかぎり文部省がハイデガーの辞職を勧告したりなどの形跡は見られないからであり、そしてハイデガー自身が同じ「事実と思想」のなかで、自分と文部大臣との「この対立がフライブルク大学と文部省との抗争として世間に伝えられるということは望んでいないと文部大臣は述べた」<sup>(119)</sup>と一部の真実を書いているからである。確かに、フライブルク大学の「統制」にきわめて大きな貢献を行っただけでなく、ナチ・ドイツ医師同盟会長であり党人種局長であったヴァルター・グロスによっても「各方面から再三、私はフライブルクのハイデガーの積極的活動について聞かされています。彼はナチズムを代表する哲学者として今日では広く知られており、それを自らも自覚しているようです」<sup>(120)</sup>とまで評価されていた高名なナチ哲学者ハイデガーを失うことは、決して文部省の望むところではなかったであろう。

さて、ハイデガーは、自らの学長辞任の原因が大学と学問の理解にかんする自分とナチとのあいだの「分裂」にその原因があるとして、欺瞞的な自己演出を行いながらこう述べている。「私が文部大臣と話し合ったとき、大臣はすぐに私の辞任を受け入れたが、大学と学問にかんする国民社会主義者の理解と私のそれとのあいだには克服しがたい分裂があることが明らかとなった。けれども、この対立は確かに私の哲学と国民社会主義的な世界観との不一致にもとづいていた」<sup>(121)</sup>、と。しかし、大学と学問の理解にかんしてハイデガーとナチとのあいだに「分裂」があったということがもしも事実であるとすれば、その分裂とは、本稿のこれまでの考察から明らかのように、「指導者—学長」であるハイデガーの大学改革があまりにもラディカルなものであり、学部構成員の意見を無視した非民主主義的なものであり、バーデン州の文部省や公式のナチ党の政治路線から見ても急進的なものであったということであろう。そのために彼は大学内における支持基盤を喪失したほどだったのである。そして、ハイデガーとナチとの世界観のうえでの不一致については、後にやや詳しく考察するように、ハイデガー流の存在論的哲学というレベルから言えば、ハイデガーの思想はとうていナチの公式見解の受け入れるところではなかったが、しかし、両者のあいだには、肝心の政治的スローガンとその基礎的原理においては何ら齟齬・対立は存在しなかったのである。したがって、ここでもハイデガーはナチおよび文部大臣と自分との対立を必要以上に誇張している。

ハイデガーの弁明によれば、大臣と話し合っているあいだ、「地区学生指導者シェールの顔にはにやにやした笑いが浮かんでいた。こうした道をたどって望んでいたものが手に入れられた」<sup>(122)</sup>とあるが、これはいわゆる「人に訴える論証」であって、とうていそのまま信ずるわけにはいかない言明である。この弁明を信ずるとすれば、文部大臣と学生指導者シェールとの両者がハイデガー学長辞任を画策してその望みを達したことになるが、すでに文部大臣の意向はそうではなかったし、「保安課報部の南西地方本部を統括している」<sup>(123)</sup>シェールとハイデガーの関係も決してそれほど悪いものではなかった、と推測される。例えば、ハイデガーは1933年6月30日にハイデルベルク大学で「新しい帝国の大学」と題する講演を行っているが、この時ハイデルベルク学生団の議長を務めていたシェールから歓迎の挨拶を受けている。なお、この講演をヤスパースも聞いており、彼はハイデガーのナチ的言説とその変わり様に強いショックを受けた。

ハイデガーとシェールとの良好な関係を示す一例をあげよう。ハイデガーはドイツが敗色濃厚となった1944年11月23日に民族突撃隊の招集を受けてブライザッハに出動を命じられたが、この時、元ベルリン大学学長で、ハイデガーとともに1933年11月11日の「ヒトラーに忠誠を誓うドイツ学者の集会」に参加したことのある友人オイゲン・フィッシャーは、グスタフ・アドルフ・シェールに宛て電報を打ち、「我が国の現状では偉大な哲学者は少ない。しかもナチズム的な姿勢の哲学者となると、もっと少ない」としてハイデガーを見事に位置付けたうえで、「国民と党にとって替えがたい無比の思想家にたいして、軍務免除を与えるようにとの学部申請」<sup>(124)</sup>を受け入れるように要請している。シェールはこれに対してハイデガーのために尽力すると返答している<sup>(125)</sup>。シェールは博士の学位をもち、ハイデルベルクのナチ指導者であって、後に帝国学生指導者となったほか、帝国大学教師連盟会長をも務め、さらにザルツブルクの大管区指導者にもなっているが、そのためにドイツ敗戦後は連合軍によって裁きを受けることになった。ここでもわれわれは、そのシェールがハイデガーと対立し、彼の学長辞任をもくろむ陰謀に加担していたという筋書きを描けば、ハイデガーはいっそうナチズムから遠ざかっていたとの印象が与えられるのだから、ハイデガーのこうしたやり方が演出効果を狙ったきわめて狡智にたけた戦略であると感じざるをえないのである。

ところで、ハイデガーは、以上の経緯をたどって1934年4月23日にフライブルク大学学長を辞任した。ハイデガーの後任学長は刑法学者のエドゥアルト・ケルンであったが、彼についてハイデガーは「私の学長職が党と文部省、講師団と学生団によってどのように評価されていたのかは、私の後任者が職についた際に新聞や雑誌で広められた確認のなかに記載されている。それによれば、この後任はフライブルク大学の最初の国民社会主義的な学長であり、前線兵士として戦闘的・兵士的精神とこれを大学へと拡張するための保証とを与えた人物であった」<sup>(126)</sup>と述べており、自分のことをまったく棚にあげて、自分をナチ学長から除外して平然とし、しかもそれを党・文部省・講師・学生による共通の評価だとしていることに、われわれは驚きを禁

することができない。ハイデガーは、『シュピーゲル』対談でも、記者から「あなたの後任となった人物は熱心な黨員でしたか」と問われて、「ナチ党新聞『アレマン人』は第一面トップの大見出しで彼の学長任命を『最初の国民社会主義的学長』と報じていました」<sup>(127)</sup>と答えている。しかし、これはたんなる記憶違いなどとしてはすまされない重大な偽りである。オットの調査によれば、1934年4月30日の『アレマン人』は、文部大臣ヴァッカーがハイデガーの学長職辞任を承認し、大学を指導したことに感謝の念を表明したあと、こう報道しているだけである。「フライブルク大学新学長には、大臣ヴァッカーより刑法と刑事訴訟法の正教授エドゥアルト・ケルン博士が任命された」<sup>(128)</sup>、と。そして、同新聞は同年5月29日の学長引き継ぎ式の記事を掲載し、そこで前学長ハイデガーが大学担当官により「ナチズムの精神をこの大学に浸透させたこと」を感謝されたとして、詳細な報道をしているのである。

ハイデガーの学長辞任が同僚たちからどう受けとめられていたのかを示すふたつのエピソードが伝えられている。そのひとつは、プロイセン文部大臣ルストがハイデガーをフライブルク大学哲学部長にするよう提案したことについて、同学長が1935年5月11日に次のような反対の返答をしていることである。「ハイデガー教授を哲学部の学部長にすることを思い止まるよう、私は切に忠告せざるをえません。ハイデガー教授は、その学長在任中にフライブルク大学の同僚たちの信頼を大きく失っております。バーデン州の教育局も彼とはさまざまに衝突し、これが彼の退任の理由となったものです。」<sup>(129)</sup>もうひとつは、ドイツ敗戦後に政治的浄化委員会議長となったディーツェが自らの回想録のなかで、ハイデガーの学長辞任後にフライブルク大学にはある種の平静さが戻ったと書いていることである<sup>(130)</sup>。

#### (四) リプアリア解散命令撤回事件

ファリアスは、ハイデガー学長辞任へといたる一連の動きのなかに、カトリック学生組合の「リプアリア」がいったん解散させられたあと、この解散命令が取り消されるという事件をあげている<sup>(131)</sup>。この事件は、ハイデガーの「事実と思想」では直接に取り上げられてはいないが、当時のハイデガーと過激なナチ学生たちとの関係だけでなく、ハイデガーとカトリックとの関係をも明示しているので、シュネーベルガーの『ハイデガー拾遺』に収録されている文書などに依拠しながら、ここで若干の言及を行うことにしたい。

ナチ機関紙『アレマン人』と『フライブルク新聞』は、1934年1月29日の報道で、ハイデガーがカトリック学生組合連合CVの集会に出席したことを報じている。ところが、同じ『アレマン人』は明くる1月30日付けで「フライブルク学生団指導者の伝えるところによると、著名なカトリックの学生組合『リプアリア』が即時発効で解散させられた」<sup>(132)</sup>という記事をのせているばかりか、同年2月5日の『フライブルク学生新聞』によれば、「学生組合『リプアリア』からわれわれに伝えてきたところによると、『リプアリア』はナチ学生団指導者シュテーベル博士から、この学生組合解散は取り消されたとの通知を受けたという」<sup>(133)</sup>と報道している。



その翌日、ハイデガーはシュテーベル宛に手紙を書いており、『リプアリア』解散処分の撤回のため、当地の学生団指導者フォン・ツア・ミューレンが辞任せざるをえなかった事に触れ、「カトリシズムのこの公の勝利は、当地ではこのままにしておくわけにはいきません。それは、目下これ以上大きなものは考えられない活動全体を損なうものだからです」と述べたうえで、さらにこう続けている。「それゆえ本職は学生団指導者の措置を無条件に援護するつもりであります。貴下にたっってお願いしたいのは、フォン・ツア・ミューレンを再びその職に戻していただくことです。…カトリックの戦術についてはいまだによく分かってはいません。いつの日か、したたかな報いがくることになります。」<sup>(134)</sup>。

この文書は、ハイデガーの当時の反カトリック的立場と学生団指導者との関係をあますところなく示す重要な書簡である。フォン・ツア・ミューレンとは、フライブルクの突撃隊長であった人物であり、後にフライブルク大学学生団とナチ学生同盟大学支部の指導者であって、ハイデガーは前述のヒトラー宛電報のほか、ランゲマルク記念式典、労働奉仕集会など、彼としばしば集会の出席をともにしており、きわめて密接な間柄であった。シュテーベルもまた、すでに何度か述べているように、フォン・ツア・ミューレンと同様に、ハイデガーの最も忠実な支持者の一人であった。シュテーベルがこの直後に学生帝国指導者に昇進しているところを見ると、詳細は今後の調査研究に待たなければならないが、この「リプアリア」解散とその撤回事件をめぐる、ハイデガー・ミューレンのグループとシュテーベルとのあいだに鋭い衝突があったことは容易に推測される。

周知のように、1933年7月にヒトラーとローマ法王とのあいだに政教条約が締結されて、ナチズムとカトリックとのあいだに妥協が成立し、ナチの側ではカトリックに対する敵視的態度は緩和されなければならないとされ、またカトリックの側でもナチの政策に進んで協力しようとする人々が出始めていた。こうした政治状況のなかで見れば、カトリック勢力を排除しようとするハイデガーの反カトリック的・反教権的立場は際立っており、ここでもハイデガーの政治路線が公式のナチのそれと比べて、カトリックとの関係においてもこれをはるかに超えるきわめてラディカルなものであったことがわかるのである。

## 第五章 学長職辞任後のハイデガー

### (一) 学長職辞任後にハイデガーの「転機」はあったのか

ハイデガーは「事実と思想」の第3部分でこう述べている。「わたしは1934年の春に職務を辞したが、そのありうべき帰結についてははっきりと分かっていた。私には、同じ年の6月30日以降、そうした帰結について完全に明らかとなった。その時以降、なおも大学の管理職を引き受けた者は誰も、自分が誰と関係しているのかを疑いの余地なく知ることができた。」<sup>(135)</sup>ここでわれわれが目指したいのは、ハイデガーが1934年6月30日の事件に言及していることで

ある。この事件とは、ナチ党でヒトラーに次ぐナンバー2の地位にあった突撃隊長エルンスト・レームほか、突撃隊の幹部がいっせいに殺害・逮捕されて、ヒトラーと国防軍をおびやかしていた突撃隊が肅清されたことによって、ナチ党の政治路線が民衆的・行動主義的・社会主義的基盤を失って、国家独占資本との妥協の方向へと決定的に変更されたという事件にほかならない。ハイデガーは、すでに本論文で検討したように、学長就任以前も以後も、たえずナチ突撃隊・ドイツ学生連盟・ドイツ学生団などの学生団体幹部たちとの密接な連携と支持のもとに行動しており、彼らの行動主義を大学の「統制化」を推進する起爆剤ともしていたのだが、ファリアスが示したように、こうしたハイデガーの行動からも、またハイデガーの演説や文章のなかで示された思想、そしてそのなかに頻繁に現れる特殊な語彙と術語の分析によっても、ハイデガーの当時の政治的路線は、レーム系の民衆的・行動主義的な路線であり、突撃隊的な路線であったことは、ほぼ疑うことができない。

この政治的路線がレーム肅清後に決定的に変化したことは、例えば、さまざまな集会でしばしばハイデガーと同席し、レームの友人でもあり、ナチ学生連盟・ドイツ学生団指導者、突撃隊・親衛隊統合指導者などの要職を兼任していたオスカー・シュテーベルがその後にとどった劇的な没落の道を見ても明らかである。例えば、シュテーベルは更迭され、ナチ学生同盟組織は総統代理ルドルフ・ヘスの直接の指導下に組み入れられて、これまでの急進的な力を剥奪されることになった。ハイデガーもまた、「事実と思想」のなかで上記のとおり、この事件が自らとナチとのあいだの決定的な離反の契機となったことを強調しているほか、『シュピーゲル』対談においても、「学長を辞任した後、私は教授という任務だけに専念しました。1934年の夏学期に『論理学』を講義しました。次の1934/35年の学期には最初のヘルダーリン講義を行いました。1936年にはニーチェ講義が始まりました。聞く力をもっていた者はみな、これらが国民社会主義との対決であったことを聞き取りました。」<sup>(136)</sup>しかし、このことははたして事実として確証されるであろうか。

ハイデガーがレーム肅清とナチ路線の変更をどう受け止めていたのかについて、彼自身が直接ははっきりと述べた文書は知られてはいない。しかし、ハイデガーの上記の弁明とは裏腹に、彼とナチとの良好な関係は学長辞任後も明らかに継続している。ハイデガーとベルリンのプロイセン文部省とのあいだの良好な関係は相変わらず続いていて、それが例えば「ドイツ帝国大学教官アカデミー」創設や「ドイツ法律アカデミー」の仕事にたいするハイデガーの協力などに見られることは、すでに述べたとおりである。講義以外の場面でのハイデガーの言動はどうであったかを示す格好の一例は、ハイデガーのマールブルク時代の最初の弟子の一人で、ユダヤ系であるために教職を剥奪されてローマに滞在していたカール・レーヴィットの証言に見られる。彼は、1936年4月初旬、イタリア・ドイツ文化研究所の招きでヘルダーリンにかんする講演をするためにローマにやって来たハイデガー夫妻、そして彼がしばしばお守りをしたことのある彼らの二人の息子と久しぶりに再会し、彼の妻アーダとともに彼らと遠足に出掛けたの

だが、その時の状況をこう証言している。「陽光輝く晴天で、私はハイデガーと一緒に過ごす最後の機会を一気後れは避けられなかったが一楽しんだ。ハイデガーはこの機会にさえ党員バッジを上着からはずしてはいなかった。ローマ滞在の全期間それをつけていて、自分が私と一緒に過ごす場面にはハーケンクロイツがふさわしくないのだということには、明らかに思い及んでいなかった。」「そのヒトラーにたいする信頼の念についても、疑問の余地を残さなかった。…ナチズムがドイツの発展の方向を指し示す道だ、とあいかわらず確信していた」<sup>(137)</sup>、と。

それでは上述の講義のなかではどうであったか。紙幅の関係上、代表的な箇所だけを検討することにしよう。後に『形而上学入門』として出版された1935年の講義のなかの、ハイデガーが出版の際にもととの講義にはなかったところに括弧書きをつけたのかどうかをめぐって論議を呼んだ周知の箇所で、「今日、すっかり国民社会主義の哲学として出回ってはいるが、この運動の内的真理と偉大さ（すなわち、惑星的な規模で規定されている技術と人間との出会い）とはまったく何の関係もないものは、『価値』と『全体性』のこの濁流の中で網打ち漁をしているのである」<sup>(138)</sup>と述べて、ナチズムを「この運動の内的真理と偉大さ」と形容しているし、他の箇所でも「したがって、全体としての存在者そのものについて問うこと、存在の問いを問うことは、精神を目覚めさせるための本質的な条件のひとつであり、したがってまた歴史的現存在の根源的な世界のための、したがってまた世界の暗黒化の危険を制御するための、したがってまた西洋の中心である我がドイツ民族の歴史的使命を引き受けるための本質的な条件である [傍点筆者]」<sup>(139)</sup>と述べて、「世界の暗黒化」の元凶を「狂奔する技術と平凡人の底のない組織との絶望的な狂乱」であるアメリカニズムとロシアの共産主義としている。これらの言辭が強いナチ的な響きをもっていることは疑う余地がない。

さらに1936年の「シェリング講義」で、ハイデガーは「いずれにしても次のことはよく知られている。それは、ムッソリーニとヒトラーのことなのだが、国民または民族の政治的形態からすれば一しかも異なった仕方で一反対の運動をヨーロッパに持ち込んだ二人の人物は、またしても異なった観点からニーチェによって本質的に規定されているのであって、そのさいにニーチェの思索のもとと形而上学的な領域が直接に効果を発揮することがないとしてもやはりそうなのだということである」<sup>(140)</sup>と述べて、ヒトラーとムッソリーニがニーチェによって規定されつつニヒリズムに反対する運動を西欧に持ち込んだとして人物であるとして評価している。また1936/37年の「ニーチェ講義」で、ハイデガーは民主主義を攻撃して、「ヨーロッパはまだいつまでも民主主義にしがみつき、これがヨーロッパの歴史的死滅になるであろうことを見ようとしめない」<sup>(141)</sup>と述べたし、1942年の「ヘルダーリンの賛歌『イスター』」のなかでも、「もし人が現下ギリシャ精神を解釈して、ギリシャ人がすべてすでに『国民社会主義者』ででもあったかのように考えうるとすれば、人は国民社会主義がもつ歴史的無類性を認識し評価するのに何の貢献もなしてはいないわけである」<sup>(142)</sup>として、ナチズムの「歴史的無類性」が語られているし、さらに1943年の「ニーチェの言葉『神は死んだ』」においても、ニーチェ

の「力の意志」が「地球支配をめぐる戦いの内部」における最も力強いものの優位を意志する新しい「公正さ」であると解釈しながら、「ニーチェが目を離さない公正さについての了解を準備するためには、キリスト教的、ヒューマニズム的、啓蒙思想的、ブルジョア的、社会主義的な道徳に由来する公正さは、ことごとく排除しなければならない」<sup>(143)</sup>としている。

要するに、学長辞任後のハイデガーの講義のなかには、ナチの公認のイデオログや群小のナチ哲学者にたいするあてこすりや批判的な言辞が散在するにせよ、その政治的な原理の根幹に触れる部分においては、アメリカ的な産業資本主義とロシア共産主義に対する反対、反共主義および反マルクス主義、ドイツ民族を世界の中心におきその自己実現を求める強い民族ナショナリズム、議会と民主主義に対する反対、近代合理主義と知性尊重への敵対、啓蒙主義的な人間理性と良心の尊重に対する敵意などがたえず持続的に登場するのであって、歴史的に見ても、こうしたさまざまな立場の必然的な合流点または結節点こそナチズムの思想と運動にはかならなかったのである。ことからわれわれは、学長辞任後のハイデガーの思想が、いずれの時期においても、依然としてナチズム固有の思想の枠組みと諸前提のなかを動いていたのだ、と結論せざるをえない。

もちろん、ハイデガーの存在論的哲学と公式のナチズムとのあいだには、哲学理論のうえでの差異または対立が存在したほか、ハイデガーの民族主義的な議論のなかには確かに当初から、ローゼンベルクの『二十世紀の神話』に代表されるような粗雑な人種理論が希薄であることは事実であって、これがすぐ後に検討するように、ナチのイデオロギー部門を取り仕切っていたローゼンベルク当局によるハイデガーへの一定の警戒の姿勢を生むことにつながっていくし、ハイデガーの方も存在論的哲学に傾斜した自らのナチズムと公式のナチズムとのあいだに一定の距離があることを意識してもいたであろう。しかし、こうした一定の軋轢や距離の存在にもかかわらず、ハイデガーが学長辞任後のそれぞれの時期においてナチズムの思想と運動の根幹をなす教義やナチズムそのものを直接に批判した箇所は、私の知るかぎり、存在しないのであって、ハイデガーは政治的な次元においてはやはりナチズムという同一の思想と運動の枠内を動いていたのである。これを言い換えれば、たとえハイデガーとナチ当局とのあいだに当初から存在した軋轢や距離が学長辞任後に一定の範囲において強まることがあったとしても、結局のところそれがハイデガーのナチズムに対する確信と思い入れを決定的に覆すまでには至らなかったのである。したがってハイデガーは、レーム肅清後も決して「そのありうべき帰結についてははっきりと分かって」はいなかったのであって、「事実と思想」と『シュピーゲル』対談のなかでハイデガーが述べている、6月30日以後の離反や「対決」なるもの、ハイデガー自身の言葉で言い換えれば、「1934年に始まった敵対関係は戦い抜かれ、強化された」<sup>(144)</sup>ということは、決して事実ではなくて、自分が学長辞任後はあたかもナチ批判者であり、ナチの方でも自分を敵対者として扱ったかのように見せかける、自己正当化または自己偽装工作のための事後的な構成物であると言わざるをえないのである。

## （二）ナチ内部の思想闘争とハイデガーに対する「監視」をめぐって

ハイデガーは「事実と思想」のなかで、学長辞任後に「今や私に対しては嫌疑が抱かれ始め、この嫌疑は野卑な言葉を投げつけるまでに墮落していった」とし、とりわけエルンスト・クリークが創刊した雑誌『生成する民族』が1934年から自分に対する攻撃を開始し、またローゼンベルク当局の委託を受けてアルフレート・ボイムラーも、そしてヒトラー・ユージェントの雑誌『意志と力』もこれに加勢し、こうした状況のなかで自分の学長演説が論争の格好の標的対象になったと述べている。そして、「私が1934年の後に純粋に学問的な範囲のなかでごくまれに行った講演ですらも、当地の党新聞がそのつど不愉快な仕方ですらこれを揶揄したし、当時の大学指導部はそのつど、こうした行動に対して干渉しようとして重い腰をあげることができた」<sup>(145)</sup>とも述べて、自分とナチとの敵対的な関係を強調している。こうした自分にたいする一連の監視と攻撃の最たるものとしてハイデガーがあげているのが、『シュピーゲル』対談でもハイデガーが「私を監視するために秘密警察からフライブルクへ派遣されていた」<sup>(146)</sup>というかたちで繰り返しているハンス・ハンケ博士の件である。ハイデガーの叙述はどこまで事実として確認しうるであろうか。

確かにクリークの雑誌『生成する民族』は、1934年になってから、ハイデガーの文章の短さと豊富な新造語、そしてドイツ語の新たな発掘を称賛し、これをヤスパースと比較したヨハンネス・ハルムスの論文が掲載されたことをきっかけにして、クリークとオスカー・シュトライヒャーとの間にちょっとした論争が起こり、これとは別にハイデガー哲学とゲルマン神話との親近性を認めようとするナウマンの著書が現れたりするうちに、クリークが次第にハイデガーに対する非難を強めて行ったことは事実である。このあたりの経緯についてはシュネーベルガーが収集した資料に詳しい<sup>(147)</sup>。しかし、ここでの問題は、ハイデガーが、同じナチにぞくする思想家どうしのあいだに存在した内部的な論争や思想闘争を、彼自身とナチとの敵対的な関係へと一面的に、そしてまた事実と反して改作しているということである。こうしたハイデガーによるこうした自己演出にかんしても、われわれは、すでに検討したさまざまな事例、とりわけハイデガーとベルリンのプロイセン文部省とのあいだのきわめて良好な関係を引き合いに出すことでただちに反論することができる。それは、例えば、プロイセン文部大臣ルストが1935年5月に、ハイデガーをフライブルク大学哲学部の学部長にするように当時の学長に働きかけたほどの関係だったのである<sup>(148)</sup>。ハイデガーの講演に対する地方の党新聞の揶揄なるものも、記録文書が提示されないかぎり、ハイデガーの言うことをそのまま信用するわけにはいかない。

確かにハイデガーは、1936年になって初めて、ナチのイデオロギー部門をとりしきっていたローゼンベルク当局から、監視にも似た扱いを受けることになる。例えば、ローゼンベルク当局は、ミュンヘンのナチ大学教官同盟にハイデガーの哲学と個性がどう評価されるべきかを照

会したことがある。その後の状況の推移に照らせば、ハイデガーの難解な哲学に対する評価は必ずしも芳しいものではなかったと推測されるが、この時点からハイデガーの思想と公式のナチズムとのあいだに一定の齟齬ないし亀裂が生じ始め、以後ハイデガーはローゼンベルク当局からは警戒のまなざしで見られるようになったことは事実である。しかし、監視され、警戒の念をもって見られていたのは、決してハイデガーだけに限られたことではない。この当時のナチに所属していた党員知識人のなかで、学問的に文句なく優れた一流の人々は数少なかったが、そうした人々のなかで、例えばローゼンベルク流の粗野な人種理論をそのまま信奉していたと見られる例はきわめて少ないと思われる。法律学者カール・シュミットにしても、哲学者では例えばアルノルト・ゲーレンにしてもそうであった。政治的・文化的な反ユダヤ主義が生物学的・人種主義的な意味での反ユダヤ主義と直結していたとは限らないのであって、おそらく生物学的人種主義の思想的束縛を免れていたこうしたごく一部のナチ知識人もまた、ハイデガーと同じように、ナチ思想局・人種局の公式的な見解からは何らかのかたちで距離を置いていたし、その限りでは彼らもまた大なり小なりの程度に一定の思想上の統制、すなわち「監視」のもとにおかれていたのである。1940年に『人間。その世界における地位』の初版を公刊し、その最終章「最高の指導体系」で「国民社会主義的世界観」を展開したゲーレンですらも、やはり人種理論的な側面が希薄だとしてナチの雑誌などの書評では酷評を受けていたし、初期ナチズムの勃興に貢献した作家エルンスト・ユンガーでさえ、第二次世界大戦末期にはナチからは危険人物として監視を受けていたのである。

ハイデガーに対してナチ当局が言論統制を行ったとされるものなから、われわれの興味を引く一例をあげよう。1942年にハイデガーは、イタリアの哲学者エルネスト・グラッシ編集の『精神的伝承のための年誌』第2巻に自らの論文「プラトンの真理論」を掲載しようとしたが、そのさいにローゼンベルク当局の学術本部学術監視査定局から干渉を受けることになった。オットが文書で確認したところによれば、当局は「もしグラッシ教授が、ハイデガー論文の掲載を断念するのなら、それは結構なことだと思われる」と所見を通達した。しかし、問題とされたのは、ハイデガーのヒューマニズム概念がブラッハマンの「政治的ヒューマニズム」と相いれなかったということだけである。ハイデガーはこれにどう対応したか。ハイデガーは、こともあろうに、帝国宣伝省を介して、ムッソリーニとイタリア大使に働きかけて、削除を受けずに自分の論文を公表するという目的を達したのである。その時の引き換え条件は、ハイデガーのこの寄稿については、刊行の後に論評を行うことはしないというものであった<sup>(149)</sup>。ところが、ハイデガーはこうした複雑な諸事情と政治的駆け引きのなかで「論評を行わない」とされたことをもって、「この論文に言及したり論評したりすることは党当局からは禁止された」<sup>(150)</sup>というように、拡大解釈を行っているのである。したがって、ハイデガーの言辞を根拠として、ナチ当局がハイデガーに対して言論の弾圧を行ったとすることはできないのである。

この節の最後に、「ハンケ事件」を取り上げよう。ハイデガーによれば、1937年にベルリン

から彼のゼミナールにやって来たハンス・ハンケ博士と共同作業をするうち、彼からの告白によって、次のことを知ったという。それは、南西保安課報部をも指導していたあのシェールが「私の学長演説がフライブルク大学の非一国民社会主義的な様相と生ぬるい姿勢の本来の基礎をなしている」<sup>(151)</sup>として、ハイデガーの身辺を探るようにハンケに委託したということである。そして、ハイデガーは、あたかも自らの身辺に保安課報部またはゲシュタポの捜索の手が延びて来たかのように述べて、こうも書いている。「私の講義にも広がって来たこうした包囲攻撃は、意図したことをしだいに成功に導いていった」<sup>(152)</sup>、と。しかし、ファリアスがベルリンのドキュメント・センターにあるハンケの黨員記録を調査したところによれば、彼は黨員ではあったが、秘密情報機関のメンバーではなかったと推定される<sup>(153)</sup>。したがって、ハンケの件にかんするハイデガーの言明もまた信用することは困難である。

### （三）ハイデガーとイエズス会および「白ばら」事件とのかかわり

ハイデガーは、すでに述べたように、彼と公式のナチ理論家とのあいだに実際に存在した一定の対立的な関係を、きわめて誇張したかたちで敵対関係にまで高めあげているのだが、そのもうひとつの具体的な根拠とされているのは、彼とカトリック学生または団体とのかかわりである。それは、具体的に言えば、彼の講義とゼミナールにカトリック団体、とりわけイエズス会とフランチェスコ会にぞくする学生がいたこと、そしてその関係で保安課報部ではハイデガーがイエズス会と協力していると思なしていたこと、さらにミュンヘンの反ナチ活動家ショール兄妹の「白ばら」に関係していた人々の活動の発生源がフライブルクと彼の講義にあるとして捜索まで受けたということである。これらのことをそのまま受け入れれば、まるでハイデガーが「白ばら」とかかわりがあり、彼があたかも反ナチ・レジスタンスの闘士に近い人物でもあるかのような印象を与えかねないであろう。しかし、ここでも、ハイデガーは虚偽を述べ、あるいは事実を故意に誇張するなどの手段を用いて、自分自身とナチが攻撃と弾圧の対象としていたカトリック勢力とを接近させることによって、自分とナチとの離反または敵対関係を読者に印象づけようとして、巧妙に演出している。

オットによれば、ハイデガーが名前をあげているヨハネス・ロッツとカール・ラーナーの両神父は確かにインスブルックのイエズス会上層部からフライブルク大学に派遣されて博士号を取得するためにフライブルク大学で学んでいたが、彼らがハイデガーのところで学んでいたという説明は虚偽であって、彼らはキリスト教哲学講座のマルティン・ホーネッカーのもとで学んでいたのであった<sup>(154)</sup>。カトリックの伝統と援助のなかで大学までの教育を受けながら神学から哲学へ転向し、結婚によってカトリックから離反したハイデガーもまた、ドイツ第三帝国の時代を通じてナチズムの反カトリック立場に同調していたことは、例えばシュテーベル宛のハイデガーの手紙に明確に表現されている強い反カトリック的言辞によって明らかである。ラディカル・ナチとしてのハイデガーが、彼らの学位論文を副査として批評することはあつて

も、ユダヤ系学生と同様、こうしたカトリックの学生を博士号取得候補者として受け入れて指導するという事は、当時のドイツの政治状況を考慮すれば、とうてい考えられないことである。このことはマックス・ミュラーの証言によっても明らかである<sup>(155)</sup>。

「白ばら」にかんしては、ハイデガーはこう述べている。「事実また後になってわたしのところでは、もっぱら私のゼミナールのカトリックのメンバー—シューマッハー神父、グッゲンベルガー博士、ボリンガー博士—にゲシュタポの捜索の手が伸びて来た（ミュンヘンの活動家ショルとの関連でそうであった。彼の活動の発生源がフライブルクと私の講義とにあるとして捜索されたのである）」<sup>(156)</sup>、と。ハイデガーが名前をあげている3人のうち、ホーネッカーの弟子であったハインツ・ボリンガーが重要人物である。オットによれば、ボリンガーはカトリック青年運動の出身であり、マックス・シェラーをテーマとしてホーネッカーのもとで学位を取得した。彼は、ホーネッカーの死後改変された講座で低い地位に甘んじながら活動し、同盟「新ドイツ」にぞくしていたが、1943年3月になって「白ばら」グループに関係していたとして逮捕され、重い懲役刑に処せられた。彼の友人ヴィリ・グラーフは、ミュンヘン大学のフーバー教授やショル兄妹とともに処刑された。逮捕され尋問されたボリンガーの周辺がゲシュタポの手によって捜索されたが、ハイデガーはボリンガーの学位論文の副査であっただけで、ハイデガーとカトリックおよび後に閉鎖されたホーネッカーの講座との離反のゆえに、そしてさらにラディカル・ナチとして名の通っていたハイデガーの思想傾向のゆえに、この事件で煩わされる必要はまったくなかったのである<sup>(157)</sup>。オットとファリアスはこの件で存命中のボリンガーに問い合わせを行い、特にファリアスは彼から証言の手紙を受け取っているが、それによれば、ゲシュタポの尋問ではハイデガーの名前はいっさい出ておらず、「白ばら」グループにもボリンガーのグループにもハイデガーと関係ある者は一人もなく、ハイデガーがあげているシューマッハーやグッゲンベルガーという人物にはまったく心あたりがない、ということである<sup>(158)</sup>。

#### （四）ハイデガーに対する「出版弾圧」は事実か

ナチから監視され、さまざまな言論弾圧を受け、あまつさえゲシュタポの捜索の手さえも自分のところに伸びてきたというハイデガーの申し立てに特徴的なことは、彼が自らそう言い立てているだけであって、ほとんどの場合、記録文書による証拠の提示もなければ、彼以外の第三者による確実な証言すら存在しないということである。ハイデガーはこうも述べている。

「1938年以来、新聞と雑誌では私の名前をあげることが禁じられた。同様に、私の諸著作を論評することも、これらの著作がまだ新しい版を重ねることができたかぎり、禁じられた。最後に、出版社が必要な紙を用意していたにもかかわらず、『存在と時間』とカント書の新しい版の刊行もまた拒否された。」<sup>(159)</sup>このことははたして真実であろうか。

1938年以降のハイデガーの出版物を見てみよう。ハイデガーの叙述のうち、事実として確認



されるのは、彼のカント書（『カントと形而上学の問題』）は1929年にその初版が刊行されたのち、その第二版は22年後の1951年に刊行されているから、カント書の第2版が刊行されなかったということだけである。そのほかの叙述はすべて問題である。例えば、1941年には『ヘルダーリンの賛歌“祭りの日のように…”』が刊行され、1942年には『プラトンの真理論』が『精神的伝承年報』第2巻に掲載された。これには、ローゼンベルク当局の反対を押し切るかたちで行われるなど、さまざまないきさつがあったことは、すでに述べた。そのほかにこの年『存在と時間』の第5版が、初版からあったフッサールへの献辞を削除して、出版された。1943年には『真理の本質について』が刊行されたし、『形而上学とは何か』第四版もハイデガーの「後書き」を付して刊行された。1944年には『ヘルダーリンの詩の解明』が出版され、これには1937年刊行の『ヘルダーリンと思索の本質』と前年ヘルダーリン死後100年記念祭で行った講演「帰郷」が同時に収録された。こうした出版の記録を見るかぎり、ハイデガーの叙述は虚偽である。カント書の新しい版の刊行が「拒否された」ことが事実であるためには、当然ながら証拠がなければならないが、それが存在しない以上、それはハイデガーに対する言論弾圧というわけではなくて、それ以外の何らかの理由で出版にいたらなかったと推理するのが合理的である。

なお、ハイデガー自身が言及している「出版社が必要な紙を用意していた」という点について言えば、これはその文言だけとれば事実と符合する。しかし、この文言をその背景をなす脈絡と関連させて検討すれば、まったく異なった様相が見えてくる。つまり、フェアリアスがベルリン・ドキュメントセンターで調査したところ、1944年1月、用紙不足のために出版が極度に制約された状況にもかかわらず、プロイセン文部省はハイデガーの著作を印刷するために、ヴィットリオ・クロスターマン社に無条件で用紙の配給をしたことを示す一連のメモがあるという<sup>(160)</sup>。もちろん、こうしたことは、ハイデガーにたいするプロイセン文部大臣ルストの好意と彼らの親密な関係のうえに立って行われたことであって、やはりハイデガーはナチの重要な思想家として当局からは破格の待遇と優遇政策の恩恵を被っていたのである。ここでハイデガーは、多くの虚偽を述べて事態をあべこべに演出して見せながら、はからずもそのなかで一片の真実をうっかり口にしてしまったことが分かる。

## （五）国際会議等への参加「妨害」はあったのか

「事実と思想」におけるハイデガーの最後の弁明は、彼がナチ当局によって国際会議等への参加を妨害されたということであり、ドイツ的精神科学にかんする著作が刊行されようとしたさい、そのなかの「体系的哲学」の部門の企画を練り上げるための論評会にはヤスパースとともに招待されなかったということである。しかし、ハイデガーのこの最後の弁明もまた、事実関係を詳細に究明していけば、ほとんど虚偽であることが分かる。

彼は、「次の事実が、私の哲学的な仕事を評価し、排除しようとするやり方を物語っているであろう」としたうえで、1934年9月（ハイデガーは1935年としているが、これは彼の記憶違

いである) にプラハで国際哲学会議が開催されたさい、自分はドイツ代表団にぞくさず、招待もされなかったこと、そして1937年にパリで開催された国際デカルト会議にもナチ当局による妨害のためにドイツ代表団からは排除され続けたと述べ、こうした妨害もまた自分とナチとの対立関係を示すものにほかならないと強弁している<sup>(161)</sup>。

さて、ファリアスによれば、プラハ国際哲学会議に参加したドイツ代表団の主要なメンバーには、ニコライ・ハルトマンのほか、マルクス主義の影響を受けた社会学者のテンニース、ユダヤ系のカール・レーヴィット、そして一人のイエズス会士もまた含まれており、ハイデガーのみならず著名なナチ哲学者は一人も参加してはいなかった。このことから了解されるように、ファリアスは、ナチ当局がプラハ国際哲学会議にはほとんど関心をもっていなかったか、あるいはこれらの非ナチ的な哲学者たちがそれをいいことにナチ系の人物を意図的に排除していたのではないかと推測している<sup>(162)</sup>。ここでニコライ・ハルトマンの名前が登場することに注意されたい。当時のドイツ哲学界には、さまざまな個性的な哲学者が活躍していたのであって、ハイデガーの存在論的哲学を震撼をもって受け止めた人々がいた反面、その価値を認知しようとしなかった哲学者たちも数多くいたし、ハイデガーもまた新カント派と価値哲学を標榜する哲学者たちに対する敵対心を隠さなかつただけでなく、これにアーリア系とユダヤ系の線引きという時代の制約も加わってきわめて複雑な緊張関係のもとにあったのであり、当然ながら、すべていつもハイデガーの思惑通りに事が運ぶというわけではなかったのである。

同じくファリアスによると、ハイデガーはパリの国際デカルト会議が開催される以前の1935年にその参加準備のためにパリを訪れており、この会議への参加に早くから強い意気込みを示していた。それというのも、ハイデガー自身の言葉でいえば「この会議は、意識的に現在支配的な自由主義的＝民主主義的な学問観を押し付けようとするものであって、これに対抗する強力なドイツ代表団を早期に結成するように」<sup>(163)</sup>との思惑があり、フランスに対抗しドイツ哲学の優位を示す必要性があったからであり、こうした意図でハイデガーは早くから帝国文部省に働きかけていたのである。ところが、記録文書から確認されるところでは、当局はこの件にかんする事務的処理を遅らせ、会議開始一カ月前になってようやくハイデガーを代表団に加えることにし、しかも代表団長を、早くから上記のような戦術を提起していたハイデガーにではなく、ケーニヒスベルク大学学長経験者で同じく哲学者のハンス・ハイゼに任命したのであった。このことは、すでに世界的名声を得ていたハイデガーのプライドを深く傷つけたに相違ない。おまけに、すでに述べたように、プロイセン文部省がハイデガーをフライブルク大学哲学部長に推薦して同大学学長から拒否されるという事件があり、こうした内紛と個人的反感が、ハイデガーがこの会議から手を引いた理由だとファリアスは推測している。

ハイデガーの国際会議などへの出席は、すでに述べた1936年のローマの「ドイツ・イタリア学研究所」でのヘルダーリン講演をはじめ、数回にのぼっており、これらを見るかぎり、いずれもがハイデガーとナチ、とりわけベルリンとの良好な関係を示すものばかりであって、ハイ

デガーの言うように、その反対となる事例をあげることはきわめて困難である。オットの調査によれば、ハイデガーは1935/36年のスイスのチューリヒに旅行しているし、1936年にもウィーン旅行を行っており、これらの旅行はすべて許可されたものであった<sup>(164)</sup>。したがって、ハイデガーは党内で一定の批判を受け、その行動が一定の範囲内で監視されていたことが事実であったにせよ、その行動は海外旅行を含めて決して制限されてはいなかったのである。

ハイデガーがドイツ的精神科学にかんする著作のための論評会にはヤスパースとともに招待されなかった件にかんしては、事情はるかに単純である。「体系的哲学」の部門の責任者であったニコライ・ハルトマンは、新カント派のヘルマン・コーエンとナートルプの弟子であり、彼の『新しい存在論』や『存在論の基礎づけについて』で展開された存在論は、ハイデガーの実存論的な存在論とは相いれないものであり、当時の哲学者の立場の相違と対立がこうした企画からハイデガーとヤスパースを遠ざけた理由であって、ここにナチとの対立関係が入り込む余地はなかったのである。それほどドイツ哲学界の状況は一様ではなかったのであって、ハイデガーがナチとのかかわりでこの件を持ち出しているのは見当違いであろう。

## 第六章 「事実と思想」の思想

### (一) ナチ革命と「勃興」への確信

ハイデガーは、先に引用したように、1933年の権力を掌握したナチズムの運動のうちに「民族の内的な結集と再生にいたる可能性と民族の歴史的・西洋的な使命を見いだす道」があると見なしていたが、このことが彼の学長時代のみならず、終生の確信であったことは、「事実と思想」のなかで「[有能な人々の] この結集を準備するためにわたしが当時運動のなかに見ていた積極的な可能性が何よりもまず強調され、また肯定されなければならないであろう」<sup>(165)</sup>と述べ、第二部の末尾近くでも「学長職は、権力を掌握した『運動』のうちに、そのあらゆる不十分さや粗雑さを超えて、おそらくいつの日かドイツ人を西洋的に歴史的な本質のもとへと結集させるであろうはるかなる射程距離のあるものを認めようとする試みであった。当時私がそのような可能性を信じており、そのために思索という最も固有の仕事に断念し、職務上の活動を優先したということは、決して否定されてはならない」<sup>(166)</sup>と繰り返されていることで了解されよう。つまり、学長演説の締めくくりにある「この勃興の素晴らしさと偉大さ」、すなわちナチ革命に体现される「勃興」にたいする確信は、ドイツ第三帝国の崩壊という歴史の審判が下されたはるか後になってもなお、「決して否定されてはならない」ものとしてそのまま繰り返されているのであって、ヘルベルト・マルクーゼの手紙に対する回答で知られるように、ハイデガーの生涯を通じて一度として決して公式の自己批判の対象とは見なされていない。それは、ハイデガーにとっては一時的な「誤謬」では決してなく、「幻想」でも、「思い違い」ですらもないのである。

ナチズムとその革命にドイツ民族の結集の可能性と歴史的使命を実現する道があったと確信し、ナチズムもこれに対する自らの確信も決して誤りではなかったと考えているからこそ、ハイデガーは生涯にわたって自己批判を拒否し続け、そしてたとえ一時期とはいえ、大学におけるナチ革命の実現のために、学長としてさまざまな集会で演説し、若い大学講師・学生・市民に呼びかけて彼らをナチ革命へと動員したことの道義的責任、またたとえ間接的にではあれ、ホロコーストという20世紀最大の犯罪を遂行しえた政党に加入し、敗戦時まで党員であり続け、党費を払い続けるといかたちでこの活動に強く関与したことの政治的責任をまったく不問に付すことができるのである。とはいえ、ハイデガーは他方ではナチズムに対する歴史的審判の意味を重大だと受け止めているからこそ、おのれのナチ時代の真実と実像をきわめて手の込んだかたちで隠蔽せざるをえないのであって、おのれの確信と歴史的審判の意味との両極を揺れ動き、おのれに対する世間的評価だけを気にしながら過去の自分の思想と行動をとりつくりうことに汲々としているこの「世界的な哲学者」の両面価値的で小心翼翼たる態度に、われわれは強い失望の気持ちを禁じざるをえない。

## (二) 責任の転嫁と居直りの姿勢

もしもハイデガーが、自らを含めて、「この勃興の素晴らしさと偉大さ」そのものであるナチ革命をひとつの歴史的カイロス（好機）として受け止め、それが指し示す民族的・歴史的方向を信じて、そのために挺身した人々に政治的・倫理的責任がないとするならば、その責任は必然的にそれ以外の人々か、あるいは人間以外の何物かに転化されなくてはならなくなるであろう。ハイデガーの「弁明」によれば、一方ではこの責任は自分たちが負うべきものでなく、こうした歴史的好機にナチズムへ向けて「出撃」しなかった人々にあるということになる。ハイデガーは例えばこう述べている。「確かに『もし…ならば、そしてもし…でなければ、何が起こっていただろう』という言葉で始まる、歴史の進行に対する反論はいつも危ういものである。だがそれにもかかわらず、こういう問いは立てられてよい。もしも1933年頃に有能な人々がすべて、ゆっくりとひそかに団結して、権力を掌握した「運動」を純化して抑制するために立ち上がっていたとすれば、何が起き、何が阻止されていただろう、と。」<sup>(167)</sup>だが、これまで本論で検討したように、ハイデガーの学長時代の思想と行動は、突撃隊の方向に「権力を掌握した『運動』を純化」することであったとは言えても、少なくともこの「運動」（ドイツ語で定冠詞をつけて die Bewegung と言えば、当時にあってはナチの「運動」にほかならなかったことは、多くの人々が証言するところである）を通常の意味で「抑制する」ことでなかったことだけは確かである。問題はその後次の文章が続いていることである。「確かに、人間が人間の責任を並べたてたり、負わせたりすれば、そのことはいつも不遜なことである。しかし、罪人をさがして罪を査定するとしても、本質的な不履行という罪もまたあるのではないか。…なぜ1933年に、物事を知っていると思っていた人々が、なぜ当時まさしく彼らが、すべてを根

本から善くするために立ち上がったというわけではなかったのか。」<sup>(168)</sup>。ハイデガーは、当時ナチ革命を傍観し、手をこまねいて見ていただけの人々は「本質的な不履行という罪」を犯していたのであって、自分はそうではなくて、絶望的な政治・大学情勢のなかで「現実はまだ生きている建設的な勢力とともに、情勢の来たるべき進展を食い止めるという可能性」<sup>(169)</sup>に賭けたのであり、そうしなければ事態はもっと悪化していただろう、というのである。こうしたハイデガーの弁明が、事実と反するものであるだけでなく、自らをナチズムに反対する抵抗勢力に分類したうえで、ナチズムの責任をナチ革命に参入しなかった人々へと転化するという内実を含んだ恐るべき思想であることは、本論におけるこれまでの展開から明らかであろう。

さらに、われわれが見過ごすことができないのは、ハイデガーがこうも述べていることである。「私の学長職の誤りを自分の評価に照らしてあげつらうことを好んでいる人々にたいしては、そして彼らにたいしてだけは、次のことを言っておきたい。そんなことは、それ自体として見れば、どうでもいいことなのであって、それは、惑星的な規模での力への意志の運動全体の内部では、決して些細なことと呼んではならないくらい、取るに足らない過去の試みと措置をむやみに詮索することと同じなのである」<sup>(170)</sup>、と。自分の学長職の誤りを云々することは、ニーチェ的な「力への意志」という視点から見れば、「取るに足らない過去の試みと措置をむやみに詮索すること」だと言うのである。これは、ナチズムを確信し、ナチ革命に参入・挺身した政治的・倫理的責任を「些細なこと」「取るに足らないこと」と見なすのと同然であり、ハイデガーのきわめて傲慢な居直りの姿勢であるとともに、歴史の真実を明らかにするのではなく、逆に歴史の真実を封殺してこれを詮索することを禁じようとする態度以外の何物でもない。この点でもわれわれは、プラトンがかつてソクラテスの口を借りて「真の哲学者とは真実を観ることを愛する人たちだ」<sup>(171)</sup>と述べた意味において、ハイデガーの「哲学者＝愛知者」としての資格と人格上の問題を提起せざるをえないのである。

### （三）「力への意志」の支配と独善的な歴史観

他方では、ハイデガーの思想によれば、ナチズムの責任は論理的・必然的に人間を超えたものへと転嫁される。彼は「私は当時すでに、力への意志というこの現実から、存在するものを見ていた」<sup>(172)</sup>とし、ニーチェ的な「力への意志というこの現実」こそが超感覚的世界、すなわちキリスト教の神の世界の影響力を失なわせたものだとしながら、「もしそうでなかったとすれば、第一次世界大戦は可能だったであろうか。そして、もしそうでなかったとすれば、まして第二次世界大戦は生じたであろうか」<sup>(173)</sup>と述べている。二度にわたる世界大戦の原因は、明らかに人為的なもの、社会的・経済的なものであるはずなのに、ハイデガーはこれを「力への意志」というきわめて抽象的で人間世界を超えたものに帰しており、言うまでもなく、こうした思想はその必然的な帰結として、人間社会のあらゆる事象と出来事を人間世界を超えたもの、すなわち運命や歴運に由来するものとなし、その結果、人間・社会の主体的努力を無力

なものとし、揚げ句の果ては人間世界を白黒の区別のつかないものにしかねないであろう。

ハイデガーは1930年と1939/40年の二度にわたってユンガーの著作の私的な研究会をもち、これから大きな影響を受けたことを公言している。こうした経過から見れば、学長時代にすでに「力への意志」という観点から現実を見ていたとするハイデガーの回顧は、自らの思想的発展の時期を意図的にずらしているということになる。このこともまた、「力への意志」というきわめて抽象的・超人間的なものに訴えかけることによって、ハイデガーの学長時代の思想と行動を隠蔽するかまたは偽装することに役立つであろう。厳密に言えば、ハイデガーが「力への意志」というニーチェの観点から、ユンガーなどからの影響を織り込んで、近代技術の支配が西洋の形而上学の根源をなすのだという把握に至り、そして「形而上学の克服」を課題として掲げるとともに近代西洋の思考からの根本的転換ともいべき「もうひとつの始元」を追求するようになるのは、ハイデガーが1936年にニーチェ講義を開始して、ニーチェとの対決を行うようになってからである。したがって、その意味ではハイデガーは時間的順序を逆にして自らの思想的発展を描いているのであって、こうした描き方もまた、ナチズムと近代技術の支配とを同列におくことによって、自らのナチ加担を中和させると同時に、近代技術批判を自らのナチ「批判」へとすり替えることをきわめて容易にしている。

こうしてハイデガーは、「エルンスト・ユンガーが、労働者の支配と形態という思想のなかで考え、この思想に照らして見ているものは、惑星的規模で見られた歴史の内部での、力への意志の普遍的な支配である。今日すべてのものは、こうした歴史的現実のもとにある。それが、共産主義と呼ばれようが、ファシズムと呼ばれようが、あるいは世界民主主義と呼ばれようが、そうなのである」<sup>(174)</sup>と語ることになる。もちろん、第一次世界大戦および第二次世界大戦の原因を「力への意志」というとらえどころのないものに帰することによって、戦争にかんする国家的責任とナチ運動の一翼を担ったおのれの責任とを最終的には運命のごときものへと転化して免罪しようとするばかりか、その結果として、政治制度としてのナチズムをも共産主義をも民主主義をも一緒くたに同一のものにしてしまうような、つまり固有の政治制度とこれを支える思想の固有の論理を踏まえることのない、こうしたハイデガーの論法には、われわれはとうてい賛成するわけにはいかない。

こうしたハイデガーの論法こそ、「農業は今や機械化された食料産業であって、その本質においては、ガス室と絶滅収容所における死体の大量生産と同じもの、国々の封鎖と兵糧攻めと同じもの、水素爆弾の大量生産と同じものである」<sup>(175)</sup>として、つまり、機械化された農業をガス室や絶滅収容所と同じものとさせ、また、マルクーゼの手紙に答えて「あなたの当然の厳しい非難については、私はこう付け加えることができるだけです。『ユダヤ人』を『東部地域のドイツ人』に替えて考えれば、同じことが連合国のひとつにも当てはまる、と」<sup>(176)</sup>として、ユダヤ人の虐殺を、大戦後の連合軍による東部地域のドイツ人の移動と同じものとさせた当のものにほかならない。

さらに、ハイデガーはこう述べている。「普通のアカデミーの動きという地平では、この学長職のさまざまな評価は、その仕方においては正しいかも知れないし、正当であるかも知れない。今日もなお、この本質的なものの視野を幻惑された目のために開くという可能性は、当時よりもいっそう少ないのである。」<sup>(177)</sup> しかもそのうえ、ハイデガーの学長としての職務が十分であったか、それともそうでなかったかというような「こうしたパースペクティブでは、私が職務を引き受けるようにさせた本質的なものは適切に表現されはしない。普通のアカデミーの営みという地平では、この学長職のさまざまな評価は、その仕方においては正しいかも知れないし、正当かも知れないが、それにもかかわらず決して本質的なことをとらえてはいないのである。今日もなお、幻惑されたまなざしにたいしてこの本質的な事柄の地平を開くという可能性は、当時よりもいっそう少ない」<sup>(178)</sup> と言うのである。「幻惑されたまなざし」とは、ハイデガーにさまざまな評価を行う者のことである。要するにハイデガーは、自分の学長職に対するさまざまな評価は、その仕方如何で正しいとも正しくないとも言えるのであって、決して事柄の本質をとらえていないと述べ、ここでも彼はおのれの学長時代という客観的・歴史的に存在した時代に対する客観的・歴史的なアプローチをどうとでも評価しうる相対的なものとし、その本質は自分にしか理解されないという不可知論的・独善的な態度を貫いている。

さらに、ハイデガーの独善的・主観主義的態度は、「本質的なことは、われわれがニヒリズムの完成の真っ只中にある」ということであり、「それにもかかわらず、ニヒリズムの克服は、ドイツ人の詩的な思索と詩作のなかでは予告されていて、もちろんドイツ人はその詩作を聞き知ることがまだほとんどないに等しい。それというのも、ドイツ人は彼らを取り巻くニヒリズムという物差しにしたがって手筈を整えて、歴史的な自己主張の本質を見誤ることにひたすら努めているからである」<sup>(179)</sup> という語句で強められ、そして「事実と思想」の締めくくりとして書かれている次の言葉で頂点に達している。「しかし、これらの出来事もまた、ただたんにわれわれの歴史の運動の波間に浮かぶ一時的な仮象にすぎない。ドイツ人たちは、破局が自分たちに襲いかかっている今になっても、この歴史の運動の次元にはまだ気付いてもないのである」<sup>(180)</sup>。ハイデガーにとっては、ナチ革命を「勃興」としてこれに熱狂した当時も、そして「破局が近づいている今になっても」、一般のドイツ人たちはニヒリズムの到来にもその克服に気づいておらず、その本質を見誤っているばかりか、その歴史の運動の次元には気づいてもないのである。こうした表現のうちに含意されているのは明らかに、こうした歴史の運動の次元に気づいており、歴史の運動の仮象を超えてその本質を見抜いているのは、ただ一人自分だけだということにほかならない。われわれは、こうしたハイデガーの主観的で独善的、そして秘教的で終末論的な歴史観または歴史哲学こそ、彼がかつてナチ革命へと向けて「出撃」したさいにいただいていたのと共通のものであると言わざるをえない。

それにしても、ナチ革命を「勃興」としてこれに熱狂したハイデガーの歴史観または歴史哲学こそ、歴史の本質を見誤った揚げ句に歴史の審判を受けた当のもの、その時代に対して多大

の損害をもたらした当のものではなかったであろうか。

## 第七章 結論と今後の展望

本論文においてこれまでやや詳細に検討してきたように、学長時代を含めたハイデガーのナチ黨員時代を、彼自身の証言によってではなく当時の記録文書によって、歴史的に検証するという作業のなかからおのずと浮かび上がってくるのは、この時代のハイデガーの政治的な思想と行動の確信に満ちたラディカリズムであり、しかもこのラディカリズムが、ナチ当局とのあいだで一定の齟齬を含みながらも、全体として見れば、この時代を一貫して変わることがなかったという事実である。そして、第二次世界大戦後になって「事実と思想」を始めとする「弁明」のなかでハイデガー自身が語っている「証言」なるものが、自らの保身に都合の悪い事実については沈黙または隠蔽し、あるいは一定の範囲において事実を歪曲し、あるいは部分的に真実を語りながらもこれにいくつかの虚構を作為的に絡み合わせて粉飾を施したりするなどの手法を用いて、ナチズムにたいする自らの強い確信とこれにもとづくナチズムへの深い政治的関与を世間的に許される最小限度のものとしようとして、ラディカル・ナチとしての自らの実像をまったく反対に描き、時には自分がナチ批判者または敵対者であるかのように装ったりしているという事実である。

こうしたハイデガーの「弁明」は、たとえ彼が大戦後のドイツ第三帝国の野望が崩壊した後に、「典型的なナチ」として政治的・道義的な糾弾を受け、住居と蔵書の差し押さえ、そして教授職と年金受給資格の剥奪という生涯最大の危機に直面していたことを考慮するとしても、たんなる事実誤認や記憶違いということでは決して済ますことのできない、あまりにも虚偽と虚構に満ちたものであり、歴史の改竄につながるものであるといわざるをえない。自己保身と世間的評価の維持を最優先して、そのためには歴史的な事実を歪曲したり、虚偽をつくことさえも厭わないというこうしたハイデガーのやり方は、明らかに思想家および哲学者としての彼の世界的名声を裏切るものであって、このことにわれわれは鬱然とした思いを禁ずることができない。しかも、ハイデガーは、ヘーゲルの言葉で言えば「世界史的法廷」による歴史的審判を受けた後でなお、その生涯の最後にいたるまで、フライブルク大学学長として、ナチ黨員教授として、思想家および哲学者として、学生・教師・市民に呼びかけて彼らをナチ革命へと駆り立て、たとえ間接的であれ、ひとつの民族の大量抹殺という20世紀最大の犯罪に自ら加担する結果となったということの政治的・道義的責任を、自らの著作のなかではもとより口頭においても、公式的にはただの一度も自己批判していないのである。

さらに、ハイデガーは、ナチ時代の自らの著作・講義・講演を戦後になって出版した際に、いくつかの箇所読者に無断で改竄を加えて自らのナチ的言動の痕跡を抹消したり、あるいはこれとはまったく逆に、事情を知る人には明らかなナチ的言辞を何の臆面もなく平然と公表したりしているが、こうした行動は、歴史の審判がもつ政治的・道義的意味、ナチズムにたいす



るゆるぎない確信、そして世間的な名誉欲との三つの極のはざままで、彼自身が小心翼翼として揺れ動き、たえずこれらに両面価値的な態度を取り続けていたということにほかならない。そればかりかさらに、詳しい事情を知る立場にない一般の読者に訴えて、「事実と思想」や『シュピーゲル』対談などの彼の弁明に典型的に見られるように、歴史を改竄したうえになお自らの虚像を後世に伝えようと企図したのである。「事実と思想」を遺稿管理人の手に委ね、『シュピーゲル』対談を自らの死後に公表するというハイデガーのやり方は、彼がハイデガー・ナチズム問題の当事者および証人として、彼の側からする一方的な「真実」を世間と後世にたいして無条件に宣告したということであって、これに対する反論や批判を最初から拒否するとともに、これに対する責任ある応答を最初から意図していないということの宣言にほかならない。ハイデガーは、生前ばかりか死後においてなお、それどころか死後においてこそ、おのれの作為と虚構とを貫き通そうとしたのである。知恵と真実を愛し求める者であるはずの哲学者にしては、そして世界的な名声をもつ哲学者にしては、あまりにも狡猾、狭量、野心的な態度であると言わざるをえないであろう。

私見によれば、ハイデガー・ナチズム問題にかんする研究が現在われわれに提起している今後の大きな諸課題として、少なくとも以下の四点をあげることができるように思われる。

第一に、ハイデガーが上記のように意図的に自らの実像を隠蔽したり、虚偽を作為的に導入することで自らの虚像を後世に残そうと意図したからこそ、われわれはこうしたハイデガーの作為と虚構を暴いて、あくまでも記録文書と信頼しうる証言とに丹念に依拠しながら、歴史の真実を明らかにせざるをえない。ハーバマスが言うように、われわれは「ハイデガーがその死にいたるまで排除し、言い繕い、歪曲してきたものについて正確な情報をえなければならない」<sup>(181)</sup>のである。オットやファリアスによって開始された歴史的な調査研究が今後さらに進んで、ドイツ各地のドキュメント・センターを始め、今なお一部の関係者にしか接近を許されていないマールバッハのハイデガー・アルヒーフの資料、それにフライブルク大学学長室に保管されている文書などの公開がいつそう進むならば、そしてとりわけハイデガーがナチ時代に交わした往復書簡がいつそう身近なものになれば、われわれはハイデガーとナチズム、ハイデガーの哲学思想とナチズムとの真の関係という困難な問題がさらに詳細に解明される日の来ることに期待してよいであろう。

第二に、ハイデガーとナチズムの思想のレベルにおける真の関係を解明するにあたって重要な作業となるのは、ハイデガーのナチ転向以前の諸著作とナチ時代の著作・講義・講演・書簡などに用いられている語彙の変遷を比較分析することはもちろん、当時のナチズムの思想と運動全体を把握しながら、ナチ・イデオログやナチに同調した知識人たちが用いたナチ特有の語彙・語法・文体・レトリックの分析をも行い、これとハイデガーのそれとを比較することである。今回、本論文においては端緒的にしか触れることはできなかったが、ハイデガーの「民族共同体」、「大地と血」、「統制」、「指導者」、「闘争」、「はるかなる任務」、「ユダヤ化」、「嵐」、

「勃興」(または「開闢」)などの諸概念とナチズムのレトリックとのかかわりを、当時の社会的・思想的文脈、ナチズムの思想と運動全体、そしてヒトラーの『我が闘争』や突撃隊、エルンスト・ユンガーやカール・シュミットなどを初めとする文筆家の語彙・語法・文体・レトリックとの関連において、究明することが必要となろう。

第三に、ハイデガー自身がナチズムへの関与を、自らの哲学思想とは直接無関係のたんなる政治的な行動と見なしたのではなくて、その反対に自らの哲学思想の基盤のうえでナチズムにコミットしたことを認めているとすれば、そして彼が生涯にわたってナチズムの近傍から離れることがなかったのだとすれば、彼の当時の哲学思想のなかに、ナチ革命へ向けての彼自身の政治的出撃を可能にした通路、そしてこれを準備した思想的諸要素を抉剔するだけではなくて、彼の哲学的営為の全過程にわたって、ナチズムとの関連、そして彼の思想とナチズムとの親近性または親和性を追跡することが必要となろう。そして、そのうえで、ハイデガー・ナチズムにかんする歴史的研究と哲学的研究とを真に総合させなければならないであろう。私が他の箇所ですべて書いたように、「ハイデガー・ナチズムにかんする研究の進展がさらに明らかにしたのは、今回の論争の大きなきっかけとなったファリアスやオットの歴史学的な研究成果のうえに立って、ハイデガーとナチズムとのかかわりを、初期の諸著作からいわゆる『転向』をへて晩年へといたるまでのハイデガーの思想の営みの全プロセスに深く分け入り、その哲学思想の深層にまで肉薄して行って、…全面的に解明するという哲学的研究の必要性である。ハイデガー・ナチズムをその真相において解明するという課題は、歴史学者の研究と哲学者の研究とを真に内的に結合することによって、初めてその全体を完成するであろう。」<sup>(182)</sup>

第四に、ハイデガーがおのれの政治的・道義的責任にかんする発言をほとんど避け、この責任をとるどころか、責任の所在を認めようとしなかったこと、そしてさらに、数少ない真実と多くの虚偽に満ちた「弁明」を事実と称して自ら後世に伝えようとしたことは、この世界的な哲学者の哲学者としての責任の問題だけにとどまらず、その人間としての人格上の問題、そしてさらにその思想上の問題をもわれわれに提起することになる。とりわけ哲学者の場合には、その人の生き方と思想、哲学者としての理論と人間としての彼の実践とが分かちがたく結び付いているのが通例であるから、ハイデガーの人間としての言動に問題があるとすれば、それは思想家としての彼の哲学思想のなかに問題があることになる。とりわけ、ナチ革命をおのれの政治的出撃のための決断と結びつけてこれを歴史的カイロス(好機)だと把握して政治的实践に身を投じたハイデガーの歴史観、ハイデガーによるナチ的な立場からの時代の診断、そしてこれにもとづく時代変革の方向と方法の提示とが歴史の審判によって破産せざるをえなかったのだとすれば、ハイデガーの哲学思想そのものに問題点と欠陥とがあることは明らかであり、その問題点と欠陥が彼の哲学思想の内的深層にまで肉薄して分析されなければならないであろう。この作業が彼の哲学思想の全面的な否定を意味するものであってはならないことはもちろんである。

かつてまったく不当な理由で刑死しなければならなかったソクラテスの死の真相がソクラテス問題として後世の人々に残されたように、『存在と時間』の著者であり、世界的な名声をもつ哲学者、ハイデガーが20世紀最大の犯罪のひとつであるナチズムになぜ加担しえたのかということの真相をめぐって、ハイデガー・ナチズム問題が、そしてこれと密接に関係してハイデガーの哲学思想の再評価をめぐらる問題が、われわれに課されているといえよう。先に掲げた諸課題が十分に解明されるまでは、ハイデガーとナチズムおよびハイデガー哲学とナチズムの問題は、21世紀においてもなおひとつの焦眉の熱い哲学論争の対象となり続けることであろう。

2002年1月31日

- 注 (1) Hugo Ott, Martin Heidegger-Unterwegs zu seiner Biographie, Campus Verlag, S. 230ff. オット『マルティン・ハイデガー—伝記への途上で』未来社, 353~355頁
- (2) 例えば、茅野良男氏は、『人類の知的遺産75・ハイデッガー』（講談社）の巻末に付した「ハイデッガー年表」のなかで、ハイデガーの「事実と思想」に記されていることにたいしていささかの疑念も抱くことなく、これをまったくの事実としてそのまま年表に記載している。この年表は、それ自体としては労作でありながらも、ハイデガー派の典型的なやり方を示すものとして、長く歴史に残ることであろう。
- (3) Hermann Heidegger, Vorrede, in Martin Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, Vittorio Klostermann, S. 6
- (4) Otto Pöggeler, Den Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau32, no. 1/2, S. 27
- (5) Vgl. Gespräch mit Martin Heidegger, Der Spiegel, Nr. 23, 1976, S. 193~219
- (6) 奥谷浩一「ハイデガーの弁明—『1933/34年の学長職。事実と思想』の真実—」, 札幌唯物論研究会『唯物論』, 第46号, 57~71頁 (2001年10月) を参照されたい。なお、ハイデガーとナチズムとの関係を論究した私の論文としては、そのほかに「トム・ロックモアによるハイデガー・ナチズムの批判」, 同上書, 第41号 (1996年10月), 「シルヴィオ・ヴィエッタのハイデガー擁護論 (1)」, 同上書, 第44号 (1999年10月), 「シルヴィオ・ヴィエッタのハイデガー擁護論 (2)」, 同上書, 第45号 (2000年10月) がある。併せて参照していただければ幸いである。
- (7) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 21
- (8) Rainer Alisch, Heideggers Rektorat im Kontext, in Wolfgang Fritz Haug (Hg.), Deutsche Philosophen 1933, Argument, S. 69ff. なお、このライナー・アリーシュの論文は、Hugo Ott, Martin Heidegger als Rektor der Universität Freiburg i. Br. 1933/34 (I), in Zeitschr. d. Breisgau Geschichtsvereins "Schau ins Land", Nr. 102, S. 121~136のなかにあげられている調査結果にもとづいている。
- (9) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 23
- (10) Ott, Martin Heidegger-Unterwegs zu seiner Biographie, S. 139. オット, 同上訳, 206頁
- (11) Schneeberger, Nachlese zu Heidegger, Bern, 1962, S. 15. シュネーベルガー『ハイデガー拾遺』, 山本尤訳, 未知谷, 37頁
- (12) Ibid., S. 16. 同上訳, 38~39頁
- (13) Ott, ibid., S. 140. オット, 同上訳, 209頁
- (14) Victor Farias, Heidegger und Nationalsozialismus, S. Fischer, S. 138. ヴィクトル・ファリアス『ハイデガーとナチズム』, 山本尤訳, 名古屋大学出版会, 119~120頁
- (15) Ott, ibid., S. 142. オット, 同上訳, 212頁
- (16) Ibid., S. 10. 同上訳, 12頁

- (17) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 21
- (18) Vgl. Ott, *ibid.*, S. 142. オット, 同上訳, 212頁を参照。また Alisch, *ibid.*, S. 70および Bernd Martin (Hg.), *Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, S. 196~197をも参照されたい。
- (19) Schneeberger, *ibid.*, S. 16. シュネーベルガー, 同上訳, 38頁
- (20) Gespräch mit Martin Heidegger, *ibid.*, S. 193
- (21) オイゲン・フィッシャーは、1927年にベルリンのカイザー・ヴィルヘルム人類学・遺伝学・優生学研究所を創立した人物で、この研究所はナチによる優生思想と人種学を支え、やがて強制収用所におけるナチ親衛隊の人体実験へとつながる悪名高い研究所であった。ハイデガーとフィッシャーとの関係はこの催しのなかで結ばれ、まもなくベルリン大学学長となったフィッシャーはハイデガーを自らの大学に招聘するなど、二人は親しい間柄となり、この関係はフィッシャーがフライブルクに住むようになっていっそう深まり、第二次大戦後も続いたという。Farias, *ibid.*, S. 119. ファリアス, 同上訳, 102頁を参照のこと。
- (22) Farias, *ibid.*, S. 215. ファリアス, 同上訳, 186頁。ハンス・ハイゼ (1891~1976) は哲学者で、第一次世界大戦では前線兵士として従軍し、ケーニヒスベルク大学員外教授時代の1933年5月1日にハイデガーと同じくナチに入党、同年秋に同大学学長となる。1936年秋からは、ゲオルク・ミツシュの後任としてゲッティンゲン大学に招聘される。ニーチェ・アルヒーフの全集版の委員やカント協会の議長、『カント研究』の編集者などを務め、ナチ教師同盟、ナチ・ドイツ講師同盟などで活動した。George Leaman, *Heidegger im Kontext*, S. 49を参照のこと。
- (23) *Ibid.*, S. 216. 同上訳, 188頁
- (24) Martin Heidegger / Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963, S. 149 『ハイデッガー=ヤスパース往復書簡 1920-1963』名古屋大学出版会, 232頁
- (25) *Ibid.*, S. 151. 同上訳, 236~237頁
- (26) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 23
- (27) *Ibid.*, S. 22
- (28) *Ibid.*, S. 23~24
- (29) Georg Picht, *Die Macht des Denken*, in *Erinnerung an Martin Heidegger*, S. 245
- (30) Heideggers Brief an Wilhelm Stuckert von 28. Aug. 1934. Vgl. Farias, *ibid.*, S. 269. ファリアス, 同上訳, 233頁
- (31) Gespräch mit Martin Heidegger, *ibid.*, S. 193
- (32) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 33
- (33) *Ibid.*, S. 33
- (34) この大学基本法の改正の内容については、ナチ機関紙『アレマン人』が1933年8月21日付けの記事で「バーデンの大学制度の完全な改革—文部大臣が学長を任命し、学長が学部長を任命する」という見出しでその内容を紹介している。また、同年8月23日の『フライブルク新聞』もまた、「大学制度の改革。バーデンは指導者原理に則った改革の道の先頭を行く」という見出しでこれを紹介している (Schneeberger, *ibid.*, S. 113ff. シュネーベルガー, 同上訳, 171頁以下を参照のこと) ほか、Bernd Martin (Hg.), *Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'*, S. 173~175にも、ハイデガーが文部大臣にあてた草案の全文が収録されている。それらによれば、この改正内容は「学長は大学の指導者である。在来の (小および大) 評議会のすべての権限は学長に帰属するものとする。学長は文教・法務大臣により正教授のなかから任命され、大臣に宣誓するものとする」、「評議会は議決をすることはできない。それゆえ、票決は行われない」、「学部の決議は行われない。」「学部長 (部門長) および評議員の任期は学長が決定する。学長はいつ何時でも学部長 (部門長) および評議員を解任することができる」などが骨子となっており、従来の大学の自由と学部自治・民主主義を根底から踏みこむ、きわめて独裁的・ファッショ的なものであったことがわかる。
- (35) フランツ・ケルバー (1901~1945) については、Farias, *ibid.*, S. 135ff. ファリアス, 同上訳, 116頁以下, および Bernd Martin (Hg.), *Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'*, S. 46をも参照されたい。
- (36) Otto Pöggeler, *Den Führer führen? Heidegger und kein Ende*, *Philosophische Rundschau* 32, no. 1/2, S. 47

- (37) ハイデガー『形而上学の根本概念』のなかには、例えば「キリスト教教義学によって古代哲学は一つの特定の把握へと押し込まれ、この把握がルネサンス、ヒューマニズム、ドイツ観念論を通じてずっと維持された。これの非真理性をわれわれは今日やっと徐々に概念把握し始めている。多分一番最初の人にはニーチェであっただろう。」(Martin Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik*, Gesamtausgabe Bd. 29/30, S. 64. ハイデガー全集第29/30巻, 71頁)「われわれはある欠乏に襲われているのか。何か欠乏というようなものがわれわれを襲っているか。この問いにわれわれは返答するだろう。ある欠乏などというものではない。いたるところに動揺、危機、破局、欠乏がある。つまり、今日の社会的貧困、政治的混乱、学問の無力、芸術の空洞化、哲学の基盤喪失、宗教の無力がある。間違いなくいたるところに欠乏がある。」(Ibid., S. 243. 同上訳, 271頁)などの叙述が見られる。これらがハイデガーの政治的「出撃」の前提にあったであろう。
- (38) Schneeberger, *ibid.*, S. 7. シュネーベルガー, 同上訳, 26頁
- (39) Bernd Martin (Hg.), *Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'*, S. 84
- (40) Eric Weil, *Le Cas Heidegger*, in *Lignes*, 2 February 1988, p. 140
- (41) Ott, *ibid.*, S. 133~134. オット, 同上訳, 197~198頁
- (42) George Leaman, *Heidegger im Kontext*, S. 104
- (43) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität. Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, Vittorio Klostermann, S. 10. 例えば、ウォーリンによれば、「彼が演説のなかで強調しているさまざまな結合—労働奉仕・防衛奉仕・学問奉仕の目的は、さまざまな能力の(近代的な)専門分化がなくなり、ドイツ民族の歴史—精神的命運の実現という共通の目的の下にすべての営みが統合されるような、全包括的な全体国家の創造であった。」(Richard Wollin, *The Politics of Being*, Columbia University Press, p. 88. ウォーリン『存在の政治』155頁)
- (44) *Ibid.*, S. 15
- (45) Martin Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, Gesamtausgabe Bd. 40, S. 53. ハイデガー『形而上学入門』, 川原栄峰訳, 平凡社, 88頁
- (46) *Ibid.*, S. 53. 同上訳, 88頁
- (47) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität*, S. 16
- (48) Schneeberger, *ibid.*, S. 156. シュネーベルガー, 同上訳, 229頁
- (49) *Ibid.*, S. 121~122. 同上訳, 181頁
- (50) エルンスト・ユンガーと保守革命または反動的モダニズム,そしてナチズムとの関係については、ジェフリー・ハーフ『保守革命とモダニズム』(岩波書店)に詳しい。
- (51) Ott, *ibid.*, S. 146. オット, 同上訳, 217頁以下
- (52) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität*, S. 11
- (53) *Ibid.*, S. 13
- (54) *Ibid.*, S. 28
- (55) *Gespräch mit Martin Heidegger*, *ibid.*, S. 198
- (56) Karsten Harries, *The Rectorate 1933/34: Facts and Thought*, *Review of Metaphysics* 38, p. 483, note 6. なお、われわれは後にシュタウディングガー事件について触れるが、ハイデガーはシュタウディングガーを告発する以前に、そのための証拠を収集しようとして、自分の腹心であった物理学講師アルフォンス・ビュール博士をチューリヒに派遣して調査にあたらせた。このビュールはハイデルベルクのフィリップ・レーナルトのもとで学位を取得した弟子であり、アーリア系物理学の創始者の弟子にふさわしく、彼もまたナチ世界観と人種理論にもとづいて活動していた。Ott, *ibid.*, S. 209ff. オット, 同上訳, 323頁以下を参照されたい。
- (57) Schneeberger, *ibid.*, S. 214. シュネーベルガー, 同上訳, 309頁
- (58) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität*, S. 18
- (59) Farias, *ibid.*, S. 160ff. ファリアス, 同上訳, 139頁以下
- (60) ヒトラー『我が闘争』下, 角川文庫, 417, 419頁
- (61) Martin Heidegger, *Die Selbstbehauptung der deutschen Universität*, S. 14
- (62) *Ibid.*, S. 9

- (63) Vgl. Otto Pöggeler, Den Führer führen? Heidegger und kein Ende, Philosophische Rundschau 32, no. 1/2
- (64) Martin Heidegger, Die Selbstbehauptung der deutschen Universität, S. 15
- (65) Ibid., S. 12
- (66) Ibid., S. 19
- (67) プラトン全集第11巻, 『国家』, 岩波書店, 453頁
- (68) Richard Wollin, The Politics of Being, Columbia University Press, p.90~91. ウォーリン『存在の政治』157~158頁
- (69) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 29
- (70) Diels/Kranz, Die Fragmente der Vorsokratiker, Bd. 1, S. 162
- (71) Chales H. Kahn, The Art and Thought of Herakitus, Cambridge, p. 208
- (72) Farias, ibid., S. 273. ファリアス, 同上訳, 237頁
- (73) Ott, ibid., S. 150. オット, 同上訳, 223頁。
- (74) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 34
- (75) 例えば, 本論ですでにその名前をあげたフライブルク大学の同僚, ヴォルフガング・アリーが1933年5月26日付でハイデガーにあてた手紙を参照されたい。Vgl. Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 167
- (76) Farias, ibid., S. 119. ファリアス, 同上訳, 143頁
- (77) Schneeberger, ibid., S. 91. シュネーベルガー, 同上訳, 141頁
- (78) Hermann Heidegger, Vorrede, in Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 5
- (79) Farias, ibid., S. 312. ファリアス, 同上訳, 270頁
- (80) Ibid., S. 347. 同上訳, 301頁
- (81) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 33
- (82) Schneeberger, ibid., S. 135~136. シュネーベルガー, 同上訳, 200頁
- (83) Farias, ibid., S. 204. ファリアス, 同上訳, 177頁
- (84) Schneeberger, ibid., S. 171. シュネーベルガー, 同上訳, 248頁
- (85) Farias, ibid., S. 270. ファリアス, 同上訳, 234頁
- (86) Ibid., S. 130. 同上訳, 153頁
- (87) Ott, S. 181ff. オット, 同上訳, 278頁以下
- (88) Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 196~197
- (89) Ibid., S. 105, 115
- (90) ウルリヒ・ジークが発見して1989年12月22日の『ツァイト』誌上で発表したことだが, ハイデガーが1929年10月20日付けでヴィクトル・シュヴェーラー宛に送った手紙のなかに, 「問題なのは, われわれのドイツの精神生活に再び真に土着的な力と教育者を供給するか, それとも強まっているユダヤ化にそれを…最終的に引き渡すかの選択の前にわれわれが立っていることを今ここでじっくり考えることです[傍点筆者]」という一節があり, ハイデガーの反ユダヤ的言辭として話題となった。この手紙は, Rüdiger Safranski, Ein Meister aus Deutschland, Carl Hanser Verlag, S. 299 (ザフランスキー『ハイデガー—ドイツの生んだ巨匠とその時代』, 山本尤訳, 法政大学出版局, 377~378頁)などに引用されていて, 読むことができる。なお, 戦後の政治的浄化委員会では, ハイデガーの反ユダヤ的言動として, 彼の恩師フッサールにたいする周知の態度が問題になったほか, ユダヤ系であったスィーラシ夫人が彼の家を訪問するのを禁じたというアドルフ・ランベの証言, ハイデガーが公開のスピーチで「体系の時代におけるユダヤ人の支配」や「異邦人」としてのユダヤ人について語ったというヴァルター・オイケンの証言が取り上げられた。これについては, Bernd Martin (Hg.), Martin Heidegger und das 'Dritte Reich', S. 195~197を参照されたい。
- (91) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 35
- (92) Schneeberger, ibid., S. 231. シュネーベルガー, 同上訳, 332頁
- (93) 上記注(34)を参照されたい。

- (94) Ott, S. 192. オット, 同上訳, 294頁
- (95) Ibid., S. 218. 同上訳, 337頁
- (96) Ibid., S. 229. 同上訳, 353頁
- (97) Farias, ibid., S. 212~213. ファリアス, 同上訳, 184~185頁
- (98) Ibid., S. 214. 同上訳, 186頁
- (99) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 35
- (100) Schneeberger, ibid., S. 231. シュネーベルガー, 同上訳, 332頁
- (101) Farias, ibid., S. 269ff. ファリアス, 同上訳, 233頁以下
- (102) Ibid., S. 280ff. 同上訳, 243頁以下
- (103) Ott, S. 213. オット, 同上訳, 329頁
- (104) Ibid., S. 183. 同上訳, 280頁。なお、ハイデガーが言及している「ユダヤ人フレンケル」とは、1933年夏学期までフライブルク大学の古典文献学の正教授であった彼の同僚のことである。したがって、ハイデガーのこの所見は最近まで同僚であった者にかんする情報をも提供しており、密告とも見られかねない要素を含んでいる。茅野良男氏は『人類の知的遺産75・ハイデッガー』（講談社）の「ハイデッガー年表」のなかで、ハイデガーがこのパウムガルテンにかんする所見をゲッティンゲンの「ナチ大学教師連盟」「NSLB」宛に送ったにもかかわらず、きわめて奇妙なことに、これをたんに「ゲッティンゲン大学教授団」宛に送ったとしている。これは、ハイデガー派がハイデガー・ナチズムの痕跡を消そうとする仕方と見られてもやむをえないであろう。同書263頁を参照されたい。
- (105) Martin Heidegger / Karl Jaspers Briefwechsel 1920-1963, S. 169 『ハイデッガー＝ヤスパース往復書簡 1920-1963』名古屋大学出版会, 266~267頁
- (106) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 32~33
- (107) Ott, S. 85. オット, 同上訳, 122頁
- (108) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 36
- (109) Ott, ibid., S. 218. 同上訳, 337頁
- (110) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 34. ファリアスによっても、ハイデガーはこの学長演説以外にもハイデルベルク、キール、チュービンゲンなどでも講演を行ったが、「ドイツの大学の『革命化』を訴えるハイデガーのいくつかの講演が教師と学生だけに關係して、学問的な研究には立ち入っていない」（Farias, ibid., S. 210. ファリアス, 同上訳, 182頁）。
- (111) Ibid., S. 38
- (112) Ibid., S. 35
- (113) Ibid., S. 37
- (114) Farias, ibid., S. 140~141. ファリアス, 同上訳, 120~121頁
- (115) Ott, ibid., S. 228. 同上訳, 351頁
- (116) Ibid., S. 234~235. 同上訳, 364頁
- (117) Ibid., S. 237. 同上訳, 367頁
- (118) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 23
- (119) Ibid., S. 38
- (120) Farias, ibid., S. 263. ファリアス, 同上訳, 229頁
- (121) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 38
- (122) Ibid., S. 37~38
- (123) Ibid., S. 41
- (124) Ott, ibid., S. 156. 同上訳, 233~234頁
- (125) Ibid., S. 282. 同上訳, 437~438頁
- (126) Martin Heidegger, Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken, S. 40
- (127) Gespräch mit Martin Heidegger, ibid., S. 204
- (128) Ott, ibid., S. 238. 同上訳, 370頁
- (129) Farias, ibid., S. 311. ファリアス, 同上訳, 270頁
- (130) Ibid., S. 258. 同上訳, 224頁

- (131) Ibid. , S. 245ff. 同上訳, 212頁以下
- (132) Schneeberger, *ibid.* , S. 204. シュネーベルガー, 同上訳, 296頁
- (133) Ibid. , S. 205. 同上訳, 297頁
- (134) Ibid. , S. 205~206. 同上訳, 298頁
- (135) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 40
- (136) Gespräch mit Martin Heidegger, *ibid.* , S. 203~204
- (137) Karl Löwith, *Mein Leben in Deutschland vor und nach 1933*, J. B. Metzler, S. 57. カール・レーヴィット『ナチズムと私の生活』, 秋間実訳, 法政大学出版局, 93頁
- (138) Martin Heidegger, *Einführung in die Metaphysik*, Gesamtausgabe Bd. 29/30, S. 208. ハイデガー『形而上学入門』, 同上訳, 323頁
- (139) Ibid. , S. 53. 同上訳, 88頁
- (140) Martin Heidegger, Schelling: *Vom Wesen der menschlichen Freiheit*, Gesamtausgabe Bd. 42, S. 40~41
- (141) Martin Heidegger, Nietzsche: *Der Wille zur Macht der Kunst*, Gesamtausgabe Bd. 43, S. 193. ハイデガー『ニーチェ, 芸術としての力への意志』, 全集第43巻, 187頁
- (142) Martin Heidegger, Hölderlins Hymne "Der Ister", Gesamtausgabe Bd. 3, S. 106. ハイデガー『ヘルダーリンの賛歌「イスター」』, 全集第53巻, 106頁
- (143) Martin Heidegger, *Holzwege*, Gesamtausgabe Bd. 5, S. 246~247. ハイデガー「ニーチェの言葉『神は死せり』」, 『杣道』所収, 全集第5巻, 275頁
- (144) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 41
- (145) Ibid. , S. 41
- (146) Gespräch mit Martin Heidegger, *ibid.* , S. 204
- (147) Vgl. Schneeberger, *ibid.* , S. 223~230. シュネーベルガー, 同上訳, 321~330頁を参照のこと。
- (148) Farias, *ibid.* , S. 311. ファリアス, 同上訳, 270頁
- (149) Ott, *ibid.* , S. 213. オット, 同上訳, 329頁。この件にかんしては, Ott, *Martin Heidegger und Nationalsozialismus*, Herausg. Gehthmann-Siefert und Pöggeler, Heidegger und die praktische Philosophie, Suhrkamp, S. 72~73 (邦訳『ハイデガーと実践哲学』法政大学出版局, 73~75頁)をも参照されたい。したがって, この件がナチによるハイデガーの言論禁止措置であると理解するのは, 早計に過ぎるということになる。
- (150) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 22
- (151) Ibid. , S. 41
- (152) Ibid. , S. 41
- (153) Farias, *ibid.* , S. 336. ファリアス, 同上訳, 292頁
- (154) Ott, *ibid.* , S. 259. 同上訳, 401頁
- (155) Bernd Martin (Hg.), *Martin Heidegger und das 'Dritte Reich'*, S. 106. 本論文27頁をも参照されたい。
- (156) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 42
- (157) Ott, *ibid.* , S. 266. 同上訳, 413頁
- (158) Farias, *ibid.* , S. 366~367. ファリアス, 同上訳, 319頁
- (159) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 42
- (160) Farias, *ibid.* , S. 347. ファリアス, 同上訳, 301頁
- (161) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 42
- (162) ファリアスの叙述はレーヴィットの証言と少々食い違っている。レーヴィットは, このプラハ国際会議(第8回国際哲学会議)のテーマが「民主主義の危機」であり, 「これをめぐってとりわけフランス人とチェコ人がいきりたっていたのにたいして, ドイツからきた少数の代表たち(ハイゼ, ヘルパハ, エムゲ)は, 目立たないようにしており, ドイツのすべての諸原則と矛盾するこの国際的環境のなかで居心地が悪かった」(Löwith, *ibid.*, S. 103. レーヴィット, 同上訳, 168頁)と述べているから, そもそもこの国際哲学会のテーマがハイデガーの関心と呼ばなかったものであったし, すでに述べたハンス・ハイゼ, 1931年に入党したナチ最初の公然たる哲学教授カール・アウグスト・エムゲといったナチ哲学者もまたこれに参加していたのである。エムゲについては, George Leaman, *Heidegger*



- im Kontext, S. 37~38を参照のこと。
- (163) Farias, *ibid.*, S. 330. ファリアス, 同上訳, 287頁
- (164) Ott, *ibid.*, S. 250. 同上訳, 385頁
- (165) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 42
- (166) *Ibid.*, S. 39
- (167) *Ibid.*, S. 25
- (168) *Ibid.*, S. 26
- (169) *Gespräch mit Martin Heidegger*, *ibid.*, S. 193
- (170) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 40
- (171) プラトン『国家』, プラトン全集第11巻, 岩波書店, 400頁
- (172) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 25
- (173) *Ibid.* 25
- (174) *Ibid.* 24~25
- (175) この文章は、ハイデガーが1949年にブレーメンで行った講演のなかのもともとの一節である。講演のもとになった原稿の原文は、Wolfgang Schirmacher, *Technik und Gelassenheit: Zeitkritik nach Heidegger*, 1983, S25に収録されている。ところが、ハイデガーはこれを公刊するにあたって、以下に掲げるように、もともとの原文のかなりの部分を削除してその意味を跡形もなく抹消してしまった。「農業は今日機械化された食料産業である。」(Martin Heidegger, *Die Technik und die Kehre*, Neske, S. 14. 邦訳はハイデガー『技術論』, 小島・アルムブルスター訳, 理想社, 31頁) この問題とハイデガーのテクノロジー論全体の批判については、Tom Rockmore, *On Heidegger's Nazism and Philosophy*, California University Press, p.204 ff. (邦訳は、ロックモア『ハイデガー哲学とナチズム』, 奥谷浩一・小野滋男・鈴木恒夫・横田栄一訳, 北大図書刊行会, 275頁以下, とりわけ320頁) を参照されたい。
- (176) Farias, *ibid.*, S. 372ff. ファリアス, 同上訳, 324頁以下
- (177) Martin Heidegger, *Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken*, S. 39
- (178) *Ibid.*
- (179) *Ibid.*
- (180) *Ibid.*, S. 43
- (181) Jürgen Habermas, *Heidegger-Werk und Weltanschauung*, in Farias, *ibid.*, S.14. ファリアス, 同上訳, 4頁
- (182) 奥谷浩一「訳者あとがき」, ロックモア『ハイデガー哲学とナチズム』, 同上訳, 478頁

追記：注には、読者の便宜を考慮して、外国語文献のうち日本語訳のあるものの頁数を掲げておいたが、本論文においては訳文は必ずしもその日本語訳にしたがってはいない。

Tatsachen und Fiktionen in Heideggers  
“Das Rektorat 1933/34. Tatsachen und Gedanken”

OKUYA, Koichi

Abstract

Martin Heidegger's essay "The Rectorate 1933/34: Facts and Thoughts", written after WWII, discusses the philosopher's pre-war tenure as the rector of Freiburg University and a member of the Nazi Party. Meant to be a testimony of that time, he entrusted the essay to his literary executor, and the essay was first published in 1983, after Heidegger's death. It may be read as an apologia and has served as an authoritative account of Heidegger's Nazism. However, when Heidegger describes his deep involvement with the Nazis, his obfuscations and omissions end up contradicting the facts. He portrays himself as a critic of the Nazis, except where he cannot but admit his complicity, in which case he downplays his involvement. In the present paper I reveal Heidegger's artifices and fictions by analyzing mainly this Heidegger's essay, which has not been sufficiently studied in Japan, based on the past two decades of progress in studies of Heidegger and Nazism. At the same time, I illustrate historical facts regarding Heidegger's Nazism and reveal Heidegger's character and the philosophical problems that are buried in this short essay.

Keywords: Heidegger's philosophy, Nazism, the will to power, struggle, the distant command

(おくや こういち 本学人文学部教授 哲学専攻)